393.3
I.89

戰畧と戰術

陸軍少將
伊藤政之助

③

0056756000

0056756-000

393. 3−I89ウ

戦略と戦術

伊藤政之助・著

皇国青年教育協会

昭和17

AJD

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第67条の規定に基づき、平成12年5月1
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

393.3
I.89

謀畧と戰術

陸軍少將

伊藤政之助

戰略と戰術

陸軍少將 伊藤政之助

皇國青年教育協會版

帝國圖書館藏
3933
I・89

戰略と戰術

陸軍少將 伊藤政之助

皇國青年教育協會版

946
136

はしがき

今は、大戰爭の世界だ。大戰略の時代だ。

戰爭を解するには、戰略及び戰術の知識が無くてはならぬ。一般國民諸君に對し、戰略・戰術のいかなるものなりやを、古今東西の實例について、解りやすく面白く說いたつもりだ。

しかし、本書の目的はそれだけではない。

戰略といふ一つの窓から、大東亞戰爭の雄渾なる構想を展望し、八紘一宇の世界を髣髴させようといふのだ。

そこで、東西古今の戰略・戰術を總まくりするうちに、隨所に日本の戰略が出て來る、日本人の特性が現れる。

そして結論は、日本軍の戰略はうまい、日本人はえらい、日本國は神の國、天子さまの國、ありがたい國だ、といふことである。

紀元二千六百二年初夏　珊瑚海々戰の捷報を聞くの日

陸軍少將　伊藤政之助

目次

裝幀……暮田延美

序章……七

一　西洋人の戰略……一五

エヂプト……一七

エヂプトの戰敗……エヂプトの回復……エヂプトの攻勢

バビロンとアッシリヤ……二九

バビロンの戰法……アッシリヤの戰法

ペルシヤ……四三

駱駝戰術……涸水戰術

ギリシヤとローマ……四七

マラトンの戰……サラミスの海戰……ファランクス戰術……
エパミノンダスの戰術……マケドニヤ槍隊……アレキサン
ダー大王の戰術……アルベラの戰……ローマのレギオン隊
……ゲルマニヤ人の戰術
東方民族……八一
アッチラの戰術……ツールの戰……君府の陷落
火器出現以後の戰術……九三
グスタフ・アドロフ王の戰術……フレデリック大王の戰術
……散兵戰術……縱隊戰術……ナポレオンの戰略
現代戰における歐米人……一〇七
二　東洋人の戰略……一一三
支那合戰の始……一一四
共工の亂……黄帝の戰法
太公望の戰法……一一八
寡兵必勝の陣……牧野の戰
春秋戰國時代……一四三
宋襄の仁の戰……三舍を避くの戰……會稽の恥、臥薪嘗膽
……減竈の計……火牛の計……孫呉の兵法
漢楚三國時代……
垓下の戰……鴻門の會……韓信背水の陣……赤壁の戰……孔
明の計
その後の支那……一六八
成吉思汗の戰略……支那戰史鳥瞰

三　日本人の戰略……二〇一
神代の大作戰……二〇四
源平一ノ谷の戰……二一四
戰國時代の戰……二三五
川中島の戰……桶狹間の戰……山崎の戰……關ヶ原の戰
明治以前の戰略大觀……二五六
現代の戰略……二六〇
日清戰爭……日露戰爭……支那事變……大東亞戰爭
結　言……二七八

序　章

戰略といふ言葉が近頃大流行である。

どの國が戰略が上手だとか、何の誰が戰略がうまいとか、寄るとさはると戰略の話で持ち切りである。

いかにも目下は東西南北、全世界が戰雲に包まれてゐるから、さういふ話の出るのも無理はない。のみならず、戰略といふことは、決戰體制下の國民として一通り心得て置く必要のあるものである。

今は全く戰爭の世界で、やれ、爆擊だ、奇襲だ、眞珠灣に突入した、珊瑚海で敵艦を轟沈した、機動で敵を破つた、迂回して敵を虜にした、やれ、落下傘だ、夜襲だ、敵前上陸だなどと、新聞の朝刊にも夕刊にも、雜誌のどの頁にも戰爭の記事が滿載されて、われらの愛國心をいやが上にも高調させてゐる。

この時に當り、われらは戰爭といふものはどんなふうに戰はれ、そして負け勝ちはどんな工合につくものであるか、それらのことをちやんと知つてゐると、新聞を讀んでも畫報を見ても、戰爭の筋道がわかり、人と話をするにも、よく互の意味が通ずるし、また興味もあるといふものだ。

そこで世間でよく言ふ所の戰略・戰術とは、どんなものであるか、國民の誰にもわかるやうに、古今の例を引いてお話しよう。

戰略と戰術といふことばは、同じ意味で使はれることが多い。通俗には戰略といつても戰術といつても差支ないのであるが、それでも嚴密にいへばその間に多少の差異がないでもない。

大體からいへば、戰略とは、軍隊を戰爭のできるやうに、都合よくお膳立てすることを云ひ、戰術とは、敵と叩き合ふに都合よく手配することと思へばよいのである。

日本の例で云へば、關ヶ原の戰はこのことを説明するに最も適切であるから、簡單に述べてみる。

德川家康が石田三成等の西軍を攻擊するため、關東からはる〴〵關ヶ原方面に前進するに當つて、彼はその軍を二つに分け、一は家康が自ら率ゐて東海道を進み、他の一はその子秀忠を將として中山道を進ましめ、美濃平地で兩軍相合し、その全軍勢を以て敵を攻擊しよう

とした。このやうに、戰爭のうまく出來るやうに軍隊を手分けして行くのが、普通に戰略と云はれるものである。兵書では關ヶ原の一戰に家康のとつた方略を分進合擊の戰法と云ふ。

關ヶ原の戰の圖

昔からの名將は皆この式の戰略を採つたものだ。殊に達人と云はれたのはナポレオンである。それでナポレオンのことを、分進合擊の戰略の發明者のやうに言ふものさへある。しかし、前いふとほり、名將といはれるほどの武將は、東西を問はず、皆この戰略を活用してゐるのである。我が源九郞義經、信長、秀吉、家康等々は、ナポレオンより數百年前に皆これを立派に實行してゐる。

さて、家康がいよ〳〵關ヶ原の隘路にある敵を攻擊するに當り、某隊を右翼に、某隊を中央に、某隊を左翼に、某隊を豫備隊として後方に控へしめ、攻擊を開始した。このやうに戰鬪に都合のよいやうに軍隊を配置するのが、普通に戰術と唱へられてゐるものである。家康は史書に兵を用ふること神の如しと云はれてゐるくらゐで、獨り我が國での名將だけでなく、世界名將番附の上でも大關格の地位におかるべき英雄である。

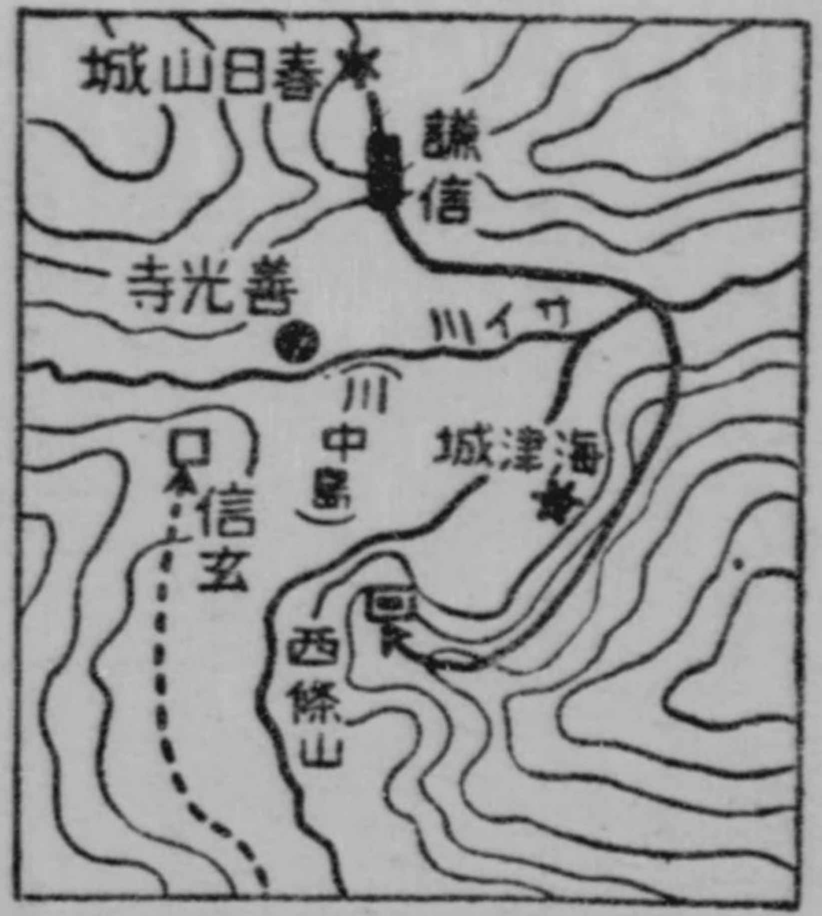
も一つの例を、我が川中島の戰に採つて見る。上杉謙信は居城春日山を出で、善光寺附近から道を東南に轉じ、信濃川を渡つて敵地に乘り込み、武田四天王の一人である高坂彈正の守つてゐる海津城(今の松代)の邊を素通りして、その西南方の西條山に陣を取り、信玄の度膽を拔いた。この行動は實に大膽不敵、古今の戰史にその例を見ない程の冒險作戰で、昔のカルタゴの勇將ハンニバルを凌ぐものである。そしてこの行動は、何れかと云へば戰略に屬するものである。

謙信のこの奇拔な戰略に對し、一方の大將信玄は、一時は驚いたが、彼もまたなか〳〵の天才的名將であつたから、徐ろに善光寺の西南にある茶臼山の陣地を撤し、速かに海津の城に兵を集め、今度はあべこべに、西條山にある謙信を挾擊せんものと全軍を二つに分け、信玄自ら主力を提げ、夜密かに川中島の八幡原(現にその記念碑あり)に出で、他の一隊をば

山手の方に廻して上杉勢を奇襲させ、謙信の退いて來るのを八幡原に待ちうけて殲滅しようといふ戰略をめぐらした。そして信玄は、今度こそ謙信の首を擧げんものと大いに意氣込んだ。

然るに、何ぞ圖らん、謙信はさすがに名將であつて、信玄の此の手に乘るやうな凡將ではなかつた。彼は早くも信玄の計略を察知してその裏を掻かんと、これ又夜密かに西條山の陣地を引き拂ひ、不意に信玄の本陣たる八幡原に向かひ、世に云ふ車懸かりの戰法を以て奇襲を試みた。

川中島の戰の圖



この時謙信は、連錢芦毛の駒に跨がり、單騎信玄の帷幕に斬り込み、『信玄いづくにかある、謙信こゝに推參せり、尋常に勝負せよ。』と叫び、二尺八寸の名刀を振り翳して信玄に斬りつけた。

あまりに急なので、信玄刀を拔く暇なく、軍配の團扇を以てこれを受け止めたが、危きこと眞に風前の燈の如くであつた。そのうち、信玄の旗本が馳けつけ、槍を以て謙信の馬を突いた。馬は驚き逸し、爲に謙信は信玄を斬り損ねたのである。これが有名な鞭聲肅々夜渡河の詩中、遺恨十年一劍を磨く、流星光底長蛇を逸すの實景である。

つまりこの車懸かりの陣、及び謙信が信玄の旗本の中に斬り込んだ行動などは、戰術の部に入るのである。

以上の二例により、普通いふ所の戰略・戰術のことは一應わかつたことと思ふ。それで今度は、古今東西を通じ、名將の試みた戰略の著名なるのを擧げてみよう。

帝國圖書館藏

西洋人の戰略

戰爭は人間と人間との鬪ひであつてみれば、西洋人の戰だからとて、支那人や日本人と格段變つた戰ひ振りといふわけではない。

されど、所變れば品變るで、何千年かの歴史を見ても、國に依り民族により、そこに多少の相違あるのは自然であらう。

第一、戰と云ふものは地形によつて非常に制限されるものである。

例へば滿洲の如き、シベリヤの如き大平原では、一萬人から成る大密集隊を動かして戰ふことも容易である。然るに日本やギリシヤのやうな、地形が狹小で而も山や川が入り組み錯雜してゐる所では、一萬人、二萬人といふ大部隊を自由自在に指揮命令して行ふ戰爭は困難だといふことになる。

そこで日本などでは自然、小部隊の戰法が發達することになるのである。このやうに、地形の狀況でさへも戰法が變つて來る。それに民族の性質や兵器等の異なるに從ひ、その戰法の變るのはもとより當然のことである。

これらのことは、これから述べる各國の戰法を見れば、自ら合點が行くはずである。

エ ヂ プ ト

エヂプトの戰敗

エヂプトといふ國は世界で最も古く、且つ文明の優れた國として史上に謳はれてゐるが、此の國は地圖で見るやうにナイル河といふ大河に沿ひ、何百里にわたる細長い國であつて、スエズの地峽を以てシリヤ方面と境し、そしてその間にはシリヤの沙漠があつて、殆ど交通は遮斷されてゐた。この沙漠は、現代では科學の進歩により鐵道まで通じてゐる有樣であるが、昔は親不知、子不知の魔の沙漠で、曾てナポレオンがエヂプト遠征の時、カイロ府からシリヤへの進軍に、この沙漠でひどい目に遭つたことがある。また大昔、ペルシヤのカンビセス王がエヂプト遠征の時、颶風に遭ひ、たゞ一夜の内に五萬人の大軍が砂風に埋められ、全く影も形もなくなつたことがある。それほど沙漠内の行軍は恐しいものである。それで古

代交通機關の發達してゐない時には、シリヤ方面とエヂプトとは、沒交渉の國際關係であつたことは想像に難くないのである。

その當時のエヂプトには、馬がゐなかつた。エヂプトの東の對岸のアラビヤには世界一の駿馬がゐるのに、エヂプトには一匹も馬といふものがゐなかつたのだ。それほど國と國との交通が疎隔されてゐたのである。

この馬のないエヂプトは、開闢以來何百何千年の長い間、ナイル河畔で唯我獨尊の生活を續け、かの有名なピラミツドやスフインクスのやうな國利民福に關係のない大建築を誇らかに造營してゐた。そして兵隊は、槍や斧を以て徒歩で戰ふといふ、頗る幼稚なものであつたらしい。そこへ突然、シリヤ方面から騎兵戰車から成る敵大軍の大襲擊を蒙つて、全滅の難に遭つたのである。これはちやうど、今度我が海軍の奇襲を受けて殲滅の厄に陷つた米・英海軍の慘狀そのものであつたらう。

さて、此の古代の戰車といふのには、いろ〳〵の種類があるが、まづ一頭か二頭の馬に牽かれる箱馬車のやうなもので、その箱の中には、御者一人の外に戰士一名乃至二、三名が乘り、弓矢、槍等の武器をとつて殺到するので、その勢の凄じいことは想像以上であつたらしい。

この騎兵戰車は、現代の軌條戰車とはその構造を異にするが、その戰車たる點に於ては同一である。さうして速力は、騎兵であるからかへつて現代の戰車よりは疾かつたであらう。さて馬を知らぬエヂプト軍の面前へ、未だ曾て見たことのない騎馬戰車の大集團が殺到して來たのであるから、彼等の驚いたのは無理がない。あれよ〳〵といふ間に總くづれとなつて、シリヤ方面から來襲した牧王軍（ヒクソスといふ）に征服されてしまつたのである。

此の敗戰におけるエヂプトの慘憺たる有樣は實に言語道斷で、首府メンフイス（今のカイロ附近）は破壞され、男子の大部分は殺され、女子はすべて捕へられ、家屋は燒かれ、神殿は汚され、彼等が當時の世界に誇つたエヂプト文明なるものは、一朝にして蹂躪されてしまつたのである。

世に「北方の强」といふ言葉がある。これは支那人の口から出た語である。支那の天下は何時も北方民族のために亡ぼされたことからして、かくも言ひ傳へられたのである。

支那は古代から北狄の侵入に惱んで秦の始皇は萬里の長城を築き、降つて宋も北方の强たる遼や金や元のために亡ぼされ、明もまた北方の强なる淸のために國を失つた。「北方の强」は支那だけでなく、エヂプトもかうして北方のヒクソスに敗れ、後にローマは北方のゲルマニヤ人のために亡ぼされた。どうして南方民族が北方民族に負けるのか、これに關する理論や考證は茲に述べる餘裕もないが、要するに生活に惠まれた溫暖豐饒な南方の土地に永住すると、自然と心身が軟化して弱くなり、勇敢進取の氣象を缺くやうになるのが普通である。之に反し、北方に在る民族は土地は比較的寒冷不毛で、從つて生活も困難なるにより、人間自然の情として暖かい南の方、生活難のない南國へと移住せんとするに至る。故に北方民族は何時も南へ〱と本能的に進むのである。それで彼等の南進たるや頗る眞劍である。これに對し、柔弱化してゐる南方人は、北方人の銳鋒に一たまりもなく、忽ちにして打倒征服されるのが常である。

しかし嘗ての北方人も、一度南方を征服してそこへ定住するやうになると、天地自然の影響を受け、やがては心身軟弱化して、又々北方から押し寄せ來る新興民族に征服せらるゝに至る。つまり北から南へ、北方から南方へと歴史は繰り返されると云ふのである。

エヂプトはこの北方の强たるシリヤ族に征服されたのだ。此の論法からすれば今回の大東亞戰の劈頭に於てフイリツピン、マレー、シンガポール、蘭印諸島に據る米英勢力が、日本軍のために事も容易に壓倒征服されたのは、やはりそこに以上の如き自然の理法がはたらいてゐるからだと言へるであらう。之につけても吾等日本人は、現在の勢に乘じ、南方發展に邁進するのは大いに可なりとして、殷鑑遠からず、暖熱の氣候風土に心身を軟化されないやう、剛健なる氣象を保持することに努めねばならぬ。

エヂプトの回復

前述のやうに、エヂプト人が哀れにも北方のヒクソス族に征服せらるゝや、之が回復に苦心すること約二百年にして、漸くその目的を達し、その獨立を取戾すことが出來た。

エヂプト人は馬と戰車のために負けたので、それからは馬を飼育することに非常な力を盡くした。まづヒクソス人から密かに種馬を手に入れ、それをナイル河の上流にかくして、熱

心に馬匹の數を殖やすことに努力した。戰車の箱や弓矢は容易に出來るが、馬の增產は決して一朝一夕に出來るものではない。馬は鼠のやうに多產する動物でないからである。三年か四年目に一匹の仔馬を產むくらゐであるから、約一萬の軍馬を養成するに何十年の長きを要したのである。この長い間において、エヂプト人が復讐のため、どれほど苦心慘憺したかは想察するに餘りあるものがあらう。

　われらはこのエヂプトの回復について二つの考ふべきことがある、その一は、一度打倒されたら、元通り回復することは決して容易でないこと、他の一は人馬の增殖はなか〱長年月を要するといふことである。現に印度はイギリスに征服されて以來、幾度も獨立を圖つたが、今なほそれが出來ない。又フランスは前年の戰でドイツのために叩き伏せられ、半身不隨の國情となつてゐるが、これが果して何れの時において、華やかなりし昔日のフランスに復し得るであらうか。破滅は一瞬にして、而も再建復興にいかに長年月を要するかは、東西古今の歷史の證する所である。

　又人口の增殖も重大な問題である。フランスの敗れたのは、その原因に幾多の事情もあらうが、人口の少い事も主なる原因の一つである。イギリスも、此の人口問題には近年大いに注意するに至つた。我が國においては前年、淺薄にもサンガー夫人の避姙論などを歡迎した者もあつたが、近頃悟る所あり、ドイツやイタリヤと同じく人口の增殖に力を致し、特に厚生省を設け、昭和三十五年迄には一億五千萬とかに增殖しようと努力してゐるのである。古代エヂプトが馬の增殖を圖るに、數十百年の長きを要したのは當然のことと思ふ。

　エヂプトはかくして馬を養ひ、戰車を作り、弓矢を備へ、心身の鍛錬に力を致して復讐の機を覘つた。恰かもよし、その頃ヒクソスは、溫暖にして生活に豐かなるエヂプトに永住するに從ひ、曾て彼等の持てる北方特有の質實剛健の氣象はいつともなく上下を擧げて軟弱となつてゐた。これを見たエヂプトは好機乘ずべしと、彼等が新たに工夫した戰車を以てヒクソス族に向かひ襲擊を試み、大いに之を破つてシリヤ方面に驅逐し、こゝに始めてエヂプトの獨立を回復することが出來た。即ちエヂプト人は、敵の用ひた戰車戰略を逆に應用して敵を破つたのである。

エヂプトの攻勢

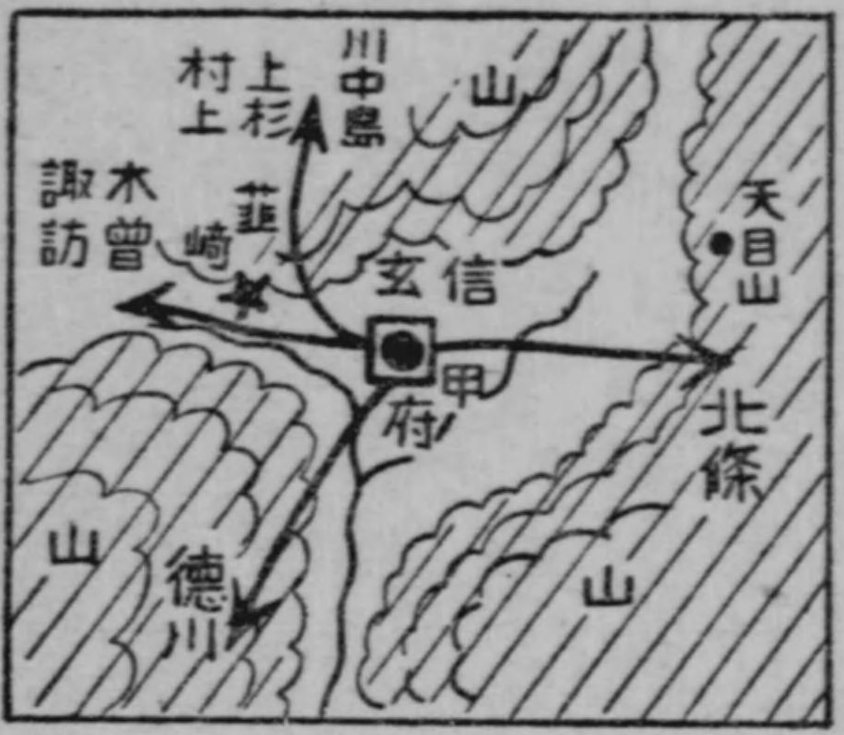
それから後のエヂプト人は大いに悟るところあり、國を守るには防禦では駄目だ、進んで敵を攻撃せねばならぬとして、從來の國防方針を一變した。これがほんたうの國防である。世人は、國防とは國を防ぎ守ることであるから、進撃方針は侵略主義なりとして之を排斥するの風がある。我が國に於ても滿洲事變の起るや、我が軍事行動を目して侵略主義なりと呼稱し、反軍思想、非國民思想を唱へた者が少くなかつた。かくの如き徒輩は國防の意義も、戰略の要訣も解せざる曲學妄想の一派である。國を守らんと欲すれば進んで攻撃せねばならぬ。

昔から「攻撃は最良の防禦方法」と云はれてゐる。我が武田信玄はさすがに名將であり、專守防禦は國を亡ぼすものなりとして、進撃戰略を採つて國防の要諦となした。

甲斐の國は四方天嶮に圍まれ、戰略上からすればその地形は專守防禦に適する國である。普通の國主であるならば恐らく專守方針を採つたことであらう。然るに信玄は前述の如くに

進取方針、攻撃戰略を採り、そしてかの有名な「人は城、人は石垣、人は濠……」の歌をよんで士氣を鼓舞した。それで彼は何時も國境を出でて戰つた。即ち南しては遠州三方ヶ原に出でて家康と戰ひ、東しては小田原に出でて北條と戰ひ、西しては松本平野に出でて木曾氏と戰ひ、更に北しては幾度か川中島に出でて謙信と戰ひ、一回たりとも自分の國內で戰つたことがない。そして負けたことのない英雄である。

しかるにその子勝頼に至るや、彼は剛勇の若大將ではあつたが、父信玄の國防の大方針を守らずに、韮崎に新たなる城郭を築いて國を守らんとした。しかし、忽ち織田德川聯合軍のために破られ、つひに天目山に落ち延びて國を亡ぼしてしまつたのである。彼は戰略の根本方針を誤つたのだ。



信玄の國防圖

ドイツはちやうど信玄と同樣の國防方針を採つた國である。モルトケ時代は國境要塞を主眼とせず、一朝事ある時は直ちに國境を出で、電撃的に敵國に侵入し

て戰ふの方針を採つた。一八七〇年の獨佛戰爭の時にも、又前年の第一次世界大戰の時にも、今回の第二次世界大戰に於ても、ヒットラーはジイクフリード要塞線に據ることなく、直ちにこれを跳び越えて佛白國内に侵入し、マヂノ線を突破し、巴里を陷れて、あの通りの大勝を博した。これ皆攻勢作戰の效果である。

我が國は滿洲事變、支那事變を始めとし、今度の大東亞戰に於て、徹頭徹尾、攻勢作戰に基づく戰略を採つたから日本本土の國防は安全なのである。もし消極保守派の唱ふるが如き國内防守の方針を採らんか、ハワイ海戰の大勝も珊瑚海海戰の奇勝もなく、香港、マニラ、シンガポール、ラングーン、ジャバの陷落もこれなく、今頃は東から、南から、北から敵飛行機の空襲を蒙り、應接に遑なき有樣であつたかも知れなかつたのである。今にして殆ど之なきは、全く進撃作戰のお蔭であることに留意せねばならぬ。

さてエヂプト人はヒクソス人を撃退して後、攻勢方針を採り、シリヤ、パレスタイン、メソポタミヤ方面に進撃し、一時はあの邊一帶を征服して一大國を建設した。この時彼等はどんな方法をとつたかと云ふに、國内に專門の兵士を作り、五十萬の常備大軍を設け、一萬人から成る百人四方の大密集歩兵方陣を編成し、之を以て、今のイラク、シリヤ等の廣大な地域を縦横無盡に蹂躙し、向かふ所敵なからしめたものだ。この時が史上に云ふエヂプトの黄金時代である。防禦のみしてゐては、黄金時代も全盛時代も豪華版時代もないのである。

此の一萬人方陣一たび動くや、山川草木皆風靡し、シリヤ方面にある獰猛な各種族もすべて降伏した。エヂプトの一萬人方陣の戰術的威力の大なるに鑑み、各國は我も我もと、これに倣ひ、ユダヤ王ダビデは、三十二萬の大軍を十二個の隊に分け、ペルシヤでは一萬人の密集陣を編成し、これを不死團と名づけた。そしてユダヤもペルシヤも此の密集大部隊を以て到る所戰勝を博し、大いに國威を發揮した。

エヂプトは以上の如く一萬人方陣を以て各地に戰ひ、四隣を震駭したが、その最も有名な戰はオロンテス河畔の血戰であつた。その詳細は省くとして、當時の相手はケタ國で、三十萬の大軍を繰り出し、これに對するエヂプト軍は四十萬であつた。この時ケタ軍では四人乘りの戰車二千五百臺を用ひ、エヂプトも之に相應するほどの戰車を繰り出し、エヂプトは辛うじて勝つたが、双方多大の損害を蒙むつたので和を講じた。之は太古に於ける有名な激戰

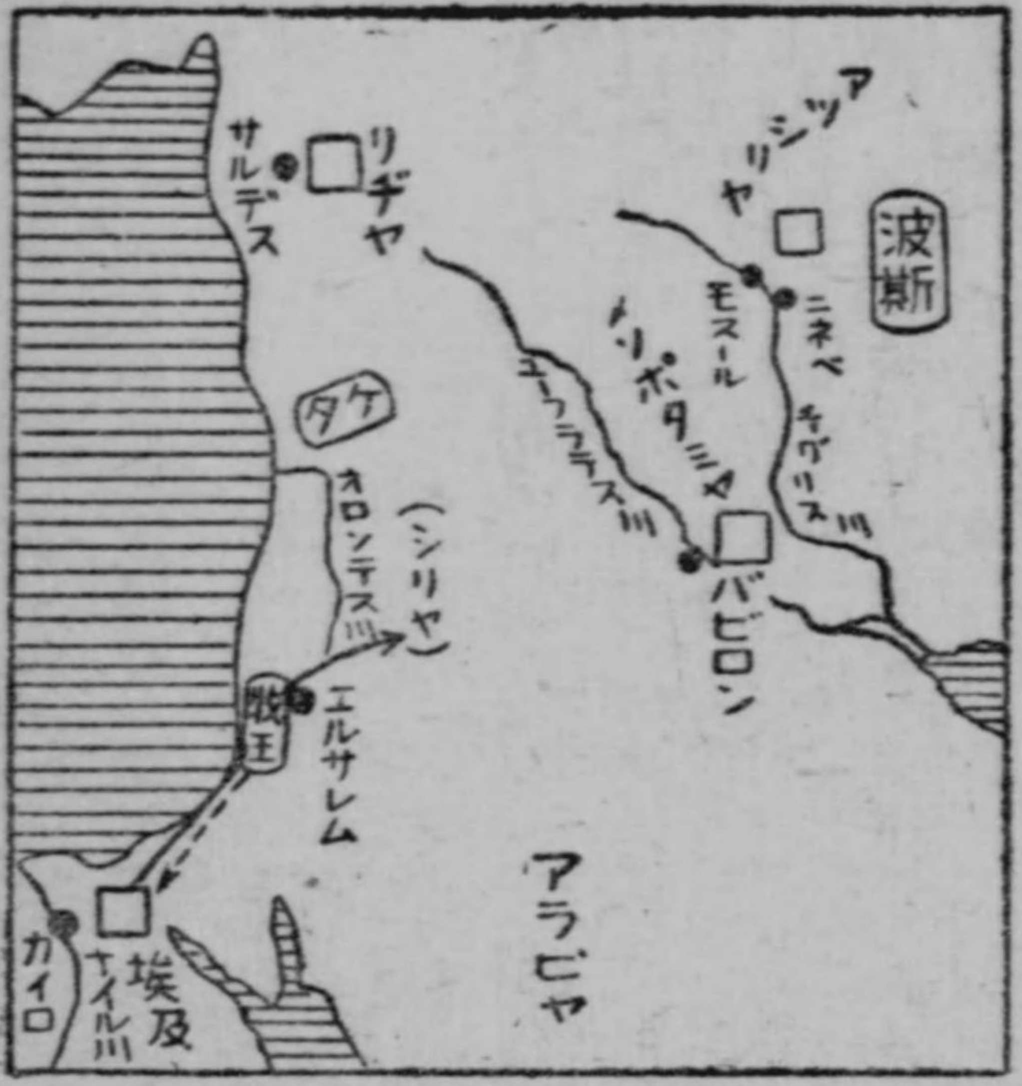
である。

このオロンテス河畔の戰は、我が　神武天皇卽位約六百年前のことである。

卽ち我が神代において三四十萬の大軍を以てする戰爭が行はれ、戰車などが盛に使用されてゐる所を見ると、當時の戰略・戰術といふものは餘程進んでゐたと思はれる。畏れ多いことであるが、　天照大御神が、劍を佩き弓箭を負はせられたるお姿を拜すると、當時すでに戰法といふものはよほど進歩し、恐らく全民族こと〴〵く軍務に從事したものであつたらう。

要するに古代エヂプト國は、馬のゐないのに苦心慘憺して騎兵を作り戰車を作り、一萬人密集方陣を編成し、五十萬の大軍をシリヤ、メソポタミヤの大平原に繰り出し、之を自由自在に指揮運用した戰略的手腕の如何に巧妙で優秀であつたかを思ひ、且つそれが　神武天皇卽位約六百年前なるに想ひ到る時は、現代人たる我等としては只々深き懷古の情に打たれざるを得ないのである。

バビロンとアッシリヤ



當時の國

古代エヂプトと太刀打した一方の雄はバビロンである。この國は今のイラクで石油の名産地である。あの有名なユーフラテス河チグリス河がその國を北から南に流れて、バビロンの發達富强の源をなしてゐる。昔から河は文明の母と稱せられ、このユーフラテス、チグリス河畔にはバビロン文明が生まれ、ナイル河畔にはエヂプト文明が生まれ、黃河、揚子江河畔には支那文明が生まれたのである。

云ふまでもなく、河は昔の交通の要路

であると共に、その沿岸は灌漑の便を得て農耕が發達し、自然に人が集り、從つて商業も盛になり、しだいに文明も進むわけだ。人間のゐない處には文明もなければ、競爭もない、從つて戰爭もない。山中の一軒家には文明も戰爭もないのである。

世人の云ふ文明、其の由つて來る所には必ずや戰爭と云ふものがある。故に戰爭は文明の母とも云へる。又事實、戰爭によつて文明の發達を來たした事は史の實證するところである。支那の文明にせよ、印度文明にせよ、エヂプト、バビロンの文明、ギリシヤ、ローマの文明、フランス文明、ドイツ文明、イギリス文明等々、その本を探求すれば皆激烈な難戰苦鬪の賜である。戰により苦心慘憺、刻苦精勵、創意工夫すればこそ、そこに文明の光が輝いて來るのである。

バビロンの戰法

以上のやうなわけでバビロンは人口の稠密な都となつた。勿論いろ／＼な種族の寄合である。そこで種々競爭が起る、喧嘩が始る、果ては、戰爭となるのはちやうど現下の世界大戰のやうなものであつて、バビロン附近の地方は、殆ど戰爭の熄む時がなかつた。そして戰爭と共に文明も進んで行つたのである。

我が日本は前後五年間、一面には支那との戰爭により若干消費もした、一面には戰爭に要する軍需品を大いに生產し蓄積したのであつて、所謂一面消費、一面生產と云ふのである。これと同樣、當時のバビロンは一面戰爭、一面文明といふ有樣であつた。故にバビロンはなかなか戰略・戰術の手法を進步せしめたのである。

バビロンの昔、サルゴンと云ふ英雄が出て、その附近を征服統一した。この時彼はどういふ戰略の手を用ひたかと云へば、弓と箭を用ひたと傳へられるのである。これは我が　神武天皇即位二千年前のことで、隨分古い物語である。

その當時の戰法としては棒で叩き合ふか、石を投げるくらゐのことであつたらしい。そこへサルゴン王は、弓箭といふ飛道具を發明したのだから、大した效果をあげたのである。現代人から見れば『なんだ、弓と矢か』と、餘りに幼稚な新兵器に驚かされるであらうが、しかし物の發明といふものは後から考へれば實に譯のないもののやうに思はれても、その發明

の當時では大したことで、人目を驚かし、敵軍をアッと云はせたに相違ない。

サルゴン王のこの弓矢戰法は、到る所意外の奇功を奏し、つひに當時の世界を統一することができた。そこでその後、王の勇名にあやかつて、サルゴンの名を用ひる王がしば〳〵出現するやうになつた。然るにサルゴン王死するや、バビロン人は文明病に罹かつて文弱となり、軍事を輕視するに至つた。サルゴン王の創設した弓矢戰法は其のまゝ傳習されたが、文弱のため魂は脱け去つて、單に形骸のみ殘つたのである。そこへ今度はハンムラビといふ英雄が現れ、新發明の戰略を以てバビロン地方を征服し、新に國を統一したのである。

ハンムラビは身分のない田舍生まれの者であるが、なか〳〵の傑物で、バビロン政權の衰徴につけ入り、これを乘つ取らんと新戰略を考へ出したのである。即ち

槍と刀を持つた歩兵

弓と矢を持つた騎兵

の二兵種を編成し、弓矢の騎兵を以て電撃的に敵を急襲して矢の雨を降らし、敵の動搖するに乘じ槍刀歩兵を以て突撃するといふ戰法であつた。戰法は二兵種を使用するところのもので、從來に比し遙かに進歩した合理的なものである。從來は何れかと云へば、單に止まつて弓箭を飛ばすか、或は槍か棒で叩き合ふのであつて、つまり一兵種の戰法であつたのを、ハンムラビは分業理論に基づき、歩騎の二兵種を編成し各その特長を發揮せしめようとした所に特色があつた。この二兵種協同戰法は後に至り、歩騎砲三兵種の發明となり、なほ進んで歩、騎、砲、工、輜重となり、現今ではそれに航空兵、戰車兵、機械化……等いろ〳〵な兵種が增加され、各兵種の特長を十分發揮せしめ、そしてその綜合した戰略的效果を以て敵を壓倒しようとする時代にまで進んで來たのである。

大東亞戰爭以來、大本營發表、我が陸海軍は緊密なる協同作戰により××に敵前上陸を敢行したとか、或は海陸空軍は協力して敵の飛行基地を爆碎したとか、或は我が快速挺進部隊は空軍掩護の下に敵の城門を突破して工兵の作業を容易にし、歩兵の突擊を便ならしめた云云の報道があるが、これらはみな各兵種、各部隊の連繫の協同即ち各種綜合力の戰果を示せるものである。現代でこそ、このやうに數多くの分業兵種があるが、太古にあつては單に一兵種であつた。それが進歩發展して二兵種となり三兵種となり、だん〳〵多きに達したので

ある。その先縱をなしたのがハンムラビ王であつて、專門の二兵種に分類したところに彼の戰略的天才の閃きを認め得るのであつた。

ハンムラビ王は、かうして步騎二兵種併用戰法により到る所敵を壓倒し、こゝにバビロンの黃金時代を築き上げたのである。なほ彼は軍隊に目附役を置く新法を案出した。このやり方は一種の懷疑的な探偵政治であつて、餘り感心しないのであるが、彼のこれを用ひた理由には二つあつた。

その一は、彼は身分の卑い田舍生まれであるから、將卒中或は不服從の擧あらんことを恐れたのと、も一つは、軍隊は皆各種各族の寄り合ひであるから、萬一にも離叛せんことを恐れたのと、この二つの理由からして目附役を軍隊內に置いたのであるが、當時この法は非常に效果を奏し、彼をして成功せしむるの一因となつたのである。しかしこの目附法は、法律的意義を含むものであるだけに、愛情の精神を本として行動する軍隊には必ずしも適當でない。その例を佛、露の軍隊において之を見る。

第一次世界大戰の時、フランス政府においては、政黨色ある代議士を軍隊に附して軍統帥に干涉容喙せしめた。つまり自家政黨の政策に一致せしめるやう、戰爭を導かうといふ眞意からである。このやうな事は、我が國軍においては想像も及ばないやり方であるが、政黨政權のフランスあたりでは當然の常識として行はれたのである。ところが佛軍統帥部と此の政黨監視員とは相反目し、爲に統帥がうまく行かず、總司令官の更迭を見たことがある。又今回の第二次世界大戰においても佛軍は二つになり、一はド・ゴール將軍派と、一はペタン元帥派とに分かれて相反目してゐるといふ有樣である。軍が政治上の關係で、二つ三つに分かれるといふやうなことは亡國の基である。これ皆政黨關係から生ずる所の弊害である。

我が國に於ても、動もすれば此の種の弊害の生ぜんことを防ぐため、軍人勅諭に、軍人の政治に干與すべからざることを戒められてゐる。國史を見るに源平二家の爭ひ、南北朝の分立、應仁の亂などは必ずしも歐米の政爭による二黨派の分立と同樣に之を見るを得ないが、而もやゝそれに類似したものであつて、我が國としては斷然一元的國政、一本的統帥に依らねばならぬのである。

德川幕府の末葉に當り、尊皇派はイギリス、佐幕派はフランスの力に賴つて抗爭せんとの

論もあつた。その時勝海舟以下具眼の士は、內爭に外力を入るゝの不可なるを論じ、つひに外夷の爪牙を封じて公武合體の說を唱へ、明治維新の大業が出來たと聞いてゐる。玆に日本國體の精華があり、大和民族の尊さがあるのであり、そしてそれが天壤無窮、二千六百年の榮光ある所以である。國體の一たると共に、統帥も一である。故に日本軍には到る所、戰勝の榮光があるのだ。

フランス人は必ずしも弱兵國民ではない。曾てはナポレオンに從つてドイツを屈服し、四邊を壓倒した百戰百勝の强兵勇卒であつた。然るに今日微々として振はざる所以のものは、その國民の間に分裂のヒビがあるためだ。恐るべきは此の分裂である。まさしく分裂は破壞の第一步だ。

又、ロシヤはどうかといふに、此の國は以前の帝政時代より、とかく政爭上からして軍の統帥を紊すことが多かつた。それで勝つべき戰も負けとなつたり、勝つた戰も效果が無かつたりしたことがある。今の共產ソビエット國となつてからも、同じ赤色國軍中にその行動の疑はしいものがあると云ふので、スターリン政權は、軍隊に政治委員を目附役として派遣し監督せしめた。故に軍隊とこの委員との間は、フランス同樣甚だ面白からず、常に反目內訌を事とした。それでしば／＼軍隊の肅淸が唱へられ、高級將官以下の死刑、流刑等の殘虐な處分が暗から暗に行はれたことは天下周知のことである。であるから、スターリン政權の軍隊は無慮數千百萬の大兵を擁するも、案外その威力を發揮し得ないのであつて、その原因の主たるものは此の點にあるのである。

支那軍に督戰隊といふのがある。これは蔣介石の旗本を以て任じてゐる。そして雜軍や灰色、桃色軍を後方から監督してゐる。故に雜軍一派は前からは日本軍に攻められ、後からは監督隊に突かれ、兩者の中間に挾まり、哀れにもサンドイッチの窮境に陷つて自滅するといふ狀態である。

以上はハンムラビ王の軍隊目附役の效用につき、その利害の存する一例を述べたが、これは固よりその時の狀況により適不適が決するので、要は用ふるその人によつて利害を異にする。法は死物なり、活殺の如何は其の人にあり。之も同樣、戰略も戰術も、その形式に價値があるのではなく、その用ふる將軍の手腕妙用の如何によつて値を異にするものだ。エヂプ

トが一萬人の密集方陣を用ひて勝つたからとて、誰も彼もがこの隊形を採つて勝てるものではない。サルゴンは弓矢步兵を用ひて天下を征し、ハンムラビは步騎二兵種を用ひて世界を併せたが、甲も乙も之を用ひて必ず功を奏するとは云へない。すべてが人によるのである。人の力によるのである。

アッシリヤの戰法

アッシリヤは、石油とモスリンで有名なモスール附近を中心として、メソポタミヤの平野から發展し、逐次四隣を征服して、世界最初の一大帝國を建設した勇猛な民族である。史家は彼等を野蠻人だと貶してゐるが、なか〳〵文化の上にも貢献してゐる。彼等が優秀な民族であつたことは、彼等の發明した戰法によつてこれを證することが出來る。

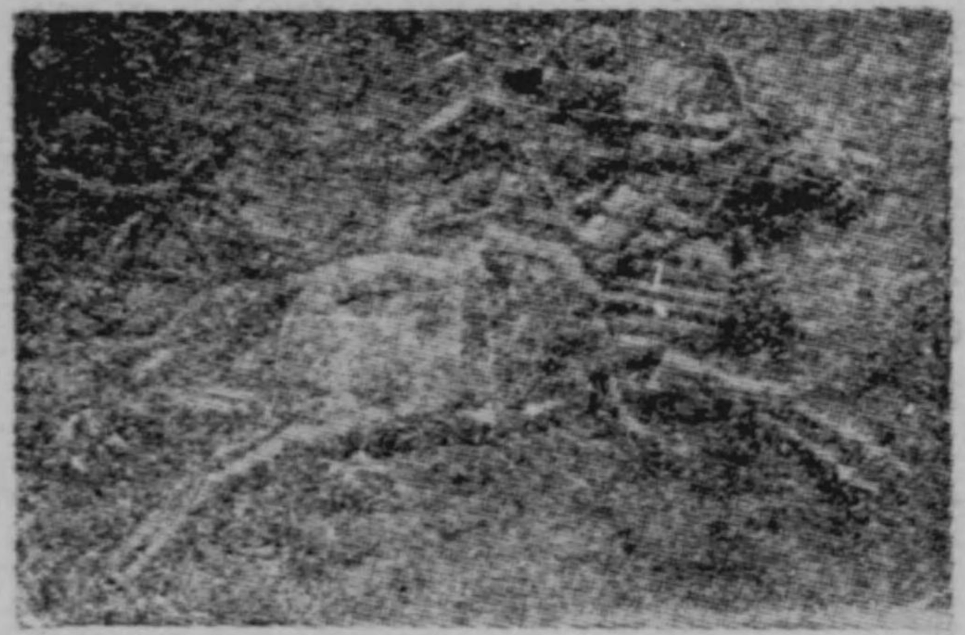
彼等が當時の世界を統一したのは、云ふまでもなく戰勝のお蔭である。戰勝なくして統一のあつたためしがない。イギリスが世界の七つの海を支配し得たのも戰勝のお蔭であつた。スペインの無敵艦隊を破つて五十步を進め、佛西聯合艦隊をトラフアルガルに破つて百步を進め、而して後に世界の海上に君臨したのである。然るにそれが今度の大東亞戰の敗退により、次第々々にその色が剝落して、夕陽將に西海に沒せんとするの頽勢を示して來た。これ全く戰敗の結果である。興るも亡ぶも戰だ。アッシリヤの興るや、その戰によつたのである。

アッシリヤ人は、大體に於て戰法を三變した。第一段には戰車萬能の戰法を用ひ、第二段には騎兵主義の戰法を用ひ、第三段には戰車と騎兵の併用戰法を用ひたのだ。此のやうに時代の進むに從ひ、又その時の敵情に從ひ、或は作戰地の狀況に從ひ、各々採るところの戰法を異にした點に彼等の戰略的優秀性がある。ナポレオンは敵により、地形により、兵力によりそれ〴〵戰法を異にしてゐる。我が秀吉などは千變萬化、「人を見て法を說く」の戰法を當意卽妙、臨機應變に案出應用して常に勝を占めてゐる。

アッシリヤの第一段に用ひた戰車戰法とは、一頭曳の戰車に御者一名、槍を持つた兵一名乃至二名乘るのがまづ普通とされてゐたらしい。第二段に用ひた騎兵戰法は現代の騎兵とは全然その趣を異にしてゐる。其の法は、

騎兵は短劔を佩び弓を持つて馬に乘る。それに一人の馬持衞兵が附く、此の衞兵は槍と

紐の付いた長い楯を持つてゐる。そして騎兵が敵に向かひ弓を射る時は、馬持衛兵は馬を止めて手綱を持ち、長い楯を前に出して馬上の射手を防護すると云ふやり方であつて、まことに小面倒な方法である。



馬上のアツシリヤ王

第三段の戰車、騎兵併用の戰法とは、

戰車は今までの一頭曳を二頭曳として箱を大きくし、御者二名、弓手一名、槍手一名の四人乘りとし、騎兵は從來の馬持衛兵を廢し、鎧を厚くして敵の弓矢を防ぎ、弓を以て自由に運動の出來るやうにした。之が後日の重騎兵の基をなしたものである。

以上のやうな戰法によつて、アツシリヤは天下を征服統一したのである。こゝに參考とすべきことは、アツシリヤの天下統一法である、戰に勝つてもその後始末の統治法がわるいと、民皆離散して、骨折り損のくたびれ儲けとなることがある。この點については我が徳川家康は實に名政治家と云へよう。アツシリヤ人もなか〳〵よいことを考へたものである。彼等は中央集權の實を擧げんがため天下の諸侯をして參勤交代の法を取らしめたのである。此の法により一は以て王威を示し、一は以て叛亂の機會を與へず、且つ又これによつて諸侯の財政を枯渇せしめようとしたのである。これはまことに名案であつた。我が徳川幕府また此の法を取つたのは偶然の一致であつて、合理的に考へて行くと、恐らくこの參勤交代法と云ふ結論に達するであらう。

アツシリヤは、もう一つの統治法として人民換置法と云ふのを用ひた。これは叛亂を起した種族や、征服した人民を、その郷土より拉致し來り、アツシリヤの内地に移して雜居せしめ、そして自然にアツシリヤ化せしめようとした政策であつたのであるが、これは成功せず、かへつて害となつた。何となれば彼等は容易に同化せずして自己の傳統習慣を固執し、陽に服從すると見せて陰には叛亂の機を覘ひ、敵がアツシリヤの首都ニネヴエに向かひ襲撃して來た時、之を防がさるのみならず、却つて之と通じて首都の攻撃を助けたくらゐであつた。これこそ獅子身中の虫といふべきもので、アツシリヤの亡んだのは他に原因もあるが、此の人民換置法の失敗が其の原因の一つでもあつた。

紐の付いた長い楯を持つてゐる。そして騎兵が敵に向かひ弓を射る時は、馬持衞兵は馬を止めて手綱を持ち、長い楯を前に出して馬上の射手を防護すると云ふやり方であつて、まことに小面倒な方法である。

馬上のアツシリヤ王

第三段の戰車、騎兵併用の戰法とは、

戰車は今までの一頭曳を二頭曳として箱を大きくし、御者二名、弓手一名、槍手一名の四人乗りとし、騎兵は從來の馬持衞兵を廢し、鎧を厚くして敵の弓矢を防ぎ、弓を以て自由に運動の出來るやうにした。之が後日の重騎兵の基をなしたものである。

以上のやうな戰法によつて、アツシリヤは天下を征服統一したのである。こゝに參考とすべきことは、アツシリヤの天下統一法である、戰に勝つてもその後始末の統治法がわるいと、民皆離散して、骨折り損のくたびれ儲けとなることがある。この點については我が德川家康は實に名政治家と云へよう。アツシリヤ人もなかなかよいことを考へたものである。彼等は中央集權の實を擧げんがため天下の諸侯をして參勤交代の法を取らしめたのである。此の法により一は以て王威を示し、一は以て叛亂の機會を與へず、且つ又これによつて諸侯の財政を枯渇せしめようとしたのである。これはまことに名案であつた。我が德川幕府また此の法を取つたのは偶然の一致であつて、合理的に考へて行くと、恐らくこの參勤交代法と云ふ結論に達するであらう。

アツシリヤは、もう一つの統治法として人民換置法と云ふのを用ひた。これは叛亂を起した種族や、征服した人民を、その郷土より拉致し來り、アツシリヤの內地に移して雜居せしめ、そして自然にアツシリヤ化せしめようとした政策であつたのであるが、これは成功せず、かへつて害となつた。何となれば彼等は容易に同化せずして自己の傳統習慣を固執し、陽に服從すると見せて陰には叛亂の機を覗ひ、敵がアツシリヤの首都ニネヴエに向かひ襲擊して來た時、之を防がざるのみならず、却つて之と通じて首都の攻擊を助けたくらゐであつた。これこそ獅子身中の虫といふべきもので、アツシリヤの亡んだのは他に原因もあるが、此の人民換置法の失敗が其の原因の一つでもあつた。

ペルシヤ

アツシリヤを滅ぼしたのはペルシヤであつた。そしてペルシヤはアッシリヤ帝國よりより大なる帝國を建設して史上に名を揚げたのであるが、ペルシヤの用ひた戰法に、二つの奇拔なものがある。其の一は駱駝戰術、他の一は灌水戰術と云ふのである。前者の戰術を以ては小アジヤのリヂヤ國を亡ぼし、後者の戰術を以てはメソポタミヤのバビロン國を亡ぼして天下を統一したのである。

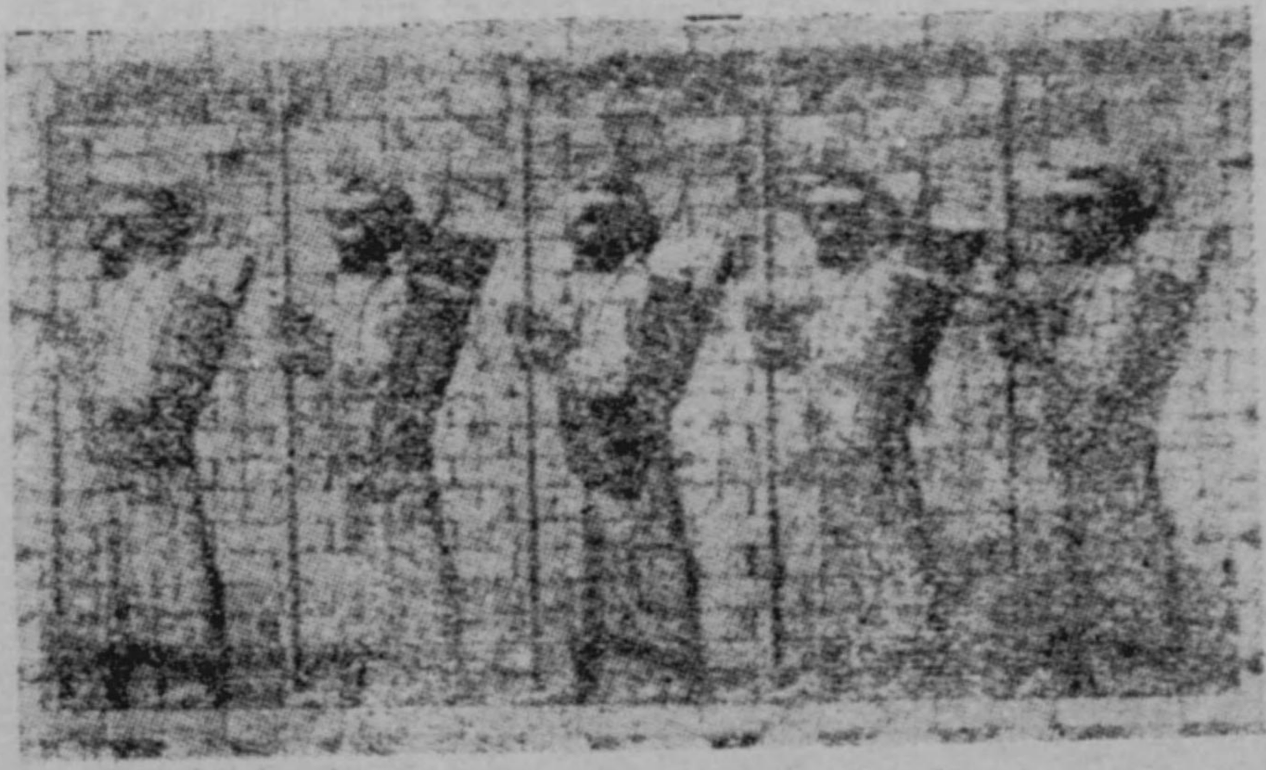
駱駝戰術

ペルシヤ王キロス（後に大王と稱す）はリヂヤ國を討たんと大軍を率ゐて、リヂヤの首都サルデス城に迫つた。當時、ペルシヤ軍は歩兵を主とする戰術であつたが、リヂヤ軍は騎兵を主とし、しかもその軍隊は實に堂々たるもので、當時リヂヤの騎兵と云へば有名であつた。

そこでキロス王はたうてい勝利覺束なしと察し、直に一策を案じて、大行李に使つてゐる駱駝全部を集め、之に兵を乘せた。この駱駝部隊を陣頭に立てて敵の騎兵目懸けて突進せしめ、其の後方に歩兵を進めたのである。

駱駝を敵の騎兵に向けたわけは、元來馬といふものは駱駝の異常な姿を見て怖れ、また其の惡臭を嗅いでは我慢が出來ない。キロス王はこの馬の習性に着目して駱駝を使つたのである。いよ／＼開戰となるや、果して奇功を奏し、リヂヤ兵の馬は駱駝の姿を見るや忽ちにして頭を廻らし、一目散に逃げ去つた。之にはリヂヤ王もさすがに策の施しやうがなく、遂に虜となり、國は亡んでしまつたのである。

ペルシヤの兵士



涸水戰術

「バビロンは歡樂の中に亡んだ」といふ有名な句がある。それはペルシヤ王キロスに亡ぼされたバビロンの末路を謡つたものであつて、この時キロス王は、涸水戰術を用ひてバビロン城を陥落させたのである。

　バビロン城は天下の名城で、周圍二十四里、城壁の高さ五十間、厚さ十五間、壁上は四頭曳の戰車が疾驅することが出來た。そしてユーフラテスの大河が城中を縱斷してゐる。故に難攻不落の堅城として自他共に之を許してゐた。なほ其の附近に莫大なる費用と勞力とを以て周圍六十餘里、深さ十五間の人造大湖をつくつた。これはユーフラテス河の水を調節すると共に、敵の攻撃に際しては之を氾濫せしめて敵を全滅せしめようとの計畫であつた。

　ペルシヤ王キロス、大軍を率ゐてバビロン城に迫り猛烈果敢に攻撃を反復したが、容易に陥落せしむることが出來ず、諸將皆困惑した。このときキロス王、一日親しく附近一帶の地形を視察して涸水戰法の一策を案出した。

其の法はユーフラテス河に運河を作り、河水を周圍六十餘里もある人造大湖に注ぎ込み、本流の涸るゝを待ち、其の河底から城壁の下を潜り城内に突入しようとの案であつた。つまり城壁を強攻破壞して突入するのでなく、涸水のため城壁の下がちやうどトンネルのやうになつた其處から突入しようといふのである。

　一夜、城兵祝宴を張り、置酒亂舞しあるを偵知し、暗夜に乘じ河床より潜入して奇襲を敢行し、縱横無盡に斬り捲くり遂に城を陥れたのであつた。

　バビロン城は天下の名城であるが、築城の當初、よもや河水を涸らし、河床から敵が潜入し來るべしとは思ひもよらぬことであつた。河水は洋々として流れて止まぬものとのみ考へてゐたに相違ない。それがまんまと裏切られた。キロス大王は流石に非凡の眼識をもつた名將で、かう云ふ所が秀吉によく似てゐる。秀吉は如何なる難問題に直面しても立ち所にそれに對應する策略を立て、決して窮することも惑ふこともなかつた。

　古來氾濫と云ふ戰法はあるが、涸水と云ふ戰法は珍しい。其の後、ローマ軍が小アジヤに進軍した時、敵は河に據つて堅陣を布いてゐたため容易に攻めることが出來なかつた。時に

ローマの將軍は一策を案じ、自分の軍の後方に一の新運河を急造し、それに敵の據つてゐる河水を流し込み、河を溜らして敵を攻め破つたことがある。かう云ふことはちよつと凡人の氣のつかないことである。

凡て物は用ふる人によつて、毒にもなれば藥にもなる。正宗の名刀も、其の人によつて殺人劍ともなれば活人劍ともなる。バビロン人の造つた周圍六十餘里の湖は敵を氾濫に陥れ、そして城を守らんとしたのであつたが、それが城を守るどころか却つて城を亡ぼすの具となつた。マレー半島の要衝シンガポールは、英國が華府會議に於て、日本艦隊を制壓し、日本を抑へんがため金城湯池の要塞を築いたものである。然るにそれが今日本の手に落ち、日本の軍事基地となり、英國が却つて制壓せらるゝの破目に陥つた。身から出た錆とはいへ、彼等にしてみれば寢ても睡れぬ思ひであらう。

バビロン人は城の堅を恃んで亡びた。英國亦然り、恃むべきは堅にあらずして、心にあり、備にある。古人曰く「備あれば患なし」と、至言といふべきである。

ギリシヤとローマ

ペルシヤはだん／＼隆盛になるにつれて、世界征服の野望を現し、ギリシヤを併吞しようとかゝつた。こゝに史上有名なペルシヤ戰爭が起つたのである。

此の戰役の華ともいふべきは、マラトンの陸戰とサラミスの海戰とである。この二戰に於てさしものペルシヤも遂にギリシヤに擊破され、勝冠はギリシヤの頭上に燦然と輝き、洋々たるギリシヤの前途がこゝに約束されたのであつた。卽ち戰勝の結果、偉大なるギリシヤ文化の華が展開し、後世永く憧憬の的となるに至つたのである。これを見ても戰には負けたくないものである。

ペルシヤとギリシヤとは釣鐘と提灯ほど大小の差があり、ペルシヤの大を以てすればギリシヤの小など物の數ではなく、それこそ鎧袖一觸、打倒粉碎されるであらうと見えたのである。然るに何ぞ知らん結果は正反對で、蚊小のギリシヤが蜂大のペルシヤを物の見事に打ち

のめしたのである。これはちやうど日露戰爭にも比すべきもので、小日本が大露國に立ち向かふなど、自ら求めて亡滅の淵へ飛びこむものであると、當時の外國人は誰しもかく觀察し豫言し、哀れみを日本に寄せたのであつた。然るにいざ戰爭となつて見ると胸のすくやうな日本の大勝となつて、世界の人々を二度びつくりさせたのである。大必ずしも強くない、故に恐るるに足らず。小必ずしも弱くない、故に侮るべからず。これは昔からの箴言である。

大東亞戰爭以前にありては、我が日本の朝野には米英の大を恐れ、之に屈從するを以て保安の要道なりとなした者も、一部の政治家、學者、操觚者の中にはあつたやうである。然るに一度び開戰となつて見ると、案外弱く獨活の大木同樣、見懸倒しのものであつた。我等は何事につけても形態の大に恐れることなく、恫喝の聲に怯ぢることなく、正義の爲には飽くまでも當つて碎けるの覺悟を以て立ち向かふべきである。若しも米英の大に恐れて媚態外交を弄したり、迎合政策などを採つたりしてゐたら、今頃の日本は如何に窮厄のドン底に押しつけられてゐたか分からなかつたのである。思へば大東亞戰爭は、今後の國民に對する偉大なる教訓であつた。

マラトンの戰

オリンピツク競技の一にマラソン競走と云ふのがある。それは此のマラトン戰爭を記念した由緒の深い歷史的競技であるから、今それを簡單に述べて見る。

マラトンといふ所は、ギリシヤの都アテネ市の東方約十里の所にある海岸に沿うた狹い平野である。ペルシヤの大軍來襲の報に接するや、アテネ人はこれを防がんと國家總動員を行ひ辛うじて一萬人の兵を得、これを以てマラトンの周圍にある山地に據り、こゝに陣してペルシヤ軍の怒濤の如き來襲を待ちうけた。

此の時ギリシヤの將ミルチヤデスは色々な工夫を凝らし、次のやうな武裝を採らしめた。即ち各兵は重い鎧を着け、胸甲、脛當に身を固め、短劍を佩び、楯と二本の槍（長いのと、短いのと）を持たせた。

何故に重い鎧を着けさせたかと云ふに、其の重力を利用しようとしたのである。即ち山上にある陣地から、下へ驅足突進する時、物理學上で云ふ重量に速力を乘じた衝突力を增大な

らしめんとの考であつた。又二本の槍を持たしめたのは、先づ短い方の投槍を遠くから敵の頭上に放射し、其の動搖するに乘じ長槍を以て突入すると云ふ戰法である。當時ペルシヤ軍は頗る輕裝で、輕い鎧を著け、短い槍一本を持つてゐたに過ぎなかつたから、ギリシヤ軍は敵の此の武裝の弱點を利用して快捷せんと、如上の武裝を案出したものである。

ギリシヤの將ミルチヤデスは此の一萬の兵を三分して、精鋭の二隊をば左右の小高い山地に陣せしめ、他の小部隊から成る一隊をばわざと中央の稍低い高地に配備した。此の戰略は敵を中央に誘引し、適當の時機に左右の山上から敵を包圍的に突進して殲滅しようとする方策であつた。ギリシヤ軍のこの作戰は物の見事に適中した。

やがて戰が始ると、ペルシヤ軍十萬は衆を恃んでギリシヤ軍を侮り、警戒や、部署などは餘り念頭におかず、無造作に攻撃を始め、やゝ低き高地に陣せるギリシヤの中軍に對して攻撃を加へて來た。ギリシヤ軍にとつては、これこそ思ふ壺である。敵軍をば適宜にあしらひ、時機を見計つて一擧に、左右の高地より疾風の如く敵の横腹めがけて突撃した。何條たまるべき、不意を打たれた十萬の大軍忽ちにして壓倒蹂躪され、あまつさへ短槍を投げつけられ、

長槍を以て吶喊され、大潰亂の狀態となつて敗走し、其の多くは船に乘るは乘つたものの、狼狽のあまりその殆んど全部が海中に溺死してしまつた。此の戰にペルシヤ軍の死者六千四百人、ギリシヤ軍の死者は僅かに百九十二人であつた。これこそ全くの奇蹟的大勝利といふべきで、史上稀なるものである。

ギリシヤ軍は此の戰果大勝利を、戰況如何にと首を伸ばして待つてゐるアテネ市民に知らせんものと急使を走らせた。

ギリシヤ人の競走（オリンピヤ大祭の光景）

此の使者は、アテネまでの距離約十里の所を僅か三時間足らずで疾驅し、市民の老若男女が市の東門外に出でて氣遣つてゐる所へ、手を振り上げつゝ大聲に「我が軍勝てり」と叫ぶや否や、どつと倒れて

其のまゝ息は絶えてしまつたのである。市民はこの壯絶なる護國の精神を記念せんがため、そこに駈歩報國の石碑を建立して長くその忠烈を表彰した。これがそも／＼マラソン競走の始りで、オリンピヤ祭に神聖競技の一として加へられるに至つたのだと云はれてゐる。

サラミスの海戰

此の戰は海戰を論ずる際には必ず引例される有名なもので、ギリシヤは三百八十隻より成る小艦船を以て、ペルシヤの七百五十隻と云ふ大艦隊と戰ひ、大捷を得たのであるから、今これを簡單に述べる。

ペルシヤ軍は一度は前記の如くマラトンの戰に敗れたが、其の後再び大軍を整へギリシヤ遠征を企て、陸戰に於ては連戰連勝、首都アテネを陷れ、勝に乘じ、今度はギリシヤ艦隊を全滅せんとサラミス灣に迫つた。

ギリシヤでは國家存亡の危機に直面したので軍議を開いた。所が其の多くの者は到底勝算がないから、後方コリント灣に退き、同盟諸軍と協力するに如かずとなした。然るに獨りギリシヤ提督テミストクレスはこれに反對して、サラミス灣に於て決戰せんと主張した。

其の理由とする所は、今や我がアテネ市民何萬人は、サラミス島に避難し、これらの人々は皆我が艦隊と運命を共にせんと誓つてゐる。故に此の應援の下に、乾坤一擲の海戰を斷行するはアテネ男子の本懷である。勝敗は固より問ふ所にあらず。コリント灣に退き、友邦の助を期するが如きは、ギリシヤの覇者を以て自ら任ずるアテネの恥辱であるといふのであつた。衆皆彼の熾烈なる愛國心に動かされ、遂にサラミス灣において決戰することに軍議は一決した。

ペルシヤ艦隊はギリシヤ艦隊を袋の鼠とし、一網打盡にせんものと旌旗空を覆うてサラミス灣に迫り、此の海戰の壯觀を見物せんとするペルシヤ王の望樓は海岸の高地に設けられた。ギリシヤ軍は、窮鼠猫を咬むの決死的覺悟を以て戰に臨んだ。

やがて戰が始り、ペルシヤの大艦隊は、敵を侮つて半ば遊戲の氣持で戰を導いたが、ギリシヤ方は遊戲どころか、サラミス島に避難してゐる幾萬のアテネ市民聲をからして應援し、ギリシヤ水兵は決死の勇氣を揮ひ死物狂ひに戰つた。暫時の間、兩艦隊は押しつ押されつの

狀態であつたが、間もなく西風起りギリシヤ方はこれに勢を得て突進し、或は衝角を以て敵艦を突き破り、或は敵艦上に跳り込んで斬り合ひ、縱横無盡に驅け廻つた。かうなるとペルシヤ艦隊は船の多いのが却つて邪魔になつて、活動が自由にならないのみか、同士討を始めると云ふ有様で、遂に大敗となり、二百隻の軍船を失ひ四萬人の戰死者を出した。これに反しギリシヤ方は僅かに四十隻を失ひ、數百人の死者を出したに過ぎなかつた。

此の海戰の結果、ギリシヤはエーゲ海の海上權を獲得して遂に當時の世界に雄飛する礎を固めたのである。此の史實と、目下我が日本が南太平洋の海上權を獲得した戰果とを對照研究して見ると、こゝに大なる興味と敎訓とを感得する。

フアランクス戰術

ギリシヤのフアランクス戰術と云へば史上有名なものである。

ギリシヤはその地形極めて複雜せる山岳國で、騎兵の使用に適しない。それで軍隊は自然歩兵を以て編成されるやうになつた。世間でよく云ふところのスパルタ兵と云ふのがこの歩兵のことである。歩兵は單獨でバラ〳〵に戰つては效果が少いといふので色々と考究し、五十人か百人くらゐから成る密集隊を作り、隊形について種々其の利害を研究し、結局凡そ正面二百五十人、縱深十六人、兵數四千人くらゐの密集隊が一番有利だと云ふ結論に到達し、之をフアランクス隊と名づけ、各所の戰爭に用ひて大いに效果をあげたのである。

そして國軍兵力の多くなるに從ひ、此の四千人から成るフアランクス隊の單位を二つ三つ四つと横に並べて戰ふやうになつた。通常四つくらゐ並べ合計一萬六千人の大フアランクス隊を戰術的に使用するに手頃な集團とした。此の隊は横隊であり、兵は槍と劍とを持つて接戰するのであるから、全く簡單な横隊の突撃戰法で、つまり此の固まつた密集隊を以て遮二無二敵を突破しようと云ふのである。

エヂプトやペルシヤは大平原の戰に適するやうに百人四方の一萬人部隊を用ひ突撃する戰法を案出したが、ギリシヤの山岳國ではそれが出來ないから、右のやうな四千人くらゐから成る密集隊を工夫創案したのである。

このやうに戰略・戰術なるものは、其の國の地形に相應するやうに工夫され、しだいに發

達したものである。故に蒙古や中央アジヤのやうな大草原では成吉思汗（ジンギスカン）のやつたやうな騎兵の大密集團が用ひられ、日本のやうな山岳重疊、錯雜した狹小な地形では、小部隊の戰術殊に奇襲戰法が發達したのである。日本の此の奇襲戰法が、日露戰爭にも、支那事變にも、今度の大東亞戰爭にも偉大な功を奏してゐるのは、全く天與の恩惠と云はねばならぬ。故に簡單に甲國の戰術が善く、乙國の戰法が不合理だなどといふわけには行かぬ。皆それ〲の國情によつて發達したものである。

ギリシヤの此のフアランクス隊には兵士の配列に工夫を凝らした點が認められる。即ち最も强勇な兵を第一線に置いて重甲を佩ばしめ、次等の兵を輕裝せしめて第二線に置き、奴隷兵をば最後の線に配置した。これらのことは、我等日本人から見れば當然のことで、强い者が先陣を承はるのは名譽として古來競爭されたものだ。源平時代、戰國時代の武士の間には、此の先陣爭ひがしば〱あつた。宇治川の戰における佐々木、梶原の如き、朝鮮出兵の時の加藤、小西の如き其の著名なものである。この「人に後れをとるは恥辱である」と云ふ名譽を尙ぶ傳統が、日本民族の血肉に沁み込み、それが今度の大東亞戰爭に、ハワイ海戰を始めとし、マレー沖海戰、香港、マニラ、シンガポール其の他の陸海空の各戰鬪に赫々たる戰果を擧げて世界を驚倒させてゐる。

當年のギリシヤ人は、我々日本人の如く、非常に名譽心に燃えた强勇な民族であつたらしい。それがギリシヤをして、國は小、人は少いにもかゝはらず、あのやうに史上に其の名を擧げさせたものである。彼等は軍隊を名譽の府と見、戰場を神聖の場と認めた優秀果敢な民族であつた。然るに支那では昔から、良民は兵とならず、良鐵を以て釘を作らずと謂ひ、兵士となることを卑んだものである。此の風習は現今にまで傳り、蔣介石は市井の苦力人夫の如き下級人を狩り集めて兵としてゐる。此のやうな兵であるから、戰に優勝する見込がないのは當然である。

昔のギリシヤは右のやうに名譽を尙び、勇者を讃へた優秀民族であつたが、後に至つて其の文明の進むに從ひ、漸次此の美風が廢れ、現代では到底其の俤をも見ることの出來ない程に、弱兵化してしまつた。前年ドイツ軍の進入した時、これに對する應戰振りを見ても其の弱體の程度を知ることが出來る。

西洋文明の弊害は、各部面に現れてゐるが、特に戰の一面において深刻である。卽ち最も名譽たるべき最前線に立つて戰ふことを避けると云ふ避死思想である。今回の大東亞戰に於て、米軍は土人兵を第一線に出し、自分達は後方の安全地帶に居り、英軍は印度兵やマレー兵を前線に驅り出して戰はしめ、自分達は第二戰を守つたと云ふ、卑劣な行動が非常に多かつた。此のやうに西洋人の對戰思想は著しく弱化して來たのである。一九一四年に起つた第一次世界大戰において、米軍は佛國戰場に乘り込み、獨軍と始めて戰を交へた時、彼等は黑人兵を第一線に出し、自分達は後方にあつて、旗を振り、喊聲を發して此の愚鈍な黑人兵を敵火の下に曝らしたものである。彼等は此の如き非人道的戰鬪行爲を平氣で行つてゐるのである。全く日本人の武士道精神、勇俠的氣象とは全然其の類を異にしてゐる。彼等に此の死を恐るゝ精神、安逸を貪る氣分のある間、到底戰勝の見込がないのである。米英が今回の大戰に於て戰敗の苦杯を嘗むるに至ることは此の點からしても推斷することが出來る。

以上、ギリシヤ内の各國、卽ちアテネ、スパルタ、テーベ、コリント等々の國軍はいづれもこのフアランクス隊を應用して内爭を續け、互に勝敗を反復してゐたのであるが、こゝにエパミノンダスと云ふ名將が出て、此のフアランクス隊戰略に一の新しい改正を加へた。これが梯隊戰術といはれてゐるものである。

エパミノンダスの戰術

ギリシヤ人のフアランクス隊は、同一の兵數より成る數個の單位フアランクス隊を横に並べ、槍を揮ひ喊聲を發して體當りの格闘をやるのが通則とされてゐた。故に其の勝敗は兵士の勇敢か否かによつて決せられたのである。然るにエパミノンダスは數回の戰鬪に於ける體驗に基づき次のことを案出發明した。

卽ちフアランクス隊を同一人數とせずに、大部隊と小部隊とを作つてこれ等の隊を從來の如く一列横隊に並べることなく、人數の多い部隊を最前線に、其の他の小部隊をば其の右下り又は左下りに斜め梯隊に配置したのである。

此の隊の特徴は先頭にある强大なフアランクス隊を以て敵の一點を突破するといふところにある。つまり緒戰に於て大勢を決しようといふのである。ナポレオンは特に此の戰術の達

人であつた。日本軍も常に此の戰法を採つて優勝を續けてゐる。

又エパミノンダスが小兵力より成る小フアランクス隊を右下りに斜に置いたのは、敵との衝突時刻を後れさせ、其の間に最先頭の大部隊が敵を擊破した餘勢を驅つて、小部隊に攻めかゝる敵の側面を衝かうとする戰法である。此のエパミノンダスの斜梯戰法は奇效を奏し、敵軍は皆敗れた。有名なレクトラの戰で、エパミノンダスは、此の戰法を用ひ、僅か六千人を以てスパルタの二萬五千人の大軍を見事に粉碎して、髙名を天下に轟かした。

此の斜梯陣戰法は極めて簡單なもので、今から見れば常識で分かりさうなものであるが、それを工夫發明するまでには少からぬ時日と努力を要したものである。要するに戰略、戰術の發明と云ふものは智者によつてなされるもので、我が秀吉の如きはその尤なるものである。

マケドニヤ槍隊

ギリシヤ國內では長い間內亂が續き、優勝劣敗が反復され、アテネ、スパルク、テーベなどの國が互に覇權を爭つてゐた。此の當時北方のマケドニヤは野蠻國と見なされ、其の國の王子フイリツプは十五歲の時人質としてテーベに在り、親しく同國の名將エパミノンダスに就き戰術を研究した。フイリツプはアレキサンダー大王の父となる人だけあつて幼少の頃から慧敏雄偉將來何か一大事業を成さんと心窃かに期する所あつた。かくして彼は、一の槍隊の發明を遂げたのである。

ギリシヤの槍の長さは從來六尺を定法としてゐた。これは餘り長いと密集隊では使ひにくいし、其の操法も不自由であるからであつた。それをフイリツプはテーベから歸國した後、研究工夫を重ねて二十一尺（三間半）の長さとした。之は隨分長いもので、我が國でも珍しい程である。山本勘介や磯野丹波、加藤清正等の使つた槍でも、こんなに長いものではなかつた。普通長いので二間柄の槍であつたらう。

フイリツプは此の槍をどう云ふ風に使つたかと云ふに、馬に乗り或は徒歩で此の長槍を振り廻はして、敵の喉笛とか、胴腹を突くのでなく、此の長槍を以て槍襖を作り、一はそれで敵を脅かし、それで突き捲くらうと云ふのである。

其の法は、第一列から第五列までは、長槍を前の方に水平に突出して鋒尖を敵に向け、第

六列から後方第十六列までは長槍を垂直に天空に向けて立てる。これが一萬五千人から成る一フアランクス密集隊であるから、五千本の槍先は前方に閃き、一萬本の槍は林の如く立ち連なつてゐて、それが動きだすと、實に恐しく見え、殆ど戰はずして敵を壓倒したのであつた。フイリツプの軍は常に三萬二三千の多勢であつたから、なほさら恐しく見えたことであつたらう。

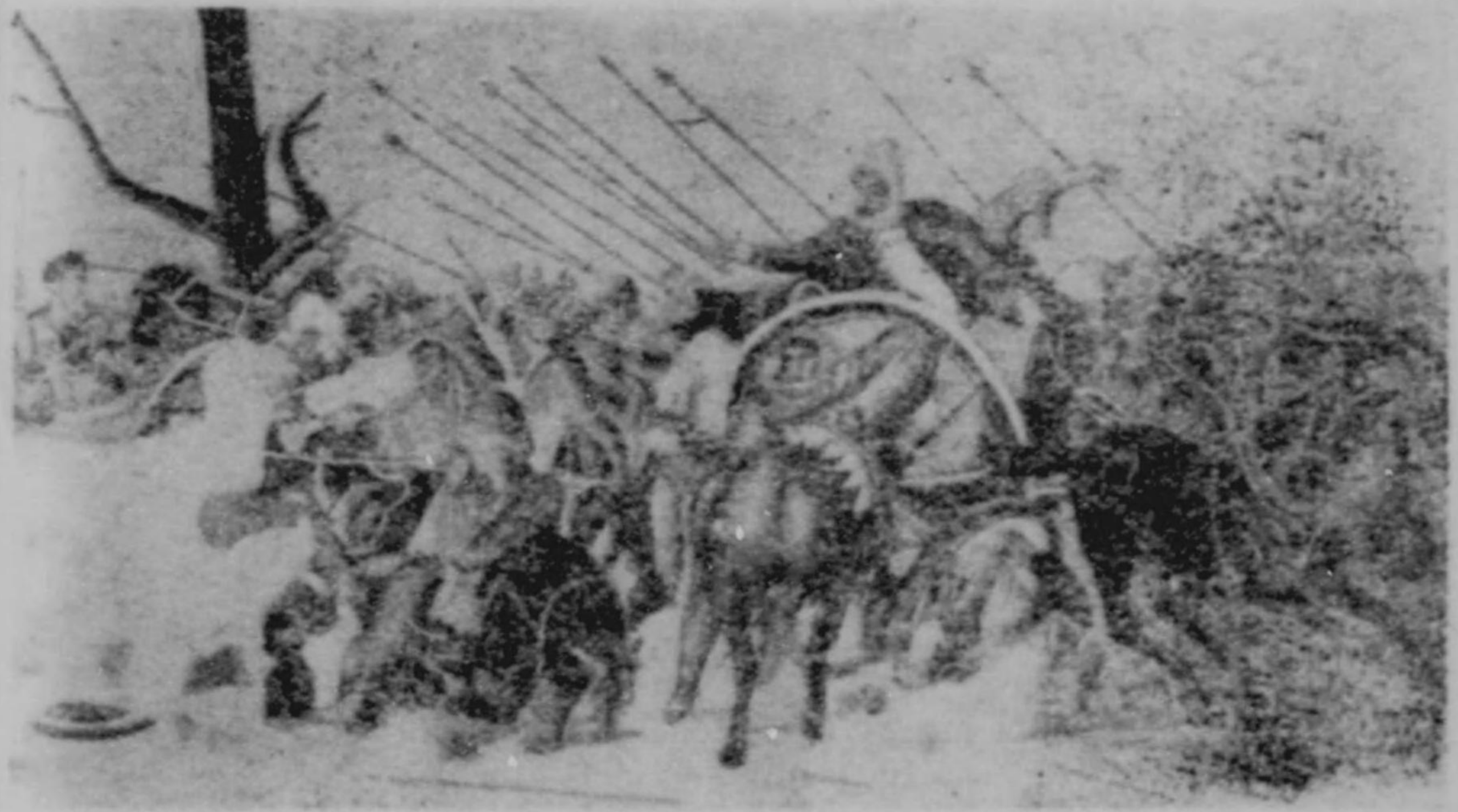
フイリツプ王とその槍隊

以上のやうに、此の長槍隊は密集部隊が固まつて進撃する所に價値があるのであつて、脆弱な集團では忽ち瓦解するの恐れがある。故にフイリツプは軍隊の訓練に特に力を用ひた。彼は未だ世に知らさる此の長槍隊を以て戰場に現れたので、敵は大いに恐れ、逡巡躊躇する隙に乗じ、猛猪の如く敵陣を突破し、到る所大勝を得て遂にギリシヤを征服統一したのであつた。卽ち今まで北方の野蠻人として相手にされなかつたマケドニヤは、此の長槍戰術により勝を制し、たちまちギリシヤの覇者となつたのである。このやうに戰爭の勝敗と云ふものは、一寸した手入れの加減によつて決せられるものである。かう云ふところに眼の届くのがいはゆる名將である。次には此のフイリツプの子アレキサンダー大王の戰法を述べよう。

アレキサンダー大王の戰術

大王は偉大なる英雄、男性的な英雄、冒險好きな英雄であつた。ナポレオンのやうな現代的の戰略、戰術家と云ふよりは、術も略もない我無遮羅の英雄と云つた方が適當かと思はれる程、奇拔な戰をやつた名將である。

大王には「恐れ」と云ふことがない。彼の心身は頭の上から足の爪先まで「必勝」の信念を以て充たされてゐた。彼にしてみれば、「戰勝の要訣は術にあらず、法にあらず、勝たうと思へば必ず勝てる」と云ふ腹であつた。此の必勝の信念は東洋でも昔から言はれたことであつて、殊に今回の大東亞戰爭劈頭に於ける東條首相の第一聲は、此の「必勝の信念」の强調



アレキサンダー大王（左方馬上の人）とペルシヤ王（中央車上の人）との戰

であつた。この信念、此の確信こそ必勝の秘訣である。日本軍の見敵必殺、捨身必殺等々の信念は皆此の必勝精神から起るところのものである。

アレキサンダー大王は此の必勝の信念を以てペルシヤ遠征に向かつた。時に年二十二歳。彼は僅か三萬五千の寡兵を以て天涯萬里、しかも精兵百萬を擁するペルシヤに向かつて勇躍進擊を開始したのである。無謀にして無策の遠征にマケドニヤの重臣宿將等は皆其の前途を危んだ。大王は頑として聽かず、財産を分與し、裸一貫となつて征途に上つた。

そして先づ、今のダーダネルス海峽を渡り、河の對岸に陣せる優勢な敵に對し、白晝、敵箭雨下する河を徒歩し、勇戰奮鬪して見事敵を破つたあたりは、戰術の法則からすれば、全然無茶な無謀の行動であるが、それが不思議にも勝つたのである。之は必勝の信念昂張の結果に外ならぬ。

ハワイ奇襲、シンガポール攻略などは軍事專門家から見れば到底成功の見込ないものである。それで米人は襲擊不可能と云ひ、英人は難攻不落と誇つたが、瞬くうちに日本軍の手中に落ち、もろくも陷落したのである。これは其の術の如何を論ずるよりは、必勝の信念に燃えた皇軍の魂がかくさせたのである。信念の力は實に偉大なもので、巖を貫く箭の譬もあり、これこそ理外の理、神秘の力の現れである。

科學文化に眩惑せる西洋人が、机上の理論に於て不可能なりと斷定するところの戰の問題が、此の超科學的な必勝信念の力によつて片つ端から破壞されて行くのは實に痛快である。

現に日本軍の破天荒な戰蹟を、彼等が今なほ科學の一點張りで研究しようとするのは、餘りに西洋流の形而下の學理に捉はれたものといふべきで、日本人の持つ神秘ともいふべき眞精

神を解せざるの甚だしいものである。彼等がＡＢＣＤ包圍圏を以て、容易に日本を屈服せしめ得べしと豫斷した所に、既に大なる違算があつた。彼等に此の思想のある限り、到底日本の敵ではないのである。

さてアレキサンダー大王の必勝の信念は到る所に戰勝を博し、シリヤ、エヂプトを征服し、遂にはペルシヤ王の率ゐる歩兵百萬、騎兵四萬、戰車二千輛、象十五頭と云ふ大軍と、今のスモール市の東南アルベラの野で決戰することとなつた。此の時に於ける大王の軍は、僅に歩兵四萬、騎兵七千に過ぎなかつた。

即ち二十倍の大敵、しかも堂々白晝敵地に於て戰ふと云ふのだ。誰か之を無謀の軍略と言はないものがあらう。而も此の無謀は彼の戰略であり、戰術であり、戰法であつた。全く無軌道の軌道であり、無方針の方針であつた。こゝに大王の大王たるところがある。さすがのナポレオンでもこのやうな無茶はしなかつた。

日本軍は、滿洲事變から支那事變にかけて常に二十倍の敵に對して攻勢をとり、連戰連勝した。今もなほ大東亞戰に優勢な敵を到る所に擊破してゐる。しかし今の日本軍にせよ、昔のアレキサンダー大王にせよ、只々僥倖を恃みに戰を行つたのではなく、他の人が見て以て無茶となす所に、ちやんと戰の大道が通じてゐたのである。それが卽ち世人の云ふ神秘の力、靈の力、天佑神助と云ふものだ。しかし是等の力は決して偶然に天から降つて來るものではない。必ずや其の由つて來るところの素因がある。因なくして果なく、果のある所必ずや因がある。戰爭の勝敗に就いては特に此の種の研究が必要である。

アルベラの戰

頃は紀元前三三一年の夏である。ペルシヤ軍百萬はアルベラの野に露營し、其の營火煌々として天を焦がし、四邊晝をあざむくかと見えた。大王の軍僅かに四萬七千、既に敵に吞まれた形であつた。大王の部將等、此の光景を望見して非常に驚き、到底白晝の交戰に勝目なし、唯それ夜襲の一事あるのみと判斷し、夜襲を大王に勸めた。此の獻策は戰術上至當のことである。然るに大王は、これを聽かず『予は勝利を掠むるを欲せず』と豪語した。夜陰竊かに敵の寢込みを襲ふやうな卑怯な振舞をやつて勝つたところで、それは勝利の掠奪であつ

て男子として名譽でも何んでもない。それよりは運を天に任かせ、白晝堂々と戰ふのが男子の本懐だと云ふのだ。何たる痛快な言であらう。

それは今回のシンガポール陷落の會見において、我が山下將軍が敵將に對し『戰ふなら男らしく堂々と戰はう』と言つた氣持と同じく、男性的、武人的な聲である。こゝに日本人の偉いところもあれば、大王の偉いところもあつたと云ふものだ。

何んでもいゝ、勝ちさへすればいゝと云ふやうな卑怯なことは日本人の採らざるところ、大王の欲せざるところである。英國人も、曾ては騎士の國民と史上ではいはれたこともあるが、それは似而非なるもの、僞善擬裝した手前味噌の史事であつて、英國人の心の底には今以て海賊の思想が流れてゐるのである。英國に次のやうな諺がある。

　人が何んといはふと、勝ちさへすればいゝんだ。海賊だ、貿易だ、通商だ、紳士協定だと云つても皆同じことだ、勝つて取りさへすればいゝ……

と云ふのである。これはエリザベス王朝時代に、英國が大いに海賊的行爲を奬勵保護して、國富を殖やす政策を採つた時に流行した歌謠である。全くの泥坊思想であつて、人道も情義もない利己主義、功利萬能主義、掠奪至上主義の現れである。英米人の僞紳士たることは、今度の大東亞戰爭においてます／＼暴露し、いよ／＼露骨となつて來た。天道は正義に與みす、貪慾飽くなき英米、何時かは天の審判を受けるに相違ない。否、すでに今、それを受けつゝあるのだ。

日本の武士道は勿論、俠客仲間でさへ、卑怯な振舞をして勝を得るのを非常に卑しいこととしてゐた。若しもそんなことをやるものがあれば、首を懸けるところまで世の非難を浴びたものであつた。わが國に於けるこの武士道的精神は現に戰陣に於て光を發し、敵國人をすら敬服せしめてゐる。シンガポールの敵軍が約八萬の兵を擁し、無限の軍需品を蓄へながらオメ／＼と降伏するといふのは、彼等の心の奥底に如上の卑怯な精神が潜んでゐるからに外ならない。

大王の採つた戰法は一見「無茶」のやうであつても、彼の心には「必勝」の戰法が講じてあつたのだ。當時ペルシヤ軍には無數の戰車があつた。その戰車は非常に有力なもので、車の兩側に長い鎌のやうなものを多數打ち附け、進むに從ひ敵を撫で斬りにすると云ふ仕掛け

の恐しい新武器であつた。これに對し大王は如何なる戰法を採つたか。

大王軍にも戰車があつた。されど其の數が至つて僅少で、且つその力は極めて薄弱であつた。そこで大王はこれを全廢し、其の馬を以て騎兵隊を編成した。そして有力なる敵の戰車に對しては、次のやうな戰法を突差の間に考案して、其の訓練に努めた。其の法は、

敵の戰車を曳く馬の脚を斬ること、馬の手綱を切ること、馭者を刺し殺すことの三つであつた。

此の法は敵を斃さんと欲せば、先づ其の馬を射よとの戰法である。二千輛をも超ゆる多數の戰車を有するペルシヤ軍はかゝる手法に懸かるとは露知らず、例の如く悠然と戰場に現れるのであつた。

やがて大王は軍を三分し、歩兵方陣を中央に進め、騎兵を左右の兩翼に放ち、先づ方陣を以て敵と戰ひ、其の酣なるに乘じ、左右より騎兵を以て疾風の如く突擊せしめた。敵の戰車群は大なる期待をもち、大王の軍の寡小なるを見てこれを侮り、大鎌を左右に横たへ、怒濤の如く突進したのであるが、大王の例の奇拔な戰法にかゝり、馬は脚を斬られて倒れ、戰車は顚覆し、馬の手綱は切られ、御者は殺され、戰線は一大混亂の巻と化し、大軍であるだけに、ます〳〵亂脈を呈して指揮は亂れた。大王これを見るや、川中島の戰における上杉謙信の如く、旗下の精鋭を提げ眞一文字にペルシヤ王の乘つてゐる戰車に突進し、これを虜にせんとしたが、王の護衛兵の槍衾に隔てられ間一髪のところで之を逸した。

斯くして大王は此の決戰に大勝を得てペルシヤを亡ぼし、それから印度方面の遠征に轉じ間もなくバビロン府に歸り病を以て死んだ。時に年三十三歳。此のアルベラの戰に於けるペルシヤの死傷約三十萬、大王軍僅かに千五百と云はれてゐる。

此の所において、少しく英雄と理想を論じて見る。世間では、古來から英雄と謳はれたものは皆理想が雄大であつたと唱へてゐる。是れには一面の眞理もあらうが、アレキサンダー大王の如き、古今の英雄中の英雄であつたにもかゝはらず、果して史家の云ふ如く、歐亞を統一し、其處に世界的大文明國を建設せんとの大理想を最初から持つてゐたか否か、疑問とする所である。

大王最初の理想は、普通に一國の君主の抱いてゐる理想の如く、單にギリシヤの仇敵たる

ペルシヤを擊破してギリシヤ國民の歡心と信頼を得、そしてマケドニヤ王國の基礎を固め、永くギリシヤの覇權を握らうとしたのではなかつたか。

然るに戰つて見ると、意外にも戰況は好轉し、寡兵よくペルシヤを制壓しエヂプトを攻略し得たので、朧を得て蜀を望むの譬の如く、彼の理想や希望は戰勝每に大きくなり、從つて抱負遠大となり、自分は神の命を享けて生まれて來た寵兒であると、自分で自分を神格視するやうになつたのではあるまいか。古來の英雄皆そのやうな經路段階を經てゐる。ナポレオンなども、最初は、砲兵大佐にまで昇進し得れば最上の榮達と思つた程であつた。それが、イタリヤ戰役で意外の勝利を得たので、だん／＼望みも大きくなり、遂には執政となり皇帝となり、末には印度までも征服して世界大帝國を建設し、己れ其の主權者とまでならうとした。つまり理想は年と共に、事件と共に進展し擴大し向上したのである。

我が賴朝にせよ、信長、秀吉、家康にせよ、皆これと同樣で、最初は小なる理想であつたに相違ない。抑も人間には、大なり小なり慾望はあるもので局長になると、今度は次官になり、大臣になり、總督になり、總理大臣になりたいと思ふのは人情の自然である。人情の自然と云ふよりは、天の人間に與へた貴重な本能である。この向上の慾望があるからこそ、世は進歩し、人は發展して行くのである。故に人間は出來るだけ遠大の目的なり理想なりを立てて進むべきである。

しかし英雄と云ふ名は、大てい成功した者に附せられてゐる。故に英雄は好運に惠まれた人だとも云ふことが出來る。かの德川の天下を倒して己れこれに代らんとした由井正雪あたりは、失敗したればこそ其の名も埋もれたが、若しも成功したらんには家康以上の英雄と謳はれたであらう。世には此のやうな埋木英雄が決して少くない。

唯こゝに至上至大の理想を掲げ、天地と共に渝らざる大英雄とも云ふべき標本がある。それは皇國日本である。日本の大理想たる八紘一宇の觀念は、肇國以來何千萬年の昔より何千何萬年の末に至るまで永久不變の極大理想であつて、是れ以上の理想はないのである。故に皇國民の使命は昔より一定不變であつて、歐米人の如く、時により、主權者により、其の理想に高低大小のあるべきものではない。こゝに日本の特色があるのだ。

或哲學者は英雄たるものは、何等かの天職を帶びて此の世に生まれ、天職終れば直に去つ

て此の世を離れると云つてゐるが、如何にも其の通りで、秀吉、シーザー、ナポレオン皆然りである。殊にアレキサンダー大王は其の顯著なるもので、彼は疾風の如くに出現し、而して流星の如くに消え去つた。

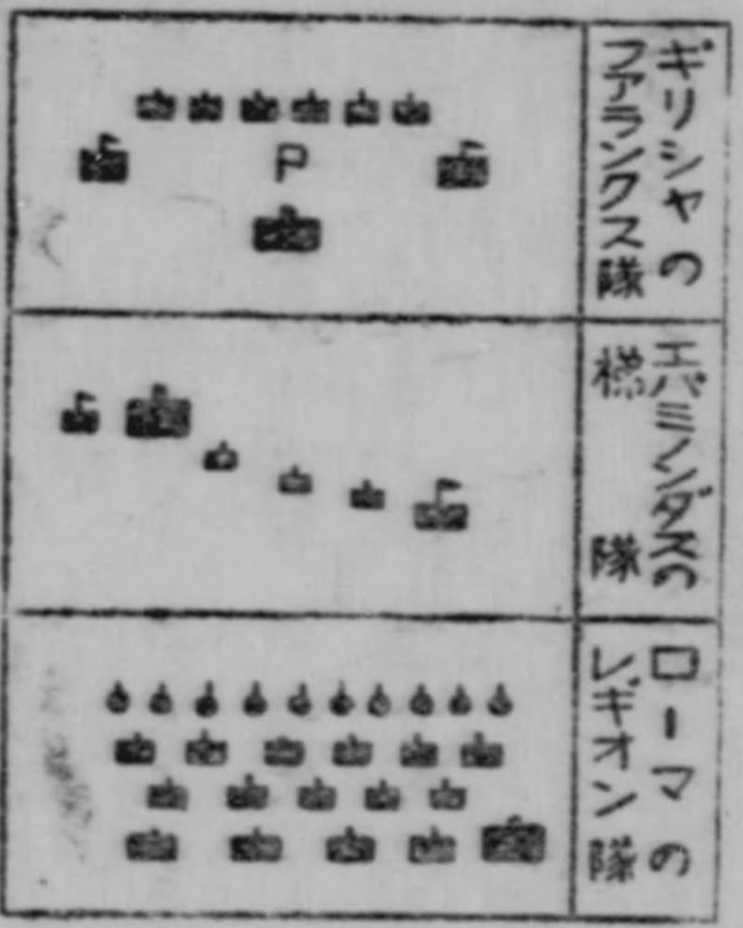
ローマのレギオン隊

ローマ人は慓悍勇武で自由思想を有してゐたから、矢張り彼等の用ふる軍隊も其の性情に合ふやうに、レギオン隊と云ふものを發明案出した。

ギリシヤ人はフアランクス隊と云ふのを案出して大いに戰果を擧げたのであるが、此の隊は四千人も密集した箱詰め的の隊形で、個人の獨自的行動を許されず、從つてその特異の技量を發揮することが出來ず、たゞ指揮官の號令で器械的に動くだけであつた。

然るにローマ人は自由思想を有し且つ勇敢、自然單獨鬪爭を好む風があるので、これに適するやうに密集隊の單位を千人か千二百人くらゐとし、各單位の間隔を開き、戰鬪の時個人をして自由に戰ふことの出來るやうにしたのである。

彼等は此のレギオン隊を以て戰勝を博してゐたが、カルタゴの名將ハンニバルの攻擊を受け、散々に打ち破られた。ハンニバルは騎兵を巧みに用ひ、かの有名なカンネの血戰でローマ軍は殆ど殲滅されたのであつた。されどローマは隱忍、執拗、敢て矛を收めず、遂にはザマの決戰でカルタゴを滅ぼして遂に大ローマ帝國の基礎を築いた。



ギリシヤ、ローマの隊形

此のローマとカルタゴとの戰はポエニ戰爭或はカルセージ戰爭と呼ばれてゐるが、この戰爭は前後百二十年に亙る史上空前の長期戰役であつた。其の結果は前述の如くローマの勝利に歸したのである。當時カルタゴの都は人口八十萬、ローマ市の人口は三十萬であつた。

ポエニ戰爭についてはは研究すべき事項頗る多いが、こゝではその戰略だけにつき、特に述べて見ることとする。ローマ以前にギリシヤ、ペルシヤ、エヂプト等の戰史もあるが、現代

に用ひてゐる戰略に相應すべき適切な戰爭は餘り見當らない。つまり昔の戰爭は大抵體當り戰法でその勝敗を決すると云ふ極めて單純なものが多く、戰略的な戰法を用ひたのは甚だ少い。然るにポエニ戰爭には、雄大な戰略が用ひられたといふところに大なる興味がある。

イタリヤとカルタゴとの間にはシシリー島がある。兩國は恰も蛟龍の珠を爭ふが如く、この島の爭奪を繰返した。つまりこの島を我が手に收めることによつて地中海の覇權を獲得しようと考へたのである。ローマはこれがため兵をスペイン方面に出動させてカルタゴ軍をこの方面に牽制し、若くは此の方面からカルタゴの側面を突かうと計つたのである。之はなかなか遠大の作戰であつた。これに對しカルタゴでは、海軍を以てシシリー島方面にローマ軍を牽制し、ハンニバルの率ゐる陸軍を以てスペイン方面よりピレネー山脈を越え、ローン河を渡り、アルプス山を突破して北部イタリヤからローマを衝かしめたのである。ハンニバルは此の歴史的大遠征を斷行してイタリヤを攻略し、約十五年間南部イタリヤを占領してローマを戰慄せしめたのである。しかし時利あらずして彼はカルタゴに歸り、ために遂にローマを陷れる事は出來なかつた。然し以上兩國のとつた戰略は戰史上研究に値するものである。

又この戰を今日の大東亞戰と對照研究するにそこに類似の點が極めて多く特に興味を覺ゆるものがある。カルタゴは海軍國で且つ富國であり、ローマは陸軍國で富める國ではない。カルタゴは富の力で何事も解決し得ると樂觀してゐたのに對し、ローマは腕の力を以て國運を伸長せんと努力した。而して其の結果は金權主義のカルタゴが滅亡した。これは恰も現下における米英の運命を卜する史例とも見るべきで、實に興味深いことである。

ローマの兵

ゲルマニヤ人の戰術

ローマは連戰連勝遂には當時の世界を統一してローマ大帝國を建設した。かくてローマは國の强大となるに從ひ、富も殖え文明も進んで來た。さうすると、從來採つて來た攻勢主義による國防方針も、何時しか守勢主義の國防方針と變り、富の力に任かせ、國民皆兵制度を

廢して傭兵制度を採用するに至つた。然るにこの傭兵には强勇なゲルマニヤ族が多く任じたため遂にはその傭兵長であるゲルマニヤ人の爲にローマは亡ぼされるに至つた。

一體このゲルマニヤ族といふのは今のドイツ方面にゐた民族で、住みよい處を選んで轉々と移住して歩くのを常としてゐた。彼等は、一歩踏み出せば四面皆敵であるから、全員武裝し、今の軍隊のやうに尖兵、前衛、本隊、側衛、後衛、大行李、輜重と云ふ風に嚴重なる警戒部署をとつて前進する。かくして適當の所に到れば露營、幕營、簡單な小屋掛をして休養する。

以上のやうに彼等の一族は、移動國家、移動部落と云ふべきもので、正眞正銘の國家總動員、種族皆兵である。昔、彼等の間には都市と云ふものがなく、ドイツでは要塞都市のないのを自慢した時代があつたが、それは斯かる古代移動時代の習慣から出たものであらう。要するにドイツ民族には防禦と云ふことがなく、何時も攻擊戰を以て自己の安全を圖つて來たのである。かゝる精神は今日のドイツに於てもそのまゝ傳統されてゐる。ドイツ戰史を見るに常に攻擊作戰のみである。フレデリック大王然り、第一次世界大戰然り、今次のヒットラーの電擊作戰またこの傳統に立つものである。

古き時代のドイツ民族の武器は木の槍であつた。此の木槍は最高名譽の象徵であつて、日本でも劍術試合の優勝者に木刀を與へることがある。これも何か昔からの由緣があるであらう。そこで此の槍と刀のことであるが、槍は突くもの、刀は斬るものであり、西洋人は突くことを古代から戰法の要訣としたもので、殊に心臟を突くことが最も有效な致命法であるとされてゐた。之に對しては楯を防具として重用した。楯は矢を防ぐ用にも使はれたが、本來の目的は槍で心臟を突かれるのを防ぐことを主眼としたものである。故にそれをハート形に作り又はハートのマークなどを附けてゐるのである。

中世期の武士

日本には楯と云ふものが殆ど使はれてゐない。これは頭を斬り割つて致命させる、即ち致命部は腦天にあるといふ考から出たもので、頭を斬る刀が賞用されるやうになつた。

此のやうに東洋人と西洋人との間に、いろ〳〵に異つた思想風習のある事は研究すべき問題であらう。西洋人の拳闘、銃劍術は之から起つたものである。喧嘩においても西洋人は突く、日本人は叩く、なぐるを常とする。兵器の關係上日本兵は銃劍術をやるが、いざとなれば面倒なりと銃劍を振り上げて敵を叩き下ろすのである。此の突く、斬るの利害は別として昔のドイツ人は一體に槍を尊重した。

彼等は左手に楯を持ち、右手に槍を持つた。そして甲冑を着けない。甲冑は敵と戰つて奪ひ取れと云ふ定めである。

兵種は歩兵と騎兵とに分かれ、歩兵は弓と矢、騎兵は槍と楯とを持ち、それに一人の歩卒が付く。この歩卒は馬の口を持つたり、戰の時、騎兵斃るれば、それに代り、或は首を斬り取る役をなした。

開戰となれば全軍槍をガチヤ〳〵と鳴らし、楯を叩き、鼓を打ち、角笛を吹き、軍歌を唱へて壓擬する。日本の戰史には軍歌と云ふものがない。吶喊と云ふことがあるから、太鼓を打ち、鐘を叩き、喊聲を發して氣勢をつけたことは認められるが、軍歌のなかつたのは、ここにも亦東西兩洋人の性質上の特色がある。

彼等の戰闘隊形は横隊であり、そして最も勇敢な兵は先頭に立つて眞一文字に突撃するといふ戰法である。楯を戰場に遺棄するは、軍人として最大の恥辱とされた。彼等の諺に「萬物皆死す、たゞ勇者の名のみは死せず」と云ふことがある。それは戰場で死んだ勇者は軍神の側に侍して、幸福なる新生涯を始め得るといふ信仰からである。

東方民族

こゝでは東方から歐洲に殺到した匈奴、サラセン、トルコの特色ある戰ぶりを述べる。

アッチラの戰術

匈奴王アッチラは東洋種族中の豪傑である。史蹟から考へると、世界英雄中の優位にあるやうだ。然るに西洋史では、彼を野蠻極まる山賊の頭領くらゐに卑下してゐる。その眼は鬼

の如く、鼻は獅子鼻、口は鰐口、容貌魁偉で髯髮蓬々動物の如しと書いてあるが、決してそんな野蠻人ではない。彼は寧ろ當時のドイツ人、フランス人よりもすべての點に於て優れてゐたやうである。殊に彼の戰略的才能に至つては歐洲人の遠く及ばざるところであつた。

匈奴の風俗

アッチラの作戰は超電撃的で、當時歐洲の天地は爲に震駭した。彼の東方より進撃するや東歐、中歐地方に居つたドイツ民族は土崩瓦解、雪崩を打つてドナウ河を越え、アルプス山を横ぎり、ライン河を渉つてローマ帝國内に遁竄した。此の大海嘯のやうなアッチラの襲撃は、實に歐洲史の上には空前の大事件であつて、ローマ帝國の瓦解も實にその源をこゝに發してゐる。つまりアッチラに追はれたドイツ民族が遁れてローマ帝國に亂入し、苦しまぎれに掠奪荒殘を恣にした。故にローマから見ればドイツ民族のために荒らされたことになるが、彼等にしてみれば、實はローマへ逃げ込んだのである。英人の祖先であるアングロサクソン族も此のアッチラに逐はれて、北歐の地から英本土に走つたものだ。

紀元四五一年アッチラ自ら將となり、八十萬の大軍を率ゐ、其の根據地である今のハンガリーの居城を發せんとするや、彼は馬を陣頭に進めて大演說をやつた。其の要旨は

今や我等は全世界の征服者たらんとす。勇士として戰爭を外にして滿足すべき事業それいづくにかある。ローマ軍の脆弱なる我が騎兵の一蹴に價せず。死生は命なり。勇士は神助により矢石の間にありてなほ其の身を完うし得るも、怯懦者はその惠佑にあづかるを得ず。如何なる場合においても予に從へ。予に從ふものは幸を得ん。

と。

之を見ると、彼の理想は頗る大であつて世界的であり、その意氣はまさに天を衝き、眞に快男子の風がある。生死は天命であると喝破せる所彼は宇宙天地人の眞理を會得せるもの、殊に躬行率先の大號令を下したあたり、眞に大英雄の觀がある。彼は決して無謀の戰略家でもなく、誇大妄想の戰術家でもない。而して彼の行動事蹟を検討するに、外交、政治、統御の才において、恰も成吉思汗と同型の英雄たるを思はしめるものがある。東洋的英雄と、西洋的英雄との間に何處かしら異なつた點があり、而して後者の局蹙してコセ／＼した所ある

東方民族侵略圖

に反し、前者は遼として天地を呑むの概あるを見る。シーザーと成吉思汗を比較し、ナポレオンと秀吉とを對比して見ても、ます／＼その感を深くする。

アッチラは敵によりその戰法を異にし、地形によりその作戰を變ずるに實に妙を得てゐた。つまり臨機應變の才智を、隨所に發揮したのであつて、これこそ名將の本質である。

アッチラは到る所敵を破り、ライン河を渡つて今のフランスの東部を蹂躪し、オルレアン城を援けんと、四方からオルレアン城めざして驅けつける。アッチラはこれを見て、深く敵地に入りたるの危險を察し、斷然その圍みを撤して後方に退き、パリーの東方シャロン附近なるカタラヌムの野に陣して敵の來襲を待ち、これを邀撃せんとした。こゝに彼の偉いところがある。

古來名將の特色は攻むべきに攻め、守るべきに守り、退くべきに退くにある。事容易なるに似て、而もこれを斷行するはなか／＼の難事とされてゐる。昔より善く退くものは名將だと云はれてゐるくらゐで、宋襄王は攻むべきに攻めないで敗れ、武田勝頼は長篠の戰に守るべきに飛び出して敗れ、佐久間盛政は賤ケ岳の戰に退くべきに退かずして捕はれた。今アッチラは八十萬の大軍を以てオルレアン城を圍んでゐる。たとひ四方から敵の援軍が來ればとて、決して敗を取るやうな惧れはない。しかしこれがため多大の犧牲を拂はねばならぬことを看破するや、サッと圍みを撤して後方に陣し、敵を牽きつけて戰はんとしたところにゝ彼の戰を見るの明があるのである。普通の將軍ならば退くにもその戰線を固守したことであつたらう。

かくてアッチラは新陣地に退き、ローマ、西ゴートの聯合軍を相手に戰ひ、西ゴート王を斬つて敵の勢威を挫いたが、西ゴートの王子は父王の復讐なりと決死的の逆襲を行ひ、ために再び血戰となつて兩軍入り亂れて戰ひ、容易に勝敗決せず日沒に至つた。アッチラはひとまづ軍を收めてその場を去り、後方適當の所に退いて宿營した。此の夜アッチラは、突差の間に車陣を作つたのである。

車陣とは圓陣の要塞である。彼は何萬と云ふ騎兵の鞍を集め、之を積み重ねて圓陣を作り鞍の山の堡壘を築き上げた。そしてアッチラ自身は、其の圓陣の中央に一段と高く築き上げた鞍堡の上に、傲然として座を構へ、四方を睥睨し、兵を鞍堡の蔭に潛めて靜なること林の如く裝ひ、少しばかりの警戒兵を哨兵としてその夜を撤した。敵の夜襲に對する用意周到にしてしかも當意卽妙なる處置については、後世兵家のひとしく感服措く能はざるところである。

ローマ、西ゴート聯合軍は、戰々兢々として一夜を其の附近に過し、夜が明けて見ると、アッチラ軍は一兵も戰場にゐない。たゞ遙か向かふに不可思議な山が見える。恐る〳〵偵察して見るとそれは馬鞍を以て臨時構成した圓堡であるので、西ゴート王子は父の仇を報いんと運を天に任かせて攻擊を開始したが、忽ち雨霰の如く打ち出す敵矢のため大なる損害を受けて敗退した。この時アッチラ軍の後方に叛亂勃發の兆があるので、彼は此の方面の戰を打ち切り、堂々とライン河を渡つてハンガリーの根據地に歸つた。この戰に於ける兩軍の死者のみでも十六萬二千人と云はれる。

アッチラは更に再征を企てたが間もなく頓死して、これを果すことが出來なかつた。彼の死後之を繼ぐ俊傑なく、遂にさしもの大帝國も崩壞のやむなきに至つたのであつた。かくしてアッチラもアレキサンダー大王と同じく、疾風の如く現れ、流星の如く去つた。

ツールの戰

次に述べるツールの戰は回敎と基敎との決戰、東洋種族と西洋種族との取組であり、史上有名なもので、ツールはオルレアンの西南にある。

サラセン回敎軍は世界統一を企て、破竹の勢を以てシリヤや小アジヤ、アフリカ方面を平

げ、其の一軍はジブラルタル海峽を渡りスペインを席卷し、ピレネー山脈を突破してフランスに侵入し、歐洲全土を震駭さした。この時フランスに君臨してゐたフランクの將チヤイルス・マルテルは、これを防がんとしてオルレアン方面より南下し、ツール附近に於て兩軍相會した。回教軍サラセンの將はアブデルラーマンであつて、その兵力は各約十萬であつた。サラセン軍は例のアラビヤ駒に跨り、輕くして彈力のある刀と、槍を揮ひ、戰場を疾驅しては敵を突き、突いては颯と引き上げる、其の進退の敏速なること風の如く飛鳥の如き輕快さであつた。

一方フランク軍はこれに反し、重い甲冑を着けた步兵で、重い刀、重い斧を持ち、恰も地にどつかと腰を据えた岩の如く、敵近づけば重い斧を上段に振りかざし、敵の馬も人も眞二つにするといふ沈着剛勇の强兵で、動かざること山の如き鈍重軍隊であつた。卽ち兩軍の對照は一は騎兵、一は步兵。一は輕裝、一は重裝。一は槍、一は斧。一は疾風の如く、飛鳥の如く、一は岩の如く山の如しと云ふ珍しい好一對の取組みであつた。

互に近距離に陣して睨み合ふこと一週日、氣の早いサラセン軍は遂に突進を開始し、回敎の法に從ひ例の如くコーランを高く竿頭に翳して喊聲を發し、槍と刀を振り廻はして佛軍に向かひ殺到した。佛軍はびくともせず、例により斧を振り上げて奮戰したが、勝敗容易に決しない。

當時侵入軍のサラセン人は莫大な分捕品を後方に置いてゐる。佛將マルテルは早くも之を察知し、窃かに一隊の軍を遣はして此の分捕品の輜重隊を襲擊せしめた。これを見たるサラセン兵、分捕品危ふしと叫ぶや、その聲全線に傳はり、大恐慌を來たして後退せんとした。サラセンの將アブデルラーマンは叱咤激勵してこれを支へんとしたが、勢の赴く所遂に如何とも致し難く、彼は亂軍の間に戰死したので全軍總崩れとなつて敗走し、佛軍の大勝利となつた。爾後サラセン軍の佛國侵襲なく、基敎國はこゝにやうやく安堵の胸をなで下すことが出來た。

歐洲人は、先にはシヤロンにおいてアツチラを破つて西歐文明を擁護し、今又ツールにおいてサラセンを破つて歐洲基督敎徒の危急を救つた、もしも佛國がアツチラに敗れ、サラセンに負けてゐたならば、歐洲の天地は全く別の世界となつてゐたであらう。

ツールの戰において、フランク軍が斧を以て岩の如く動かなかつた有様は、ちやうどワーテルローの戰におけるウエリントンの英軍に酷似してゐる。ナポレオンが之に向かひ、かの有名なフランス騎兵の大襲擊を行つて失敗したのは、サラセン軍の騎襲失敗と同樣である。これら鈍重軍の特色もまた戰術上研究に値することである。

君府の陷落

君府とは有名なコンスタンチノーブルのことで、今はイスタンブールと唱へられてゐる。これが千年あまり、東ローマ帝國（ビザンチン帝國）の都となつてゐた。此の間幾度か敵に攻められたが陷落せず、天下の名城、難攻不落と稱せられてゐた。それが紀元一四五三年、オスマン・トルコ帝モハメツト二世の爲に遂に陷落し、爾來トルコの首府となつて第一次世界大戰まで續いたが、大戰後トルコは首都を小アジヤのアンガラに移した。しかし君府は相變らずトルコの重要都市として、海峽關門の要鍵となつてゐる。

トルコは旭日昇天の勢を以て小アジヤを席卷し、ボスポラス海峽を越えて君府の北方を征服した。そしてアドリヤノーブルに都を置き、君府を戰略的に包圍し之を陷れんと畫策至らざるなかつた。されど名にし負ふ名城のことゝて、容易に陷れることが出來なかつた。

トルコ帝モハメツト二世、年二十三歳、禁酒禁煙、教育あり、身を處する謹嚴、統御の才あり、君府の攻略準備のため三年の月日を費した。

君府城は城壁二重にして高く、周圍約十里、海陸兩方面の防備頗る堅固である。そこでモハメツト二世は一大巨砲を發明製造した。その大砲は口徑九十珊で、彈丸の重さ三百貫、射程一哩と云ふ開闢以來の巨砲で、第一次世界大戰に使つたドイツの四十二珊の大砲よりも、今回シンガボールの要塞に備へ附けてあつた四十八珊のそれよりも遙かに大きいものであつた。帝はこれを秘密のうちに作り上げ、アドリヤノーブルより、君府まで六十里を運ぶに二ケ月を要した。而して帝は兵三十萬と大砲千八百門、軍艦三百二十隻を以て君府を取り圍み、此の巨砲を以て攻擊したが、城兵僅か一萬足らずであるのに寡兵を以て防戰大いに努めたため、城はなか〳〵陷落しないのみならず、攻擊軍の損害頗る多く、間もなく三萬の死者を出した程であつた。

さらばとて、今度はマルモラ海の方から攻撃して見ると、此の方面もまた鐵鎖、鐵網、逆茂木等の障碍を以て防ぎ、且つ燒討の出來るやうに準備がしてあつて、如何とも策の施しやうがない。

此の時、トルコ帝は親ら第一線に出て偵察した結果、圖らずも君府城の東側に內海のあるのに氣がついた。此の內海方面からは未だ一回も攻撃を加へたことがない。それで城內の方でも特別の防禦設備を施してゐなかつた。帝はこれを見てハタと膝を打ち、よしツ、この內海に船を浮かべ、船上に大砲を載せて城壁を打ち崩し、こゝより城內へ突入しようと考へた。つまり浮砲臺を作るの策である。これは全く敵の意表に出づるは勿論、今日まで味方でさへも誰一人考へ及ばなかつた奇案妙策であつた。

其の內海にどうして船を持つて行くか……トルコ帝はボスポラス海峽から內海まで十哩の間に厚板を布き並べ、その上に動物の脂を塗り、そして船には滑車をつけ、帆をかけて運ぶこととし、八十隻の船を一夜の內に運搬して拂曉までに內海に浮かべ終り、その上に大砲を載せた。夜の明くると共に城壁めがけて撃ち出し、忽ちにして破孔を作り得たので、待機してゐた步兵はその破孔から突撃を敢行し、潮の如く城內に亂入して遂にこれを陷れたのである。城兵は全く不意を打たれて周章狼狽、度を失して施すべき術を知らなかつた。

世界の名城君府はかくして陷落した。昔から守つて落ちざる城はない。城はこれに據つて守るべきものにあらずして、これを足場として前に躍進せんが爲のものである。ヒツトラーは國境にジーグフリードの要塞を築いたが、しかもこれに據ることなく、これを據點として猛然として進撃し、佛、白、蘭の野を蹂躙し遂にパリーを陷れた。フランスはマヂノ線なる金城鐵壁の要塞を作り、これに噛ぢりつくやうにして防禦し、兵の全部が捕虜となつた。繰り返していふ、昔から攻めて落ちない城はないのであつて、金城鐵壁、難攻不落と誇りしコンスタンチノープルもまたその例に漏れなかつた。大なる一つの教訓である。

火器現出以後の戰術

火器を發明して軍用に供したのは十四世紀の初であつたが、當時の火器は未だ弓矢、飛矛

にも及ばないものであつたから、勿論戰法上にも大なる影響を及ぼすまでには至らなかつた。

そも〳〵大砲や小銃のなかつた時代、戰鬪の勝敗は格鬪によつて決定されたものである。つまり體當り戰術、肉彈戰法であつて、突擊力を强大ならしめることを主眼としたものであるから、奥行のない一列や、二三列くらゐの横隊では威力がなく、五列、十列、二十列と縦深の大なるもの程突擊の推進力が强くなるわけである。この考からして縦隊が作られたのである。エヂプトの百人四方の一萬人隊、ギリシヤのフアランクス隊では、その縦深を八列、十六列、甚だしきは四十八列までとし、ローマでは十列とした。これみな槍、矛、劍等の接戰兵器の力をなるべく効果的に發揮せしめんがための工夫であつた。

然るに火器の飛道具が使用される時代となつては、隊形上に二つの要求が生じた。その一は火器を使用するに便利な隊形、その二は敵火から受ける損害をなるべく僅少ならしめる隊形たることであつた。これが爲には隊形の深さを少くすればよい。そこで隊の深さを六人、三人にするといふ風になり、遂には一人づつの散兵と云ふやうになつた。卽ち昔の方陣は火器の出現により、だん〳〵薄つぺらな横隊となつたのである。さう云ふわけで、隊形の新研究新發明が起つて來た。

グスタフ・アドロフ王の戰術

スウエーデン王グスタフ・アドロフは、西洋六大兵家（アレキサンダー大王、ハンニバル、ケーザル、フレデリツク大王、ナポレオン等）の一人と呼ばれた名將で、彼は傭兵でなく自國民から成る常備軍を作り、軍人の制服を定め、歩兵、騎兵、砲兵の三兵種を合理的に連合使用する所の新戰術を發明し、其の他種々の軍事的改良を行つて名聲を轟かした。

三兵種をどう云ふ風に配置使用したかといふに、砲兵を第一線に置き、次の第二線には歩兵（半分は槍兵、半分は小銃兵）を置き、その兩翼に騎兵を配し、第三線には騎兵團を置いた。

これは、先づ砲兵を以て敵を制壓し、それより第二線に在る小銃隊が猛射し、その效力の見えた頃合に、槍兵と左右兩翼の騎兵が突擊に移り、最後に第三線の騎兵團を以て敵を蹂躙

するといふ戰法である。彼は此の戰術を以て到る所敵を破り、殊に三十年戰役に勇名を轟かした。爾來此の戰術は各國の學ぶところとなり、漸次發達して、フレデリック大王の横隊戰術となつたのである。

フレデリック大王の戰術

大王は前述のスウエーデン王グスタフ・アドロフより百二十年後の人である。スウエーデン王時代は未だ銃劍と云ふものがなかつたから、銃兵と槍兵と別々であつたが、その後今日のやうな銃劍即ち劍著け鐵砲が發明されてから槍兵といふ兵種はなくなつた。

大王の發明したのは横隊戰術と云ふのである。彼は歩兵を二線とし、第一線歩兵の間には砲兵を所々に挾み兩翼に騎兵を置いた。此の一横隊の人員は約三千人でちやうど今の一聯隊に相當する。此の隊の主眼とするところは射撃を容易且つ有效ならしめるにあつた。しかし横幅の廣い隊形であるから運動は頗る困難であつた。大王は此の困難を排除するため、一方ならざる苦心と工夫と訓練とを要した。

戰鬪の時は此の隊形のまゝ前進し、適宜の所に到れば砲撃、次いで小銃射撃を行ひ、其の效果の發揮せらるゝ頃を見計つて突撃するといふやり方である。此の時大王は大いに騎兵を利用した。

大王は七年戰爭に特に此の横隊戰術を應用して敵を破つたが、彼は此の七年の間、殆ど首府ベルリンに歸らず、兵と共に山野に起臥し、風餐沐雨、七難八苦を忍び、苦辛慘憺つひに最後の勝利を得て、普國の大をなしたのである。

爾來各國は競うて大王の横隊戰術の研究を始めたが、大した效果を見ないうちにナポレオンの縱隊戰術に破られてしまつた。隊形は讀んで字の如く形である。戰の勝敗を決するのは形にあらずして魂である。大王の魂が横隊を動かし、魂と横隊とは一體となつて活動したからこそ效果を奏したので、他國の模倣横隊には精神が入つてゐず、魂と隊形とは離れ〴〵であつたから成功しなかつたのである。さればこれを隊形の罪と云ふわけには行かぬ。

散兵戰術

フランス革命戰の當初に、佛軍は散兵戰術を用ひた。しかしこれは佛軍の發明でなく、アメリカ舶來の戰術である。

アメリカとしても特に工夫發明したと云ふわけのものではなく、偶然にバラ〳〵にちらばつて戰つて見たところ、案外效果があつたので、アメリカ獨立軍に參加した佛國軍人等が歸國して革命戰に之を應用したまでのことである。

アメリカ獨立軍は殆ど軍事訓練のない義勇兵であつて、銃器の取扱も十分でなく、又號令によつて活潑な動作も無論出來ない。これに反し英國兵は兎に角正規の敎育を受け、その流行の橫隊戰術を以てかゝつて來たのである。これに對しアメリカ兵は、たうてい橫隊の編成などは出來ないから、バラ〳〵となつて射擊を始めた。然るに英國兵は密集してゐるから、非常に損害が多く、アメリカ兵はバラ〳〵に散開してゐるから、損害は少くして奇效を奏したのである。即ちアメリカ軍としては意外の功を收めたわけである。のみならず、此の散兵は密集隊のやうに窮屈でなく行動が自由であるから、自由主義のアメリカ人の氣性に適合し大いに好評を博した。

散兵戰術は以上のことから自然に生まれたもので、俗にいふ怪我の功名とも稱すべきものであつた。事物の發明とか發見はよく此のやうな一寸したきつかけから生ずることがあるもので、アメリカの浮浪人上りの兵士（此の時のアメリカ兵の多くは浮浪人）が近世の花形戰術たる散兵を發明したといふのは面白いことではないか。

縱隊戰術

フランスの革命軍もアメリカ兵と同樣に、正規の軍隊でなく義勇兵であつた。義勇兵と云へば如何にも立派に聞えるが、實は浮浪破廉恥漢の集團であり、それを指揮する將校も臨時徵募のもので、劍客の親分、醫師、辯護士、獵師の頭領といふやうな連中であつたから、軍隊のことはいつかうに知らず、從つて當時採用されてゐた橫隊戰術などを知らう筈がない。そこへアメリカ歸りの將校が加つて散兵戰法を吹聽したから早速それを應用したのである。

然るにフランスの敵は、强勇の稱あるプロシヤ、オーストリヤ、ロシヤと云ふのであるから、單に散兵ばかりの戰法では敵を擊ち破ることが出來ない。そこでフランスの陸軍大臣カ

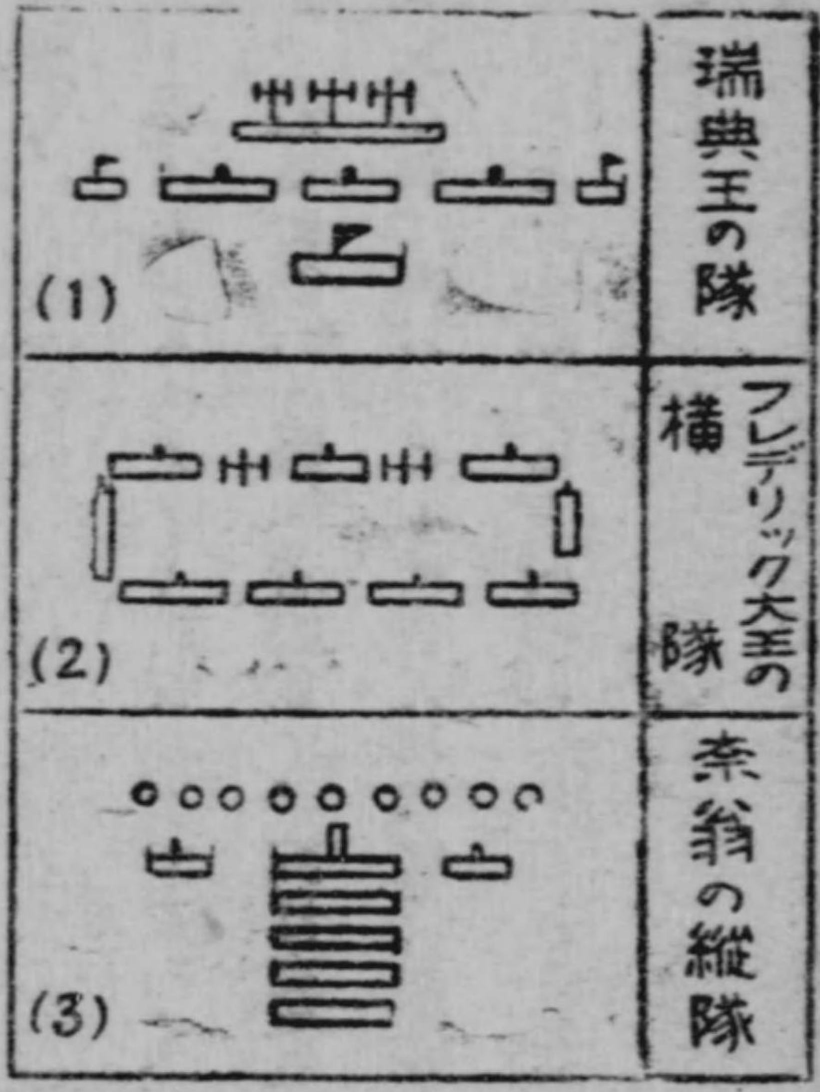
ルノーは工夫を加へ、研究に研究を重ねた結果、此の散兵の後方に密集部隊を置き、散兵で敵を猛射した後、此の密集部隊を以て突撃するといふ新戰法を發明し實施して見たところが、案外好成績を現して敵の横隊戰術を撃ち破ることができた。そこで佛軍ではこれを正規の隊形として戰場に用ふることとした。これがそも〳〵世にいふところの縦隊戰術なのである。

縦隊戰術と云へばナポレオンの發明したモダン戰術だと思はれてゐるが、その實は前述の如くカルノーが發明したもので、ナポレオンはカルノーのパテントを横取りして、それに自分のレッテルを貼つたやうなものである。しかしナポレオンは無論その戰術にいろ〳〵な改良を加へて完全なものにしたことはいふ迄もない。

フレデリック大王の發明し、應用した横隊は射撃には有效であるが、突撃とか敏速なる運動には不便な點が多々ある。然るにこの縦隊戰術は自由自在に活動し得る散兵で射撃し、適當の時機に其の後方の縦隊が突撃することが出來るから、非常に都合がよい。しかしこれとても大した奇抜なものではなく、寧ろ平凡な戰術なのである。

世人は戰略とか戰術と云へば非常に高遠にして幽玄神秘な哲理的なもので、とても常人に思ひ及ばざる最高の學理、技術かと思つてゐるかも知れないが、それは誤りであつて、戰術といふものは前にも述べた通り、普通常識の少し發達したものなら、誰でも一と通りは出來るものである。我が豊臣秀吉などはほとんど學問を勉強した人ではなかつたが、戰略とか戰術にかけては古今獨歩の名將である。ナポレオンは士官學校を出たばかりだし、アレキサンダー大王は當時の碩學アリストテレスを家庭教師として學んだくらゐであるから、一と通りの戰術學は修めたであらうが、それも大した深い研究をしたとも思はれない。現にドイツのヒツトラーなどももと〳〵將校の出ではなく、深い專門的な軍事上の研究をした人ではなかつた。然るに彼の作戰的着眼並に手腕は高等帥兵術を研究した專門の將軍等を感服させてゐると云はれてゐる。こゝに吾人は戰略とか戰術とかいふものは常人の及ばざる深遠なるものでないことを强調すると同時に、その反面に於て戰略的な天才といふものの出現にも一つの期待を持たざるを得ないのである。

事實、眞理は平凡なものでその平凡な戰術は却つて成功してゐる。あまりに理論的に複雑



隊形の變遷圖

綿密を極めた作戰計畫は失敗に終るものだ。今度の大東亞戰爭に於て、敗れた英、濠の將校等は、日本軍の作戰は實に簡明單純なもので、それが勝利を博した主因だと告白してゐる。世の中のことは簡單なものは成功し、複雜なものは失敗する。元來此の大宇宙は頗る簡單なもので晝は明かるく、夜は暗く、暑い夏が去つて秋が過ぎれば冬は寒く、やがて春爛漫の櫻花も嵐が來れば忽ち散つてしまふといふ有樣であつて、複雜なやうであるが至つて單にして純なものである。同樣に、昔から、兵は簡にして疾きを尙ぶと云はれてゐる。

要するにナポレオンは、此の縱隊戰術を用ひて連戰連勝した。しかし其の連戰連勝は必ずしもこの縱隊戰術の效果とのみ見ることは出來ない。ナポレオンの手腕が其の縱隊戰術を使ひこなしたから成功したのである。如何に切れる鋏でも剃刀でも、使ひ手によつて利鈍の差が生ずる。

ナポレオンに敗れた各國軍も、毎度の敗戰に懲りて縱隊戰術を用ひたが、やはりナポレオンに負けたのである。魂のない模倣戰術、腕のない人眞似戰法は失敗に終るものだ。

ナポレオンの戰略

ナポレオンの兵學界に寄與した功績は、戰術方面よりは寧ろ戰略部門に屬する方が多いやうである。否、眞の戰略的作戰はナポレオンによつて始めて開かれ、彼以前には戰略なしといつてもよい程であつた。

アレキサンダー大王の戰は何れかと云へば戰略でなく戰術であり、スウエーデン王グスタフ・アドルフ並にフレデリツク大王の如きは一の戰術家たるに過ぎなかつた。しからばナポレオン以前に戰略がなかつたのか、又戰略的名將がゐなかつたかと云ふに、決してさうではない。凡ての名將は皆戰略的才能を有してゐる。それは戰略の智と戰術の智とは同根であつたからだ。たゞ、昔においては兵力が比較的少く、地形交通は不便で、通信法が不備であつた

から、戰略的行動をとらうとしても不可能であつた。今日では日本にゐてハノイ方面でも、マレー方面でも、支那方面でも、電氣科學の發達により自由自在に連絡が出來るから、廣大な地域にわたり、大軍の作戰を指導することが出來るが、昔はそれが出來なかつた。

然るにナポレオン時代に至ると通信連絡の方法も漸次開け、兵力も大きくなつたから、戰略的作戰を指導することが出來、ナポレオン亦その方面の天才を發揮して、現今に見るやうな大仕掛けな作戰の模範を示したものである。それで敵軍は皆ナポレオンの戰略に參つてしまつた。彼の戰略の一、二を擧げると、敵と同等若くは寡少の兵力を以て相對峙しある時、彼は戰線の一方から兵力を抽き出して之を他方の戰線に加へ、其の點に優勢を占めて敵を擊破するといふやり方、これは全體において劣勢であつても、一點において優勢を占める戰略で、一點突破の戰法である。ナポレオンはこの戰法の達人であつた。

も一つの例は、諸方面から一點に向かひ兵を進めて敵を包圍殲滅しようといふ戰略、これは分進合擊と云ふので、これ又彼の得意とする戰法であつた。此のやうにナポレオンは兵力が寡ければ寡いだけに、多ければ多い程に、いろ〳〵戰略の手を用ひて敵を壓倒屈服したのであつた。西洋戰史の上から見れば、ナポレオンは先づ戰略的名將と云へよう。

しかし東洋においてはナポレオン以前に、それ以上の大戰略家があつた。それは成吉思汗である。彼は百萬の大軍を中央アジヤから歐洲にかけ、自由自在に、しかも頗る敏速圓滑に指揮したあたり、只々感服するの外はない。戰線百里に亙る大軍を、どうして、そのやうに容易に操縱したかと云ふに、彼は例の蒙古騎兵を通信連絡に使用して絕大なる結果を擧げたのである。

なほ、この成吉思汗より偉い戰略家がゐた。それは豐臣秀吉である。今、秀吉の戰略的手腕の冴えたところを一々例證する餘裕もないが、彼の戰略は恐らく世界獨步のものであつて、成吉思汗もナポレオンも、シーザーも、アレキサンダー大王も遠く及ばざるものがあつた。

秀吉の戰略は戰はずして勝つと云ふことに重きを置いてゐる。百戰百勝善の善なるものにあらず、戰はずして勝つ、これが善の最善なるものとは古來からの教である。アレキサンダー大王にせよ、フレデリック大王にせよ、ナポレオンにせよ、彼等は戰には勇に、常に勝利を得ても、秀吉のやうに戰はずして勝たうと云ふことには餘り力を拂はなかつた。只々戰

つて勝たう〳〵と云ふことにのみ腐心した。ナポレオンあたりは、戰爭がないと頭痛がするといつた程である。故に彼等の戰には壯烈痛快なものはあるが、これは決して善の善なるものではない。ナポレオンのモスコー敗退の如き、もしも秀吉であつたならば、あんなヘマなことはやらなかつたであらう。

秀吉のやつた九州征伐、四國征伐、小田原征伐の如き、みな戰はずして勝たうとした彼一流の戰略で、完全に成功してゐる。もしも之がナポレオンであつたならば、兵力の優勢を恃み、遮二無二攻撃して敵を殲滅したことであつたらう。

小牧の役において、秀吉方は兵力上德川方に對し三倍の優勢を保ちながら敢て挑戰せず、而もたうとう彼は勝を占め、家康をして自ら兵を撤して本國に退かしめた。これがナポレオンであつたならば、直に決戰したであらう。秀吉は然らず、戰へば勝てるが戰はずして勝てる法をとつた所に彼の偉いところがある。

秀吉のことを德富蘇峰氏は、近世國民史にかう言つてゐる。秀吉は小刀を使ふことも出來れば薙刀を使ふことも出來、一刀流の達人であると共に兩刀使ひの名人であり、又忍術らしいこともやれば氣合術の天才でもあり、一萬の兵でも百萬の兵でもそれ相應に使ひこなせる神將であると、實に天下の名言である。事實秀吉はこの通りの名將であり英雄であつた。

さてナポレオンの戰略はその後、一八六六年の普墺戰役、一八七〇年の普佛戰役において普將モルトケによつて科學的に最も有效に實施され、それが現代の作戰範例として兵書の上に光を發するに至つた。而してその後更に洗煉研究が積まれ、一九一四年の第一次世界大戰に、開闢以來の大軍を運用する作戰を見るに至つたのである。

現に戰はれてゐる歐洲戰爭、大東亞戰にせよ、たとひその戰ひ振りが立體的になつたとしても、その戰略的法則は、古今を通じて一貫した哲理によつて規定され、指導されてゐるのである。つまり、戰の道は、人類が昔と同樣な人間である以上、宇宙が昔と同樣な世界である以上、決して變るものではない。道は何處までも一本である。

現代戰における歐米人

ナポレオン時代から、一九一四年に起つた第一次世界大戰に至るまでの戰略、戰術といふものは、各國とも似たり寄つたりのもので、さう變りはなかつたのである。つまり小銃や大砲や機關銃のやうな飛道具で敵を痛め、さうして歩兵、騎兵を以て突撃するといふやり方であつた。

しかし科學の進歩に伴ひ、兵器にもいろ〳〵な新發明が現れ、それが作戰上に重大な影響を及ぼすやうになつた。

戰車といふ怪物が出る。毒瓦斯といふ恐しいものが襲ふ。飛行機といふ化物が飛ぶ。潜水艦といふ魔物が現れ、四十二珊といふ超的大砲が唸るといふ有樣であつて、應接に遑ないほど、殺人的の新兵器がそれからそれへと出現して來た。

第一次世界大戰の時から、それらの怪物兵器が戰場に現れ、空には飛行機、海には潜水艦、陸には巨砲、毒瓦斯といふ、いはゆる立體戰術となつて來て、戰爭は全く變つた方法で導かれるやうになつた。しかし第一次世界大戰當時には、これらの怪物が未だなほ試驗時代であつて、さほどの效果もなかつたが、その後各國共、窃かに競爭的にそれらの新兵器の改造發明につとめ、それが今度の第二世界大戰の舞臺に現れ、實に驚異的の威力を發揮してゐる。

ヒツトラーの電撃戰、皇國日本の電撃戰が即ちそれだ。ドイツのポーランドに對する殲滅戰、ノールウエーへの侵撃、オランダ、ベルギー、フランスへの電撃的侵入、ギリシヤ本土、クレータ島、リビヤ方面への神速作戰、ソ聯への猛攻撃等眼の廻るほどの作戰はまさに西洋歴史稀有の壯擧であつて、アレキサンダー大王、ナポレオン等の英雄も地下にあつて驚嘆してゐるであらうほどの一大作戰である。

此の間に、恐るべき威力を持ついろ〳〵な大砲、爆彈、戰車、裝甲自動車、それに落下傘といふ新しいものまで出て戰線を唸らせてゐる。しかしこれらの新兵器より成る新戰法はどこまで進むか、今のところ殆ど見當がつかないくらゐである。

從つてその使用する兵力の數も非常に多くなり、その戰爭の範圍も廣大な空間、陸地、水面に亘つて廣がり、世界全面こと〴〵く戰場といふ有樣となり、前人のたうてい想ひ及ばない大がかりなものとなつて來た。

かうなつて來た結果は、國家總力戰、國民皆兵が叫ばれ、それ〴〵が現實となつて來たの

である。此のやうに大兵力が廣區域に展開するやうになつては、これを指揮運用する作戰の方式も從つて非常に複雜となり、人智を要する程度も增して來たわけである。

昔は腕力のある者が勝つて酋長となり、王となり、帝ともなり得たが、今ではさう云ふわけには行かぬ。知識がものを云ひ、智慧が最後の勝を占める趨勢となつて來た。これが本當である。知識が無くては兵器の新發明も出來ず、智慧が無ければ敵の機先を制して大軍の作戰を指導するわけにも行かぬ。そこでいよ／＼かうなつて來ると、智慧の優る者が最後の勝者となるわけだ。

故にドイツとソ聯との戰を占ふには、その指導者たるヒツトラーとスターリンの智慧の優劣如何を見ればよいのである。大東亞戰に於て、日本軍が連戰連勝してゐる所以の根源は、云ふまでもなく、日本軍の强勇にあるのであるが、それも單に强勇であるばかりでなく、日本人の智慧が遙かに敵人より優れてゐるからだと見るのが至當である。

此の「智慧ある者、優勝者たるべし」といふ原理は昔からの鐵則であるが、現代のやうな大じかけの戰爭となつては、いよ／＼痛切にその感を深くするのである。此のことに就いては更に日本の章末に述べるであらう。

以上西洋人の戰略。戰術、卽ち戰法を通觀するに「形」に重きを置いたものであつて、卽ち唯物思想から生まれた戰法と云ふことが出來るやうだ。彼等は百人四方の一萬人密集團を作り、正面二百五十人、深さ十六人から成るフアランクス隊を作り、正面十六人、縱深十六人のマケドニヤ槍隊を作り、百人くらゐの方陣であるレギオン隊を作り、スエーデン王の三線配備、フレデリツク大王の横隊戰術、ナポレオンの縱隊戰術をはじめ、點の戰術、線の戰術、體の戰術、群の戰術等々、殊に形式を尙び、それにより戰鬪の勝敗を決しようとした考へ方が普通であつたやうだ。勿論名將は臨機應變の戰法を用ひたが、一般の將帥は概して此の形式戰法に捉はれたやうだ。

形式の發明も勿論「智」からの產物である。又その形式を運用するのも「智」の働きである。戰爭はもとより勇の力によつて鬪はれるが、それよりも「智」の力によつて勝敗の左右されることが多い。我々日本人の眼から、西洋人の戰ひ振りを見ると、感心させられることもあるが、また實に間が拔けて智慧の無さ過ぎると思ふことが多い。日露戰爭時における露

兵、今回の大東亞戰における米、英、濠軍の態度についても、幾つもこれらの事實を發見する。

これは「所變れば品變る」で、宇宙の法則により、西洋人と東洋人とはその色素の異ると共に、その智慧のかたちも異るためであらうか。要するに、軍事上の智力に就いては、我等日本人は西洋人を凌いでゐることは、幾多の事實に於て之を證明することが出來る。論より證據、實戰における勝敗は、その最も神聖にして公平なる審判と言ふべきだ。

東洋人の戰略

これから東洋のうち殊に支那の戰爭について述べて見る。

支那は古い國だけあつて、戰略。戰術に關すること、卽ち兵法のことに就いてはなか〳〵發達し、隊形なども、魚鱗、鶴翼、長蛇といふ風に理論的に研究實施され、いはゆる「孫呉の兵法」などと云ふものがあり、それが我が國にも及んで、信玄、謙信、信長、家康などは盛にこれを應用した。

何處の國の神話にも必ずいくさ物語があるものである。そしてそれがたとひ荒唐無稽な夢物語のやうなものでも、それにより、その國民性の如何なるものであるかの一端を窺ひ知ることが出來るものである。

果して實説かどうか、何千年昔のことでよくはわからぬが、上述の意味に於て大いに注目すべきものがあるから、これより支那最初の戰爭であると云はれてゐる共工の亂その他を紹介してみる。

支那合戰の始

秦の始皇帝は天下を統一した時、普通の「王」號では氣がすまないで、支那の神話時代の君主と云はれ、後人の崇敬の的となつてゐる三皇五帝の威徳をかねると云ふ意味で、皇と帝とを合せ、自ら始皇帝と稱し、自分のことを「朕」と呼ぶこととしたとある。

その支那古代の三皇の始めは伏犧、五帝の始めは黄帝と云はれた。

つまり伏犧は支那歴史の元祖で、漢人種の間で一般に尊敬せられてゐる。此の伏犧が死んだ頃、支那最初の合戰が始つたのである。

共工の亂

共工の亂とは共工氏を名乘る康回と云ふ大名が亂を起し、朝廷がこれを討伐したところの戰である。此の以前にも、無論戰爭があつたに相違なからうが、神話傳説としては、この内亂戰を支那最初の戰としてゐる。

共工の亂は一つの政權爭奪戰とも思はれるが、また一種の戀愛戰爭である。

伏犧帝存位千百十五年、壽千百五十歳で崩じた。その妹に女媧と云ふのがあり、身の丈二

丈五尺、生まれながらの美人で賢德あり、衆に推されて一時帝位に卽いた。

此の時、諸侯の内に共工氏康回と云ふ豪傑があり、身の丈二丈六尺、全身に毛が生え、面は鐵の如く黑く、髮は蓬の如く、眼は星の如く爛々として光り、骨相は惡質なれども、智は萬人に優れ、雲を起し、風雨を發するの才あり、殊に河を現し、水を止むるの術に長じ、性淫佚にして湛樂に耽るとある。

かねて女媧氏は天の成せる容姿、婉然として婀娜に、窈窕として妖艶に、一たび笑へば百媚自ら人を動かし、一たび步めば百花袖にかゝるが如しといはれた。康回もとより好色の者なれば、一見して神魂飛び、何とかして女媧を妻としおのれ伏犧の後を繼がんと思つたが、このたび女媧が帝位に卽き、今は却つて主君と仰ぐ身となつては何とすべき方も無く、遂に亂を起し、女媧を强奪してその位を奪はんとした。そして彼得意の術を以て河を止め、大氾濫を起して王城を水攻めにした。

女媧大いに驚き、群臣を集めてこれが對策を議した。諸臣奏するに康回神通自在の曲者なり、征伐容易にあらじと、憂色堂に滿つ。

時に左翼の方に在つた一人の勇士が、長槍を取つて躍り出でた。見れば拍皇と云ふものにて身の丈二丈九尺、顏面赤くして鬚なく、「願はくは先鋒たらん」と云ふ。女媧大いに喜び、則ち一匹の鹿毛馬と先鋒の印綬を與へた。

時に右翼の方より史皇なる豪傑が飛び出した。身の丈二丈八尺、美髯を蓄へ、大刀を提げ白馬を牽き、怒氣を發して滿面朱を注ぎ、破鐘の如き聲にて「われ先鋒たらん」と叫んだ。拍皇之を遮り、「われ君命により先鋒たり」と叱し、互に罵り合つて、こゝに先鋒爭ひが起り、兩勇士の一は鹿毛に乘つて槍を揮ひ、一は白馬に跨つて刀を振り、格鬪が生じた。

女媧之を見て徐ろに立つて制し、微笑して、よし〱兩士の忠誠嘉賞すべしと、兩人に同じく先鋒を許し、拍皇は左軍の先鋒、史皇は右軍の先鋒たるべしと命じた。此に於て兩人大いに喜び、かくて十萬の大軍は王城を出でて康回討伐にと向かつたのである。

叛將康回之を聞き、呵々と大笑し、小女子輩何事をか爲さん、籠中の鳥、網中の魚、一擧にして之を屠らんと、黑馬に跨り、身には鎖鎧を著け、金の兜を戴き、手に大刀を按じて陣頭に現れた。官軍の先鋒拍皇、史皇各々馬に乘り、一は槍、一は刀を翳して進み、康回に打

つてかゝつた。

康回叫んで曰く、豎子誤る勿れ、徒らに我に抗して命を損ずるよりは、我に降りて共に天下を取り、厚祿にあづかれよと。拍皇、史皇の兩雄、何を言ふかと、直に兵器を閃かして康回を左右より挾擊せんとした。康回少しも騷がず、三尖の大刀を舞はして右にあたり左に拔け、善戰八十餘合、黑、赤、白の三馬巴の如く亂舞し、槍と大刀と三尖刀とが入り亂れて戰ふ有樣、實に天下の壯觀であつた。

そのうち拍皇の馬が岩に躓き眞逆樣に倒れる。康回すかさず三尖刀を以て之を斬らんとすれば、史皇走り來りて之を妨げ、三尖刀の下を潛つて康回に組まんとした。康回は組まれては不利と逃げるとみせて、退きながら用意の弓をば手早く取つて史皇を射つた。其のうち拍皇も起ち上り徒歩にて追ひ來る。康回又射つたが矢は命中しない。そのうち矢種も盡きたので、康回は奥の手の呪文を唱へた。

すると、不思議や河水天に漲り、見る／＼うちに女媧の大軍は人馬押し流され、拍皇、史皇の兩勇も如何せんと身を採むところを、康回は水上を駈けることと鳥の如くにして二人を討たんと馳せ近づく。二勇士進退究まり、ふと左の方を見れば、一つの高き丘阜あり、その上に白髮の老人、俗骨を離れたるが、藜の杖をつき莞爾として笑つてゐる。二將が救を乞ふと老人頷きて杖を水上に投げ出す。

するとそこに忽然として一條の路が出來、二將それにより危地を脫することが出來た。康回之を見て大いに怒り、逃げる二人を顧みもせず老人に向かひ弓を取つて射たが、老翁忽ち一の白鶴となつて空に翔け去る。康回なほ追はんとしたが、日已に西山に沒して道昏く、行に便ならず、よつて齒をくひしばり憾を殘して歸陣した。かくして第一回の戰は女媧側の敗となつたのである。

女媧の軍敗れて歸るや、再び軍議を開いて再征を謀つた。史皇曰く、康回神通力ありてとても敵し難し、此の際たゞ祝融氏に請ひて其の援助を求むるより外なかるべし、祝融氏は身の丈三丈、面珠の如く、既に鬚髮白しと雖も神通の才あり、必ずや出でて王事に盡くさるべしと。そこで史皇自ら使者となつて遙か南方の汾睢の地に隱居せる祝融氏を訪ひ、康回討伐の王命を傳へてその出馬を請うた。祝融莞爾として笑ひ、先日の水戰に汝等を救ひしは吾な

りと。直に召命に應じ兵三萬を集め、馬に跨り長槍を取りて出陣し、五色の旗を作り色によつて軍を分ち、兵には皆灰袋を携帶せしめた。これは康回の得意とする氾濫を此の灰袋によつて防がんとしたのである。

やがて祝融は將となり、拍皇、史皇の兩將を參謀となして康回の居城に迫り、例の如く互に問答、即ち言葉合戰をやり、然る後實戰となつた。祝融自ら先頭に出て、白將を揮ひ、長槍をすごいて康回に迫つた。

康回は例の三尖刀を舞はして一往一來、互に戰ふこと五十餘合、康回の刀法次第に亂れて危ふきに至るや、城中より妄字亂頭と云ふ大豪が鐵棒を輕々と打ち振り、康回を助けんと馳せ來たつた。しかし祝融は槍を以てこれを擊ちすくめた。

こゝにおいて康回は、最後の手段として例の呪文を唱ふれば、洪水滔々として起り、祝融の軍に向かひ決し來る。かねて此の事あるを期した祝融は少しも驚かず、直に旗を一閃して合圖し、各兵をして携へ來たつた灰袋を投ぜしめた。すると水は忽ち此の灰に吸ひ取られて一面の土塊となつてしまつた。此の機に乘じ拍皇、史皇は馬を驅つて康回に向かひ突進し、又相戰ふこと數十合、康回は心身疲れ、到底勝算なきを察し、一策を案じ、一時を遁れんとして叫んで曰く、我已に運盡きて黃泉の鬼とならんとす、されどこゝに互に斬り合ひて兵を損ずるは罪深し、我もとより戰を好むものにあらず、宜しく相議するところあるべしと。かく言ひて拍皇、史皇の氣を緩ませ、その機に乘じ城中に逃げ走らんとした。

祝融遙かにこれを見て、不可なり、不可なり、康回を逸すべからず、今彼を斃さずんば後難恐るべしと叫び、急に追擊し、槍を以て康回の肩を突いて重傷を負はせた。康回勝つこと能はざるを知り、こゝに最後の觀念をなし、猛吼一聲、自ら頭を不周山の石に觸れて微塵に碎いた。つまり今の自爆である。さうすると四方鳴動し、天柱折れ地維缺き、西北に當る天の一隅は崩れ、東南に當る地の一角は潰えた。

祝融乃ち走り寄つて康回の首を斬り、これを梟し、その家屬を捉へた。然るに不周山附近はその後、黑雲暗霧晝夜を分かたず、陰氣靄々として如何ともすることができぬ。こゝに於て祝融は神力を以て燭龍を呼び來り火光を放たしむ、幽暗の地忽ち快明となつて民安んじ、爾來天下大いに治り萬民業を樂しむを得た。云々。

以上の戰が支那史上戰爭の始元だと云はれてゐる。この事たるやもとより虚誕の傳說であらうが、之が支那人の間に傳へられ、何時とはなしに彼等の精神と血肉の間に、其の虚誕のことが染み込み、一の憧憬となり、思想となつて、孫悟空のやうな空想らしいこと、仁木彈正のやうな咒文らしいこと、種々樣々の色彩を軍陣の間に使用すること、黃巾の賊、紅槍匪、大刀匪等々、現代の常識から見れば滑稽至極、噴飯に堪へざるやうなことを、支那人は今なほ眞面目臭く實行してゐる所を見ると、彼等は迷信の深い民族、一種の空想を有する人種であることが推察されるのである。つまり以上のやうな虚誕の說は勿論後人が國民性に合ふやうに作り上げたものであつて、之によりその民族性の一端を判知することが出來るのである。

故に各國の神話傳說なるものは、架空のものなりとして一概に之を排斥することなく、これにより其の國民性を知るの資料に供すべきである。

この戰を察するに、康回の咒文による河水出現のことは、多分今の黃河又はその支流を氾濫せしめたもので、現今の氾濫戰法のことであり、之に對する祝融の灰袋は今の土嚢のことであらう。祝融の色を以て軍隊を區分したやり方は確に名案である。康回が不周山で頭を碎いたため天地晦冥となり、祝融が火の神となつて之を明かるくしたあたりは、我が天の岩戸の神話に似てゐるので研究上興味がある。世に火事のことを祝融と云ふのも、此の傳說から起つたものであらう。

黃帝の戰法

支那史によれば、黃帝の時から、戰略・戰術と稱すべきものが起つたといはれてゐるから、簡單にその當時の戰ひ振りを述べて見る。

但しこれらは、神武天皇御卽位前約二千年の出來事であるから、そのつもりで凡ての判斷をせねばならぬ。當時の支那の皇帝は炎帝神農氏の後裔揄罔と云ひ、今の山東省曲阜附近に都してゐたが、惡政を布いたため天下の諸侯叛亂し、その內最も强大であつたのは涿鹿の太守蚩尤といふ豪傑であつた。蚩尤は膂力衆に秀で、兵術をよくし、殊に例の咒文を唱へて雲霧を起し、劍戟を降らす等の魔術に長じ、その勢甚だ盛であつて、首府に向かひ攻め込んで

來た。

そこで皇帝揄罔は將軍小顥に兵三萬を授け、出でて蚩尤を討たしめた。小顥は奮戰大いにつとめ、一時は蚩尤の軍を防ぎ止めたが、蚩尤大いに怒り、得意の咒文を唱へると、見る〳〵うちに空中から劍戟が雨の如く降り來り、今迄の靑天は忽ち晦冥となつたので、小顥の官軍大いに困惑した。

小顥も名に負ふ剛のもの、何んぞ兒戲に等しき蚩尤の術に屈すべきと、彼また遁甲の法、白猿の術を唱ふれば、忽然として天晴れ、日輝き、劍戟は粉々として草となつて降り來るのであつた。蚩尤は自分の法術の破れたのを見て大いに怒り、さらばとて今度は大霧を起し、洪水を發した。これには小顥も逐に敗れて曲阜の城内に遁入した。

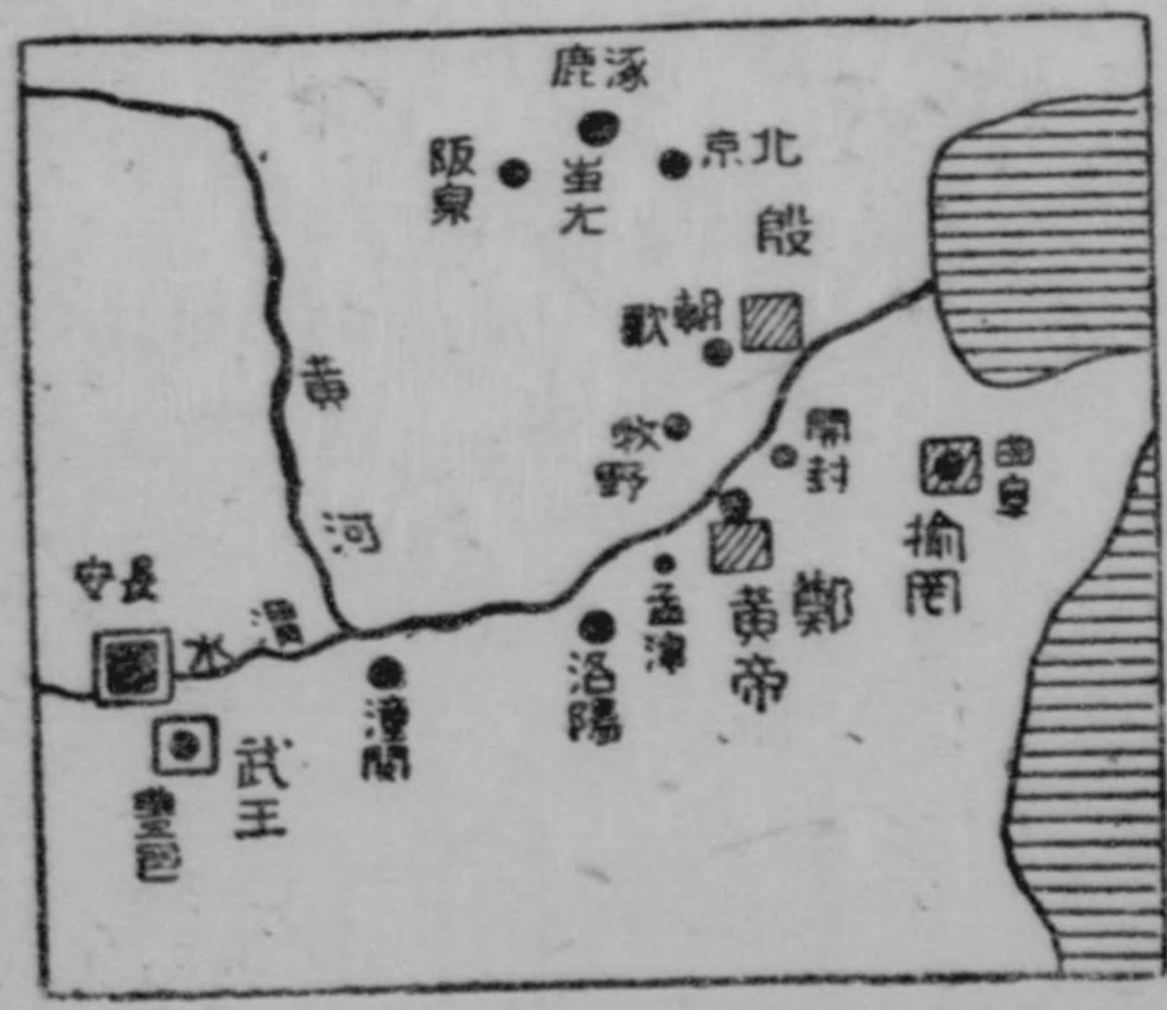
蚩尤は追うて曲阜を包圍した。城兵思ふに蚩尤は勇猛にして妖術に長じ、且つ兵衆くして敵すべからず、たゞし蚩尤は總軍を擧げ來つたのであるから、恐らくは其の居城には空虛あらん、夜陰に乘じ窃に城を脫出し、疾驅して涿鹿に至り之を占領せんと、三更を期して城を脫し、首尾よく敵の居城涿鹿に侵入し得た。蚩尤も亦翌朝城兵の遁走したるを知り、曲阜の城を乘つ取り大いに戰勝を賀した。

暫くにして蚩尤は、帝が反對に涿鹿を占領したるを聞き大いに怒り、殺氣を帶びて走り、遂に涿鹿城外に至り、勝手知つたることとて稻麻竹葦の如く城を取り卷き、其の陷落も正に近きにあらんとした。此の時黃帝が出現したのである。

黃帝は後の名で、當時は今の河南省鄭州附近の大名で軒轅氏と呼ばれてゐたが、こゝでは便宜上黃帝と書き續ける。

黃帝幼にして慧敏、能く干戈を用ひ、新しき戰法を發明したと傳へられてゐる。例へば干戈といふ文字、干は楯にして戈は戟なり、これらも黃帝時代から戰に用ひられたと云はれてゐる。彼は義軍を起し、步兵三萬、騎兵

周以前の圖



五千を率ゐ涿鹿に進んで蚩尤を討たんとした。蚩尤は城内に在る帝軍と城外に來れる黄帝軍とを内外に受けて、なほ勇敢に戰ひ容易に屈しない。のみならず時々例の大霧の祕術を以て敵軍を惱まし、兵勢日に盛となつた。

黄帝深く之が對策に思ひを凝らし、指南車を發明して、大霧中の作戰指導を容易ならしめんとした。ちやうどマレー半島におけるジャングルの通過法或は敵の煙幕に對する防禦法を研究工夫するやうなものである。

やがて戰はふたゝび始められた。黄帝は指南車八を造つて兵士をそれに載せ、兵士は皆黄衣を着けて黄旗を持ち、大霧起るも困迷せざるやう訓練を施し、そして城内にある帝軍と諜し合はせ、内外より蚩尤軍を挾擊せんとした。

涿鹿城の樓上には將軍小顚立ち上つて采配を採り、金鼓を鳴らして勢を助け、黄帝は自ら馬を驅り槍を横たへ、挑戰し來る敵將趙仙を一擊の下に馬より落し、例の指南車を從へて奮進し、蚩尤の軍を擊破した。蚩尤は最後の手段として馬上において法術を行ひ、忽ちにして大霧四方に起つたが、黄帝軍は指南車のお蔭で少しも困迷することなく、隊列を亂さず進擊したので、蚩尤は豫期に反し心中大いに驚愕して戰ふ能はず、遂に黄帝の一槍を胸に受け、それが致命傷となり、少しく逃走したが遂に斃れたので、黄帝乃ちその首を取り、敵軍を掃蕩して凱旋した。

天下の民これを聞き、黄帝を德とし、推して帝となさんとした。揄罔帝これを聞いて憤り、黄帝を擊たんとして阪泉の野に戰ひ、敗れて馬上に刎死した。こゝに於て、天下君なくして叶はじと、諸侯相議して黄帝を天子に推戴した。之より帝は德を修め治を圖り、殊に兵制・戰法の改革を行ひ、甲兵を設け、旗の旌法を制し、屯營制を布き、後世傳はるところの八陣の法を定め奇正の戰法を創めたと云はれてゐる。故に支那の兵法は黄帝時代から始つたと見るべきである。

此の黄帝の戰つた涿鹿、阪泉の戰は、我が國神代の諏訪湖畔の戰鬪にも比すべきもので、謠曲「箙」に「血は涿鹿の河となり……」とあるのは、即ち此の涿鹿の戰を云つたものである。涿鹿の地は北京南方とも云へば、又宣化附近とも云ひ、阪泉は山西省の北部であつて内長城の線に沿うた地方である。

太公望の戰法

寡兵必勝の陣

太公望は天を經とし地を緯とするの才を持ち、兵を配り陣を布くの術あれども未だ時を得ず、清貧に甘んじて仕を求むることもなく、日々河畔に踞して鈎を垂れた。それも餌を設けず、釣針は眞直ぐにして鈎がなく、われ魚を釣らず王侯を釣るなりと稱してゐた。

周の文王（西伯と云ふ）賢者を求めて太公望を得、厚く遇して大軍師とし内政に當らしめ治績大いに揚つた。文王殂するに當り、太公望をその子武王の師父たらしめた。當時の帝は殷の紂王であつて河南省新鄉附近の朝歌と云ふ所に都を構へてゐた。武王は今の西安南方の豐邑と云ふ所に居り、衆望のある大名であつた。

殷の紂王は妖妃妲己を寵愛し、淫佚度を失して民心離散し、諸侯亦叛を謀るものあり。武

王民心の赴く所を察し、兵を擧げて紂王を伐たんと太公望を總軍師に任じ、節刀を賜うた。時に紂王の軍約百萬あり、之に對し太公望は僅かに三萬六千五百人を以て足れりとなした。これ三百六十五日の數に測りて敵を敗るの法なりと。而して彼は

一、東軍は將軍存道に兵七千三百人を授け、鐵の鎧を著し、青袍を附け、方戟を持たしめ、
二、南軍は將軍繼先に兵七千三百人を授け、銅の鎧を著し、紅袍を附け、剛刀を持たしめ、
三、北軍は將軍子開に兵七千三百人を授け、銀の鎧を著し、白袍を附け、蛇矛を持たしめ、
四、西軍は將軍英美に兵七千三百人を授け、鐵の兜を着し、黑袍を附け、鐵鞭を持たしめ、
五、中軍は將軍守正に兵七千三百人を授け、金の兜を著し、黃袍を附け、鉞斧を持たしめた。

太公望は綸巾を著し、羽扇を持つて控へ、然る後、重さ八十斤の鐵の鎧、百二十斤の剛刀及び丈高き駿馬を引き出し、全軍に向かひ、此の鎧を著け刀を振り廻はして、此の馬に乘り得るものを先鋒たらしめんと號令した。そこで試驗の結果六人を得、辛甲を先鋒の大將に南宮括を副將に、叔度を右翼の將に、祁宏を左翼の將に、閎夭を近衛司令に任じ、堂々西安附近より東征の途に上つた。

潼關の險に到るや、門閉ぢて入る能はず、太公望謀を以て守將殷郊を降し、更に之を先鋒として進み、一の河に達す。河の前岸には敵あり、嚴重に構へて渡る能はず、先鋒の將還り來りて計を問ふ。太公望曰く、山に遇うては路を開き、水に會うては橋を架し船を用意するは先鋒の任なり、その任を盡くさざるものは首を刎ねんと責め返したが、又徒らに兵を損ぜんことを惧れ謀を授けた。

それは、ひそかに五百隻の船を河の上流に遣はして搦手の軍を渡河せしめ、主力は七百隻の船に乘せて河の下流に浮かべ、夜の來るを待ち、此の主力の各船には炬火を燃やし、鐘を鳴らし、喊の聲を揚げさせ、河を渡るが如く裝はしめて敵の注意をこの方面に集め、防禦の弩箭を發せしめんとするものであつた。

敵果して此の謀に乘り、炬火の船團に對し急ぎ一齊に發射したが、皆及ばずして河中に落ちた。その內敵は、上流の方から武王の軍が渡つたとの報に接し、是れこそ眞の渡河軍であらうと急ぎ其の方面に移つた。此の間に乘じ、武王軍の主力七百隻は無事に渡河し、敵を上下流の二方面より挾擊して大いにこれを破り、進んで洛陽に迫り伏兵を設けてこれを陷れ、その東方の孟津（鄭の西方）に到つた。時に諸侯の來り會するもの八百餘國、勢大いに振ふ。

太公望これを分かつて八陣となし、更に前進したが、忽ち狂風起り、砂を飛ばし石を走らせ、木を拔き塵を揚げて進む能はず、乃ち一時軍を居城に還して鋭を養つた。

殷の紂王これを聞き、武王軍を殲滅すべしと、兵五十萬を發した。武王は機先を制せんと再び東征の擧に出で、潼關、洛陽を經て孟津に迫つた。紂王の大軍河の前岸に在り、使を以て戰を決せんことを以てした。

太公望乃ち軍を二つに分かち、一部を河の上流に移し、主力をば河岸に進め、朝夕酒宴を開き、更に戰ふの意なき態を裝はしめた。紂王軍の將これを偵知し、これ太公望の擬兵の計にして、かくして我を欺き、我が兵の怠るを待つて襲ふものならん、豈この計に陷るべけんやと深更急に河を渡つて岸に上れば、意外々々、敵影一もなし、そこで更に敵主力の陣營に突入すれば、こゝも敵は既に遁れた後で一人も見えず、只杯盤佳肴、狼藉の有樣で飮酒堆く捨ててあつた。これは有難き珍酒嘉肴と將士皆酒食を貪り、醉のやうやく廻れる頃、一棒の鑼聲聞えて、西兵四面より殺到し來り、半醉半眠の殷軍を殆ど鏖殺にして、勝に乘じ、天未

だ明けざるに河を渡るや、對岸にある紂王軍は、我が味方の歸れるものならんと思ひ、警戒防禦もせざる所を縱横に蹂躙されて大敗潰走した。

　太公望令を下し、輕進すべからずと戒しめ、朝歌の都城に近く五個の城塞を設け、之を廣武塞、武德塞、武涉塞、修武塞、振武塞と名づけて陣容を固め、書を紂王に送りその罪を責めた。

　紂王大いに怒り、應彪を大將軍に新任し、精兵八十萬を以て武王を邀擊せしめた。彪は武王軍の五つの武塞を見て、之に對する如く五星の陣を張り、之を土星塞、火星塞、水星塞、木星塞、金星塞と名づけ、太公望に書を送り、次の日、牧野に於て勝負を決せんことを以てした。

牧野の戰

　これは有名な戰である。兩軍とも魚鱗の隊形を以て戰つたらしい。太公望は成るべく敵を降らしめんと、敵將彪に書を贈つたが無效であつた。そこで、太公望は彪に言つて曰く、我が五武の塞は五虎の山に據るの勢なり、我今これを以て汝が軍を破るべしと。羽扇を以て車上より五武の陣に令すれば、其の合圖の傳はると共に、五陣はサツト開いて又閉ぢ、忽ちのうちに敵將彪を取圍んでしまつた。彪大いに怒り、奮戰これつとめたが遂に捕はれた。そこで費仲なる者これに代り、紂軍を指揮したが、彼は素より戰慣れた將でなく、たゞ紂王より平素寵愛を蒙むれるに過ぎず、今已むを得ず馬を陣頭に進めたが、忽ち擊ち破られ、重傷を負うて朝歌の城内に遁入した。

　太公望急進の令を下して城中に攻め入らしむ。八十萬の敵兵皆紂王の殘虐を怨み、一人の出でて戰ふものなく、戈を倒にし、甲を棄て、唯遁れんとして擊たるる者數知れず、市民もまた武王軍の入城せるを見て大いに喜び、肉を捧げ酒を甕して相迎へ、相稿うた。

　紂王、事のこゝに至るを見るや、たうていその身の保ち難きを知り、火を放ちて宮室を焚き、自ら鹿臺と云ふ樓閣に登り、身に寶玉を着け、火中に投じて死んだ。かくして殷は遂に亡び、武王は國號を周と改め、都を陝西省の鎬（長安附近）に奠めて位に卽き、大いに論功行賞を行つた。

太公望は殊勳として重く賞せられ、齊王に封じられた。彼にもと妻あり、馬氏と云ふ。太公望の貧なる時自ら離別したが、今その榮譽の身となるを見るや、後悔して復縁を請うた。太公望卽ち盆に水を盛らせ、之を地に復してふたゝび盆に收めよと云ふに、妻卽ちその言の如くにしたが遂に成らず。太公望曰く、覆水重ねて盆に返らず、棄妻再び偶合すべからずと。妻はつひに恨を抱いて死んだ。以て太公望の人となりを知るべきで、實に鐵の如き意志を持つた男であつた。

春秋戰國時代

春秋戰國時代とは、約五百年も戰亂攻伐の續いた時代である。故に此の間、戰法と云ふものは各國に盛に研究されて、非常な發達進歩を遂げたものである。卽ち孫子、呉子、管仲、樂毅等々、實に世界的の兵法家であり、名將である。世界史を通じて、支那のこの春秋戰國時代ほど、痛快な、興味深い戰、そして又政治的な戰は他に見ることは出來ない。西洋の戰は何となく殘忍で無味であるが、支那の戰はまるで芝居でも見るやうな、そこに言ひ知れぬ味と深みとをもつてゐる。次にその主なるものを紹介しよう。

宋襄の仁の戰

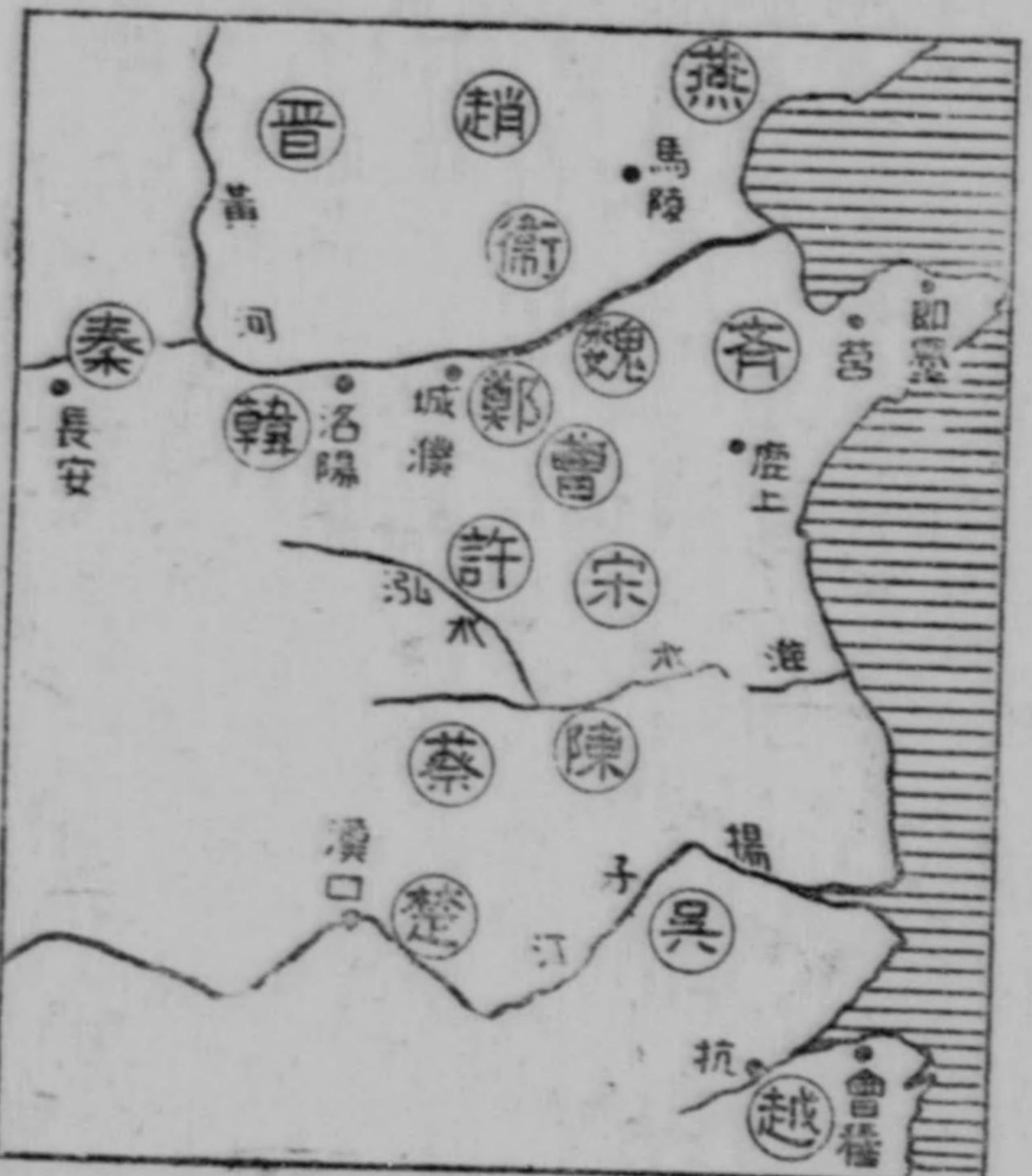
此の宋襄の仁と云ふことは、戰爭から出た笑話で、時は神武紀元二十三年、西紀前六三八年のことである。

周の天下にひゞが入つて、其の威權が行はれぬと見るや、野心を抱く諸國の大名は、己これに代つて天下の覇者たらんと雨後の筍の如く諸方に競ひ起り、恰も我が足利の末葉、戰國時代の如き狀勢を出現したのであつた。

その一人宋襄公は國も小さく、兵力も澤山持つてゐないのに、少しばかりの戰功あるを鼻にかけ、己天下の覇權を握り、天下に號令せんものと、諸侯に廻文を送り、山東省の南にある鹿上と云ふ所に會するやうにと、半ば命令的に之を促がした。

こゝに於て强大な楚國は大いに怒り、また鄭國なども頗る不平であつた。そこで楚國では

此の會盟を逆用して宋を亡ぼさんと謀り、陽に之を快諾し、ひそかに兵五千を一將に授けて鹿上に至る途に伏せ、宋襄公の到るを待ち、これを捕へんとした。實に恐しき詐謀である。宋襄公はかゝることがあらうとはつゆ知らず、大いに威儀を整へ、鹿上の會場に向かひ意



春秋戰國時代圖

氣揚々として出立したが、途中突然楚軍に捕へられ、全く囚人同様の有様となつて會場に引き出され、散々辱しめをうけた。かくて會議の結果は楚王を盟主と仰ぐこととなり、宋公は特に宥されて歸國することとなつた。

その後、宋襄公はこの恨忘れ難く、折もあらばその恥を雪がんものと時機の至るを待ち、遂に重臣の諫言をも聽かず、一萬の兵を將軍公孫固に授けて先鋒となし襄公自ら兵五萬を率ゐ、先づ西隣の小國鄭を屠り、更に西南の楚國を討たんと軍を進めた。鄭は驚き、救を楚に求めた。楚の成王直にこれを諾し、大軍を以て進發し、宋の軍と泓水を挾んで相對峙した。

宋軍の參謀目夷曰く『楚軍の數は多く我は寡し、故に楚軍の半ば河を渡るの機に乘じ逆襲せば、必勝確實なり』と。襄公曰く、『君子、人を厄に苦しめずと。楚軍の河を渡り、我が岸に上りて列を成すを待ち、堂々と雌雄を決せん。詐りの計を用ひて勝を得るとも、いづくんぞ名譽にあらんや云々』と。

かくするうち、楚軍は續々渡河し、逐次岸に上つて、劍戟旌旗漸く整へられんとした。この時參謀又曰く『楚兵渡河して岸に上れるも隊伍未だ整はず、此の機に乘じ速かに一鼓して攻むれば必勝疑なし』と。襄公なほ之を聽かずして曰く、『君子兵を行るに、敵の隊勢未だ整はざるに鼓打たずと。何んぞ詐の計を以て勝つことをなさんや』と。その言未だ終らざるに、楚の一將鬪勃、紅袍の上に金の鎧を著し、手に雙叉の尖戟を舞はし、手兵を提げて突進し

來る。宋軍乃ち立つて之と戰ふこと數合、楚軍佯り退き、再び泓水を渡つて走る。宋軍勝に乘じてこれを追擊し、泓水に馬を打ち入れて濟らんとした。楚將鬭勃、思ふ程に敵を引き寄せて時分はよしと馬首を廻らし、弩弓手を河岸に列ねて亂箭を發すること雨の如し。宋兵箭に中つて死する者多く、岸に登ること能はず。兵を施さんとする處に、圖らずも後方より楚軍の一隊喊聲を發して襲擊し來り、爲に宋軍は前岸、後岸の兩方より挾擊され、進退するに路なく、互に箭を避けんと押合ひ、踏み倒し、溺死する者十中の八九に及び、宋襄公亦一矢を受けて左の股を傷け、馬より落ちた。僅に身を以て逃れ、歸國することが出來たが、間もなく重傷の爲に卒した。世にこれを「宋襄の仁」と稱して嘲笑した。つまり彼は餘りに君子の虛名に捉はれ、遂に兵法の要諦を失して討つべきに討たず、却つて敵の謀に陷り、其の戰機を誤つて敗滅したものである。

三舍を避くの戰

此の戰は城濮の戰とて、晉と楚との間に行はれ楚の大敗に歸した大戰であつて、時は神武紀元二十九年、西紀前六三二年頃である。

晉の文公雄志あり、天下に覇たらんと四隣を征す。晉は今の山西省であるが、黃河を越えて其の南方の曹（開封の東南）を攻めんとした。

曹國にては鐵鎖を河中に張つて敵船を防ぎ、河岸に强弩を連ねて守勢を取つた。之に對して晉軍は、

一、大船八百艘を造り、各舳に大炬火五個を附し、それに油を注ぎ、一炬火每に、鐵甲を著けたる五人の勇士に長槍を持たして監視せしめ、

一、五千人より成る一軍を上流に、同じく五千人より成る軍を下流に出し、其の方面より迂回前進せしめ、

然る後、前方の大船八百隻に主力の精銳を載せ、敵鐵鎖に向かひ突進し、準備した大炬火に火を點じた。火焰炎々と發し、その高熱のため鐵鎖忽ち鎔解して、大軍は容易に渡河することが出來た。此の時、曹軍の將は、鐵鎖必ず敵船を防ぎ得べしと信じ、帳中にあつて酒を飲み酣醉してゐたので、忽ち敗れて四散した。晉軍進んで曹の都を陷れ、更にその附近を攻略

して勢甚だ盛となつた。

當時楚（湖北）は、その强を以て宋（河南）の王城を攻圍中であつたが、宋は救を晋に求めたので晋はこれに應じ兵を率ゐて南下した。楚軍また之を聞き、宋城の圍を解いて晋軍に向かつた。

晋文公は少時、楚の恩誼を受けた時、將來もしも晋楚戰場に見えることあらば、我は三舍を避けて此の恩に報いんと口約したことがある。今楚兵迫る、この約違ふべからずと、先鋒の兵に命じ三舍を退いて陣を布いた。一舍は三十里（一里は我が六町）であるから、三舍九十里、卽ち我が約十五里を退却して城濮の地に陣したのである。

楚軍は晋軍の此の退却を以て怯なりとし、追擊した。晋軍も決戰を期し、次の如く部署を定めた。

一、一隊を前方に出して先づ戰ひ、詐り敗れて敵を深く我が方に誘致する。

一、約一萬の騎兵を城濮の北方に埋伏し、悉く虎の皮を以て馬身を蓋ひ、有華山上からする相圖によつて逆襲に轉ずる。

一、主力は有華山附近に潛伏し、好機に乘じ出擊する。

一、秦からの援軍は、西方から迂回して楚軍の左側面を突き、齊からの援軍は東方から迂回して楚軍の退路に迫る。

一、晋文公は司令部を有華山上に置きて全軍を指揮す。

凡そ以上のやうな計畫であつた。これに對し楚軍は同盟の陳、蔡軍を右翼とし、本國兵を左翼とし、敵を輕侮して前進した。晋軍は前記計畫の如く、先づ戰つて詐り退き、楚軍が勢に乘じて追擊し來るに對し、虎皮騎兵を以て大逆襲を行つた。晋軍の騎馬は此の虎の皮の敵騎を見て怖れ、鞭打てども進まず、後に奔逸した。此の時、山上からの相圖により、山麓に伏せある晋の精銳は猛然と立ち上つて攻勢に轉じ、先づ楚軍の弱點たる右翼の陳蔡軍を粉碎し、然る後その左翼を擊破してこれを潰滅せしめた。

三十萬と云はれた楚軍は殆ど城濮の野に斃れ、殘兵僅かに步兵三萬、騎兵四萬は漸く戰場を脫して退却したところ、今度は西方からは秦軍のために、東方からは齊軍のために橫擊せられて殆ど殲滅せられてしまつた。

以上は有名な城濮の血戰で、この內には世に云ふ「三舍を避く」の出所もあり、虎皮騎兵、火船渡河法等の興味を惹く戰がある。

會稽の恥、臥薪嘗膽

これは吳越戰爭の間に起つた有名な故事である。此の抗爭は孔子の時代であつて、吳は今の上海の西の蘇州、越は杭州附近と見ればよい。

兩雄並び立たずで、吳王闔廬と、越王勾踐は互に乘ずべき機を覘つた。吳軍はなか〱の精銳であるが、越王勾踐は參謀范蠡の献策に基づき、或は禽獸を携へて敵軍中に放ちやり、或は囚人隊を以て敵軍を驚かし、敵の動搖するに乘じ伏兵を發して吳軍を苦しめ、遂に吳王闔廬を倒し、多大の戰果を收めて意氣揚々凱旋した。

吳王の子夫差、父王の恨を報ぜんと、群臣に命じて『夫差、汝、越王、父を殺すの仇を忘れたるか』と朝夕呼ばしめた。吳王はこれに對し『何ぞ忘れん』と云ひ不斷復讐の念を持することに力めた。

かくして吳の國力は父王時代より强大となつたので、十五萬の復仇軍を起した。越王勾踐また豎子何をするかと、二十萬の軍を出して兩軍相對峙したが、越軍戰利あらずして、會稽山（杭州の東南）に走り、吳軍之を重圍して水道を斷つた。渴して死するもの頗る多く、勾踐窮して降り、夫妻共に吳王の奴婢となつて石室に宿し、垢面徒跣して苦役に服した。後宥されて越に歸るや、專心報復の念に燃え、苦き膽を窓戶の上にかけ、坐臥出入には必ず之を仰ぎ、飲食にも必ずこれを嘗め、自ら責めて云ふ『越王勾踐、汝會稽の恥を忘れたるか』と。

其の後二十餘年にして、越の兵力極めて强大となつた。そこで勾踐は復仇の軍を吳に向かつて進めた。彼は軍を分かつて左右の二とし、石矢を作り絃を張り、勾踐自ら六千の精銳を提げて左翼後に立ち、暗夜に乘じ鼓譟して吳の中軍を突き、別に水軍を以て火を放つ。折からの烈風に火は吳船を燒いて殆ど之を全滅せしめた。

吳王夫差時に美妃西施と共に樓閣に置酒放樂し、敗報に接して大いに驚き、書を以て越に降を請うた。勾踐は之を助けんとしたが、參謀范蠡之を不可なりとして宥さず。夫差遂に身を以て遁れ走り、食はざること三日、自刎して死んだ。

斯くて、一度勝ちて志を得た吳王夫差は、意滿ちて國を亡ぼし、越王勾踐もまた臥薪嘗膽會稽の恥を雪いだが、その後の治政宜しきを得ず、久しからずして吳の轍を履むのであつた。

減竈の計

魏（山西省東南部）、韓（河南省中部）を伐ち、韓救を齊（山東省）に求む。齊王乃ち孫臏を將とし、兵二十萬を以て魏を擊たしむ。魏また龐涓を將とし、同じく兵二十萬を以てこれに對した。

由來魏兵は强悍にして、齊兵は柔弱である。こゝに於て戰法に熟せる孫臏は、此の自軍の柔弱性を利用して敵を誘致し、以て勝を制せんと、減竈の謀を用ひたのである。

魏の使者韓隨、齊の軍營に至り臏孫に會して媾和を說く。その意は齊軍の内情を偵知せんとするにあつた。敏慧なる孫臏早くも之を知り、わざと十萬の竈を作り、糧秣の代りに砂嚢を積み重ねて置いた。眼敏き韓隨、之を察知し、歸りて龐涓にこの事を告げた。龐涓は齊軍の兵糧漸く缺乏したものと判斷し、之が對策を講じた。

一方齊の孫臏は、その夜十萬の竈の附近に砂嚢を散亂して退却すること五十里、魏の龐涓之を聞いて追擊し、その砂嚢や竈の有樣を見てます／＼敵が糧食に窮したものと信じて急追した。

翌日に至るや孫臏は、減じて五萬の竈を作り、翌々日は三萬の竈に減ずるといふ風に、逐次にそれを減じつゝ退却し、龐涓その後を追ひながら、竈の數の遞減するは齊軍の逃亡者相繼ぐものと斷じて大いに喜び、我二三日を出でずして、敵を全滅し得べしといよ／＼敵を急追した。

孫臏は地圖を按じて馬陵の隘路を發見し、こゝにて敵軍を全滅せしめんと、射を善くする弩兵一萬を隘路の兩側に伏せ、火光を見たらば發射すべしと命じ、且つ木を切り倒して隘路を塞がしめ、其の木を削つて「龐涓死此樹下」と云ふ六字を大書し置き、そして孫臏は人目を惹くやうに、わざと馬車に乘り、殿軍の最後にあつて退いた。

龐涓の軍、追うて馬陵の隘路口に至つた。時已に日暮れ、隘路又伏兵の惧れあるを以て姑く止つて明朝を待たんとしたが、試みに路傍の百姓に、齊兵こゝを去る幾里ぞと問へば、百

支那上古の戰鬪圖
上段は野戰、中段は橋上戰、下段は水戰をあらはしてゐる。戰車に乘つてゐるのが大將である。

姓曰く、前軍は朝來續々として去り、獨り孫臏の車、後軍に在り、少しく前にこゝを過ぎ去れりと。龐涓これを聞き、急追して孫臏を生け捕るべしと、俄かに軍の急進を促がした。先鋒來り報ずるに、前面に大樹倒れて道を塞ぎ通じ難し、且つ木に一行の文字あり、昏くして辨じ難しと、龐涓乃ち走り行き、松明を照らして之を見るや、心中大いに驚き、われ孫臏の謀に陷る、疾く軍を回せと言ひも終らざるに、兩側に伏せる一萬の敵弩一齊に發し、魏軍大いに亂れて龐涓はつひに自刎して亂軍の間に命を斷つた。死するに臨み曰く『豎子をして名を成さしめたり』と。

以上は支那史上のいはゆる減竈の戰法である。巧妙にして小說臭いが、支那の兵法家は推理力により、往々こ

の種の戰法を取つた。諸葛孔明の計には之に類するものが多い。

火牛の計

これは田單火牛の計として有名なものである。時は我が神武紀元三百四十七年、西紀前三百十四年でアレキサンダー大王死後九年頃のこと、隨分古い軍物語である。

今の山東省の齊の國と北京附近の燕の國とは仲が惡く、互に侵略を事とした。燕の將樂毅よく戰ひ、忽ち齊の七十餘城を陷れ、殘るはたゞ卽墨と莒の二城のみとなつた。齊の田單、將となつて墨城を守る。田單はなか〳〵頓才機智に富める人であつた。今その二三を擧げて見ると、

一、曾て敵に追はれて狹隘に差しかゝつた時、車の轍間が大きくして通過が出來ない。此の時田單は、直に其の車軸の端を削り切つて轍間を小にし、その狹路を通過して難を免れた。

一、卽墨の籠城中、市民に命じて食する每に庭前にて祖先を祭らしめた。ために供物が散

在するので、飛鳥群り集つた。田單乃ち、これ神鳥城を守るなりと稱し、一は以て市民の心を安んじ、一は以て敵の戰意を挫いた。

一、田單わざと流言を放ち、卽墨の市民の恐るゝ所は、燕軍が捕虜とせる我が齊兵の鼻を切ることであると言ひ觸らした。燕軍之を傳へ聞き、それではとわざ〳〵齊兵の捕虜の鼻を切つて城兵に示した。城兵之を見て怒り、城を死守して捕虜たることを避けた。

一、前と同じく、市民の悲しむ所は燕軍に祖先の墳墓を發掘される事であると宣傳して、燕軍にうま〳〵と墳墓冒瀆の惡業をはたらかせ、以て市民の情を激せしめた。

以上のやうなことをやつて、田單は市民並に守兵の士氣を勵ましてゐた。しかし、燕に名將樂毅ある間は、流石の田單も策の施しやうがなかつた。然るに樂毅は王と仲違ひして他に去り、平凡な將軍がこれに代つたので、田單は最後の一計を案じて出擊を策した。

乃ち牛千頭、油一千斤、乾きたる蘆茅一千把を地中に準備し、而して牛の角には鎗を縛り前足には刀をからみ、尾には蘆茅を卷きて油を注ぎ、その端に火をつけて放ちやると云ふ計畫である。その上、牛には赤き絹の衣を着せ、五彩の龍文を描いた。見るからに恐しい風態である。

城壁には百箇の穴を開き、一個所に牛十匹宛を備へ置き、田單は城樓に上り、我等すでに疲弊に堪えず、日を擇みて降るべしと寄手の軍に叫びかけて、砲石の拋下を止めしめた。燕兵之を聞いて、此の城の降服近きにありと、心を安んじて陣屋に歸り休息した。

夜已に半ばならんとする頃、田單は備へ置きたる牛の尾に火をつけ、百個所の穴より千頭の牛を縱ちやり、その後に五千人の壯士閧をあげて追ひ進んだ。火既に牛の尾に燃えついて熱さに堪えず、牛は怒つて、猛然行手を遮るものを蹂躙して燕の陣に突入した。半ば眠つてゐた燕軍大いに驚き見れば、牛尾の炬火は炎々と輝き、五彩の龍文は悽愴なる光景を呈した。狂へる猛牛は一擧に陣を突破し、それに觸れる者は悉く死傷し、悲慘の狀眼を蔽はしめた。牛後に從ふ五千人の壯士はその背後より燕軍を追擊し、又城中よりも擊つて出で、老幼男女皆金を鳴らし、銅鑼を敲き、鼓を打つてその聲天地を震動するばかりであつた。燕軍潰亂何等抵抗するを得ず、大將は捕へられて殺され、敗殘の軍は潰走した。田單は之を進擊して、先に奪はれた齊の七十餘城を奪還し、大いに威名を轟かしたのであつた。

孫呉の兵法

孫呉の兵法と云へば有名なもので、誰知らぬ者はないくらゐだ。或人の如きは、獨り兵法のみならず、政治上の哲理、人生處世上の教訓をも含み、修養書として尊重すべきを力說してゐる程である。實に又この二人はよい事を言つてゐるのだ。今一々彼等の作戰の蹟を述べるの餘裕がないから、單にその眼目のみを紹介する。まづ孫子より始めよう。

孫子は孫武と稱し、齊の人である。彼の兵法の要諦ともいふべきものは、嚴格なる軍紀を主張したことである。軍に軍紀なければ所謂烏合の衆で、一文の値打もないといふのだ。恐らく孫子は嚴格そのもののやうな人物であつたらう。一體名將と云はれるほどの人は、皆軍紀をやかましく言つたもので、孔明なども、涙を揮つて軍律を犯した部將の馬謖を斬つた話は有名である。

昔、呉の國と楚國とは仲がわるい。楚は强大で呉はそれに及ばない。そこで呉王は名將を得て國威を張らんと、孫子を山中に得、厚く聘して師事した。周の文王の太公望に於ける、蜀の玄德の孔明に於ける皆この類である。

呉王との談、兵法に及び、孫子は、兵法は獨り卒伍にのみ施すのみならず、深閨の女子に對しても行ひ得ると。呉王曰く、それは難しからう、一つ試みよといふことになり、王は百八十人の官女を呼び出し、孫子をして十日間操練せしめた。

孫子は王の最も寵愛する所の夏氏及び姜氏の二妃を得、女軍を分かつて二となし、夏氏を左軍、姜氏を右軍の長たらしめ、戈と鉾を取つて操練を始めた。隊を亂すべからず、騷ぐこと勿れ、約を守るべし等の令を傳へて嚴守を誓はしめ、更に一たび鼓を打てば側面縱隊を作れ、二度鼓を打てば横隊を作れ、三度鼓を打てば前進、四鼓すれば停止、五鼓すれば退却といふ風に一と通りの訓練が出來たので、孫子は王にこれを觀ていたゞきたいと請うた。

呉王は文武百官を從へ、高臺に上り、此の女軍の操練を見た。孫子出でて王に禮し、鼓吏をして鼓を打たしむ。女官等、これに從はず、各ゝ口を掩うて笑を含む。孫子怒つてわれ嘗て戒しめおきたるに、何故令に反するかと。ふたゝび鼓を打たしむ。女官等、ます〳〵笑を含み、つひに一同吹き出すに至つた。此の時、觀覽者も大方は笑を抑へかねたことであつた

らう。

孫子大いに怒り、軍令整はずして嚴ならざるは將の罪なり、然るに軍令整うて至嚴なり、而も之を行はざるは長の罪なりと。その長である夏氏及び姜氏の首を斬らんとした。二妃は聲をあげて哀求する。吳王、臺上にあつて之を見、驚いて曰く『此の二女は我が寵愛の妃なり、望むらくはこれを許せ』と。孫子肯ぜずして曰く、『臣旣に命を受けて將となる。將、戰場に在つては君命をも聽かざる所あり』と、遂に刀を揮うて二妃を斬つた。

滿場肅然、女軍驚怖して色を失ふ。孫子再び立つて鼓を打たしめた。二隊の女軍、進止、開閉、すべて令の如く毫髪も違はず。孫子大いに喜び、これにて可なりと。王に奏するに、軍紀の嚴は此の如く、女人をもなほ軍たらしめ得と。吳王は寵妃の死を悲しみ、しばらくは語も無かつたが、孫子の言に悟る所あり、彼を上將軍となして內外の諸軍事を督せしめ、四隣を征服して大いに國威を輝かした。

今孫子の兵法の內で、普通に引用されてゐる名句の若干を擧げて見る。之により彼の將才を想察することが出來るであらう。

兵は拙速を尙ぶ、巧遲は之をとらず。

兵は卽戰卽勝を尙び、久しきを尙ばず。

凡そ兵を用ふるの法、國を全ふするを上となし、敵を破るは之に次ぐ。

敵を殺戮して勝たんよりは、敵を降伏せしむるを上となす。

百戰百勝は善の善なるものにあらず、戰はずして敵の兵を屈す、善の善なるものなり。

最善の戰は敵の謀を伐つ、次は敵の兵を伐つ。

要塞を攻むるは已むを得ずして爲す下策なり。

善く兵を用ふる者は、人の兵を屈すれども、戰ふにあらざるなり。人の城を拔けども、攻むるにあらざるなり。

兵を用ふるの法、我敵に十倍すれば之を包圍し、五倍なれば敵を攻擊し、二倍なれば之を分かつて敵を挾擊し、彼我等しければ全力を以て戰ひ、兵力劣れば敵を巧みに避くべきなり。

戰勝の道五あり、戰ふべき時機、兵力の多寡、上下の一致、周到なる作戰、命令權の確實。

彼を知り己を知れば百戰して殆からず、彼を知らずして己を知れば一勝一敗し、彼を知らず己を知らざれば百戰百敗す。

善く戰ふ者は先づ勝つべからざるを爲して以て敵の勝つべきを待つ。

勝つ可からざるは己に在り、勝つべきは敵にあり。勝つことは知るべくして爲すべからず。

勝つ可からざる者は守るなり、勝つ可き者は攻むるなり。守るは則ち足らざればなり、攻むるは則ち餘り有ればなり。

善く守る者は九地の下に藏れ、善く攻むる者は九天の上に動く、故に能く自ら保ちて全く勝つなり。

善く戰ふものは勝ち易きに勝つ者なり、故に善く戰ふ者は智者もなく勇功もなし。

勝つ者の戰ふこと積水を千仭の谿に決するが如き形なり。

三軍の衆必ず敵を受けて敗るゝこと無からしむ可きは奇正是れなり。兵の加はる所、石を以て卵に投ずるが如きは虚實是れなり。

凡そ戰は正を以て合ひ奇を以て勝つ、故に善く奇を出す者は窮りなきこと天地の如く、竭きざること江河の如し、終りて復た始るは日月是れなり、死して復た生ずるは四時是れなり。

亂は治に生じ、法は勇に生じ、弱は强に生ず。治亂は數なり、勇怯は勢なり、强弱は形なり。

善く戰ふ者は人を致して人に致されず。

攻めて必ず取るは其の守らざる所を攻むればなり、守りて必ず固きは其の攻めざる所を守ればなり。

善く攻むる者は敵其の守る所を知らず、善く守る者は敵其の攻むる所を知らず。

備へざる所なければ則ち寡からざるなし。

疾きこと風の如く、徐かなること林の如く、侵掠すること火の如く、動かざること山の如く、知り難きこと陰の如く、動くこと雷霆の如し。

朝氣は鋭く、晝氣は惰り、暮氣は歸る、故に善く兵を用ふる者は其の鋭氣を避け、其の惰歸を擊つ、此れ氣を治むる者なり。

治を以て亂を待ち、靜を以て譁を待つ、此れ心を治むる者なり。

近を以て遠を待ち、佚を以て勞を待ち、飽を以て饑を待つ、此れ力を治むる者なり。

正々の旗を邀ふる勿れ、堂々の陣を擊つ勿れ、此れ變を治むる者なり。

高陵に向かふ勿れ、丘を背にせるは逆ふ勿れ、佯り背ぐるをば從ふ勿れ、銳卒をば攻むる勿れ、餌兵をば食ふ勿れ、歸る師をば遏むる勿れ。

圍む師は必ず闕く、窮寇は迫る勿れ、此れ兵を用ふるの法なり。

軍には擊たざる所あり、城には攻めざる所あり、地には爭はざる所あり、君命をも受けさる所あり。

兵を用ふるの法は敵の來らざるを恃むなく、吾の以て待つあるを恃むなり。

敵河を渡りて來らば之を水內に迎ふ勿れ、半ば渡らしめて之を擊てば利あり。

鳥集るは虛なるなり、夜呼ばはるは恐るゝなり。

軍擾るは將重からざるなり、旌旗動くは亂るゝなり、吏怒るは倦みたるなり。

諄々言ふは衆を失へるなり、數々賞するは窘せるなり、數々罰するは困せるなり。

彼を知り己を知れば、勝、乃ち殆からず、天を知り地を知れば、勝、乃ち全かるべし。

圍地には則ち謀れ、死地には則ち戰へ。

始めは處女の如く、敵人戸を開く、後は脫兎の如く敵拒くに及ばず。

次は吳子である。吳子とは吳起のことで、彼は衞の人（開封の北、大名附近）、少時人を斬殺して逃亡し、魯に仕へ魏に走り、後楚に至り宰相、大將となつたが、將略政才あるためか、到る處同輩に嫉まれ、悲慘なる最期を遂げた。彼は孫子と同じくなか〳〵よいことを言つてゐる。彼の主眼とする所は、民と親しむことであつた。軍旅にありては常に兵士と苦樂を共にし、兵の傷の化膿して苦しむを見るや、自らの口をもつてその膿を吸ひ出したと云ふ話は有名である。これは彼の眞情であつたらう。兵法に關し彼の言つた主なるものを述べて見る。

國家を圖る者は必ず先づ百姓を敎へて萬民を親しむ。

國利せざれば以て軍を出すべからず、軍和せざれば以て出でて陣すべからず、陣和せざれば以て進みて戰ふべからず、戰和せざれば以て勝を決すべからず、是れ四の不和なり、故に有道の士は先づ和して而して後に大事を爲す。

軍を治むるには必ず之に敎ふるに禮を以てし、之を勵ますに義を以てし、恥有らしむるなり、恥有るときは大にありては以て戰ふに足り、小にありては以て守るに足る。故に曰く五たび勝つ者は禍なり、四たび勝つ者は弊ゆ、三たび勝つ者は覇たり、二たび勝つ者は王たり、一たび勝つ者は帝たり、是を以て屢々勝ちて天下を得る者は稀に、以て亡ぶ者は衆し。

兵の起るところの者は五つあり、一に曰く名を爭ふ、二に曰く利を爭ふ、三に曰く惡を積む、四に曰く内亂る、五に曰く饑に因る。

兵の名また五つあり、一に曰く義兵、二に曰く强兵、三に曰く剛兵、四に曰く暴兵、五に曰く逆兵、此の五を服するに道あり、義は必ず禮を以て服す、强は必ず謙を以て服す、剛は必ず辭を以て服す、暴は必ず詐を以て服す、逆は必ず權を以て服す。

道遠く日暮れ、士卒疲れ懼れ、倦みて未だ食はず、甲を解きて息へる敵は之を擊つべし、必ず勝つ。

陣してまだ定まらず、宿舍を定めて未だ完了せず、阪を行き嶮を涉り、半ば隱れ半ば出づる敵は之を擊つべし、必ず勝つ。

用兵の法、須らく敵の虛實を審かにし、而して其の危き間隙に赴くべし。

水を涉りて半ば渡れるを擊つべし、旌旗亂れ動くをば擊つべし。

進めば重賞あり、退けば重刑あり、之を行ふに信を以てす、是れ二重、一信なり、之に達する者は勝を制す。

兵戰の場は屍を止むるの地なり、死を必とすれば則ち生き、生を幸とすれば則ち死す。

善く將たる者は漏船の中に座し、燒原の下に、伏す如し、常に決死の心あり、此の心あれば智者もそれを謀るを得ず、勇者もそれを屈するを得ず。

用兵の害は猶豫最も大なり、三軍の災は狐疑より生ず。

文武を總ぶるは軍の將なり、剛柔を兼ぬるは兵のことなり。

門を出づれば皆敵と見るべし。

師出づるの日、死するの榮あり、生くるの辱なし。

戰の要は必ず先づ其の將を占うて其の才を察し、其の形によりて其の權を用ふれば則ち勞

せずして功擧る。

支那古代の名將孫・吳二氏の兵略的才能は凡そ以上の辭句により推知することが出來る。彼等は徒に口舌の雄にあらず、實際到る所に戰勝を占めた。故に敵は皆彼等の陣營に在ると否とを聞いて或は恐れ或は喜んだくらゐであつた。

漢楚三國時代

漢楚軍談といふ戰爭本があり、なか〳〵面白く出來てゐて、吳越軍談、三國志と共に、支那の戰爭を研究するにはぜひ一讀再誦せねばならぬ本とされてゐるくらゐである。

垓下の戰

何かの俗謠に次のやうなのがある。

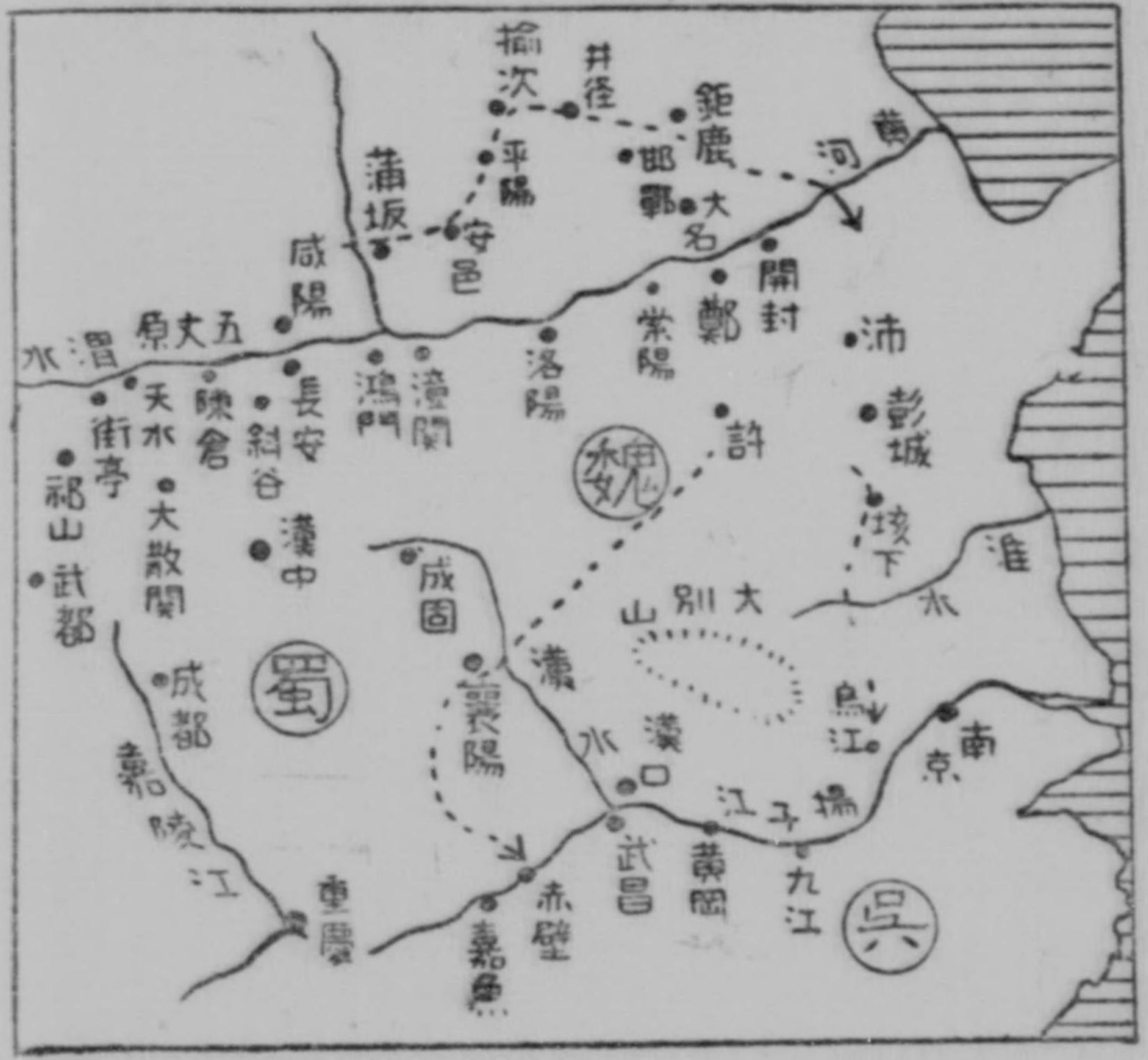
風がもて來る二階の端唄
燭暗數行虞氏涙
夜深四面楚歌聲
思ひある身の胸に釘

この唄の中にある詩は、楚の項王が垓下の戰で漢の高祖（其の時は劉邦）に圍まれた、その時の彼の心情をうたつた哀詩である。今その垓下の戰について述べよう。

この戰は前にも述べた通り、漢の高祖と楚の項羽との戰で、項羽が負けて遂に亡んでしまつたので有名である。そしてこの垓下といふ所はどの邊かと云へば、前年我が軍が戰つた有名な徐州戰の、その徐州の南寄り附近と合點すればよい。徐州は昔、彭城と唱へて項羽の都であつた。

項羽は非凡の青年英雄で、容貌魁偉、身長八尺二寸もあり、力は五十人力と云ふ恐しい豪傑で、戰爭も上手、家柄もよかつたので人望があり、それで彼は時の天下である秦の國を討ち滅ぼさんと、南の方から前進して徐州乃ち彭城附近にまでやつて來た。

ところがちやうどその頃、彼と同じく、秦を討たんとして兵を起したのが劉邦であつた。



漢楚三國時代圖

この劉邦、卽ち後の漢の高祖は、徐州の北方沛と云ふ所に生まれ、豪傑肌の項羽とは反對に鼻の高い優形の美男子で左の股に七十二のホクロがあつたと云ふ妙な男、若い時から酒と女が大好きで、料理屋の亭主などをして亡國的な流行歌などを唄つてゐた不良青年であつた。當時誰からも相手にされなかつた所が、呂文と云ふ男は劉邦を一目見て、これは將來帝王になる高貴の相だとびつくりし、自分の娘のいやがるのを無理に勸めて劉邦と夫婦にさせてしまつた。この嫁が後の有名な呂后である。

さういふ風な劉邦だから、遂に人にかつがれて一隊の長となり、だん／＼人氣が出て來て立派な大將株となり、秦の國である今の陝西省に討ち入り、秦の都咸陽を陥れてしまつた。

一方、項羽は徐州から北の方に進み、秦の大將章邯の大軍を河北省の鉅鹿に破つたが、噂に、劉邦は既に秦の都を陥れたと聞いて大いに怒り、彼奴を倒さんと四十萬の大軍を率ゐて急行西進し、西安の東に當る鴻門と云ふ所に至つて劉邦を呼びつけた。なか／＼偉い權幕である。

鴻門の會

時に劉邦の軍は約十萬で、とても項羽に敵し難いと見て彼は逃げ出さうとしたが、幕下の謀將張良の計により、一と先づ鴻門に到り、低頭平身して謝まり入り、陽に項羽を兄として尊敬しようと肚を極め、僅か二百人ばかりの手兵を提げて鴻門へと出かけて行つた。

項羽は何とか喧嘩を吹きかけて劉邦を殺さうと、いろ〳〵侮辱的難題を出してみても、劉邦は少しも怒らない。その內酒宴となり、宴中劍舞を演じ、その際に彼を殺害せんと壯士項莊といふ男に意を含めて立つて舞はしめた。

張良はこれを見てたゞ事ならずと驚き、同志の一人に目くばせし、同じく劍舞に事よせて劉邦の身を庇護せしめ、それと同時に急ぎ樊噲と云ふ豪傑を招いて此の危急を救はせた。

門外に待ち構へてゐた樊噲は鐵の楯を小脇に抱へ、物干竿のやうな大劍を腰にたばさみ、凄い形相で幕中に闖入し來り、四方を睥睨した。一座はみな驚いた。項羽は、是れ快男子なり、酒を與へんと、一升入りの盃を出した。樊噲は立て續けに五六杯も飲んで一向平氣である。流石の豪傑項羽も度膽を拔かれた形であつた。

この間に劉邦は厠に行くと見せかけ、そつと厠の窓から裏山へと逃げてしまつた。彼を殺し損ねた項羽は、地團太を踏んで口惜しがつたが、遂に及ばなかつた。以上は有名な鴻門の會のあらましである。

それから項羽は、大軍を驅つて秦の都咸陽に入り、例の有名な阿房宮を燒き劉邦の妃や王子を擒にし、大亂暴を極めて自分の根據地彭城（徐州）に凱旋し、自ら王と稱した。時に北方山東省に叛亂が起り、項羽は之が征伐に出動した。此の留守に劉邦が襲擊し來つて、彭城を占領してしまつた。

項羽は北方に在つて之を聞き、烈火の如くに怒り、直に南下して劉邦の軍と睢水の邊に戰ひ、大いに之を破り、その四十萬を粉碎し、二十萬を河に陷れて溺死せしめた。爲に睢水の流が一時止まつたとさへ云はれた。此の戰に劉邦の命運は盡きたかと思はれたが、たま〳〵大風起り、天地晦冥となり、彼は幸にも此の間に身を以て遁れることが出來た。しかし、それで彭城は再び項羽の手に歸したのである。

項羽は勝に乘じ、劉邦に止めを刺さんとこれを追擊して、今の鄭州附近の滎陽といふ所に至り、再び劉邦の軍を擊破粉碎した。劉邦は又もや命から〴〵北方に逃げ去り、その方面にある韓信に賴つた。そして彼は四方に檄を飛ばして項羽の罪を數へ、反間苦肉の策を以て項羽の君臣間を離間するに努めた。これが功を奏して四方に反項羽軍が起り、北からは韓信、南からは黥布、西からは彭越と云ふ風に、各軍を率ゐて項羽の根據地彭城に向かつて進擊し

た。形勢の惡化に、流石傲岸の項羽も大勢如何とも爲しがたく、恨を呑んで劉邦と和し、天下を二分し、項羽は東部を、劉邦は西部を取ることにしてこゝに戰は一時落着した。

それで項羽は兵を收めて彭城へ歸らうとしたが、劉邦は張良の計に從ひ、約を破つて項羽を追擊した。この時劉邦の兵力は、諸方の軍を合はせ約五十萬と稱せられ、この內三十萬は韓信の軍である。項羽は一旦和を結んだので氣をゆるし、垓下まで退いた所を圍まれてしまつたから、其の兵力は僅か十萬ばかりであつた。其のうち攻圍はだん／＼嚴しくなつて來た。

戰場では夜になると、無聊を慰むるため、思ひ／＼に兵士達は鄕土俗謠などを歌うて樂しむのが例であつた。項羽は愛妃虞美人と共に酒を飲んでゐると、或夜陣中から胡弓や銅鑼の音樂に混つて悲しい歌聲が聞えて來た。項羽はあんな悲しい唄は止めさせよと命じた。するとその歌は止むどころか、いよ／＼盛となつて來るので、項羽自ら立ち出でて見たところ、自分の陣中からではなく、四面を包圍してゐる敵陣から流れ來る楚歌の聲であつた。

こゝにおいて項羽は大いに驚き、敵は既に楚の全地を占領してしまつたのかと、楚國生まれの彼としては甚だ心細き感慨に打たれ悲嘆に沈むのであつた。傍にゐた虞美人は聲を勵ましてこれを慰め、諸將又頻りに彼の元氣をつけようと努めた。やがて項羽も漸く我に歸り、然らば一たび圍みを破つて故國の楚に歸り、再擧を圖らんと、しばし訣別の宴を張つた。

項羽は陣中常に虞美人を從へ、また騅といふ駿馬に乘つてゐた。今圍みを脫出するには虞と別れ、騅に乘つて突破せねばならぬ、虞と別れるのは身を切られる思で、心緒も亂れ勝ちであつたが、流石は一代の豪傑項羽である。斷然決するところあり、快く杯を引き、自ら一詩を作つて歌つた。

　力山を拔き氣世を蓋ふ
　時利あらず騅逝かず
　騅逝かず、奈何にすべき
　虞や虞や汝をいかにせん

これは垓下の歌と呼ばれる有名な詩である。項羽はこの詩を二度も三度も吟じた。虞美人また平素の幸愛に對へ、かねて項王を激勵せんと、自らも一詩を作り相和して歌つた。

　漢兵既に地を略し

四方楚歌の聲
大王意氣盡き
賤妾何ぞ生に安んぜん

項羽はこの歌により、虞美人がこゝで別れても、自分と死を倶にするの心意氣を見て思はず泣いた。戰に死んでも戀に生きた氣がした。果して虞氏は項羽の脫出後、敵兵の爲に捕へられて殺され、南京の北方定遠城附近の山奥に葬られた。誰が手向けたものか、毎年春になると、その墓畔に眞紅の芥子の花が咲く。それで芥子の花を一名虞美人草と呼ぶやうになつた。

さて宴を撤すると項羽は蹶然として起ち、駿馬騅に跨り、屈强の士八百餘騎を從へ、夜中敵の重圍を突破して南東に駈け出した。劉邦側では、長年の戰爭に豪强を誇つて來た項羽ともあらうものが、まさかそんなにあつけなく投げ出すとは思はなかつた。それで夜明け頃になつて始めてそれと知り、五千騎をして之を追はしめた。

項羽は圍みを破つてから淮河を渡つて南下した。敵の追擊はます〳〵急、爲に士卒漸く減じて剰すところ僅かに百餘名。孤軍慘として亡命の一路を辿つた。時には沼澤に迷ひ入り、或は逆襲に突進し、今や主從二十騎となつて楊子江蕪湖の北岸烏江に達した。項羽は此處まで二日間に約九十邦里を走つたのである。

時に烏江の渡し守は、船を整へ、渡河して再擧を圖りたまへと勸めたが、項羽は敗殘の身を以て故國に入るを恥とし、愛馬騅を船頭に與へ、追ひ來る敵に最後の打擊を加へて後、自ら首を刎ねて死んだ。これが拔山蓋世の英雄で、古今稀出の名將項羽の最期であつた。時に年齒なほ三十一。

斯くして楚の項羽亡び、天下は劉邦の掌中に歸し、彼は漢國を樹て、第一世の帝高祖と稱した。此の漢楚の戰は六、七年かゝり、時はちやうどカルタゴの英雄ハンニバルがザマの一戰でローマの大將スキピオに敗れた時と同年で、我が國では孝安天皇の御代であつた。

この戰において連戰連敗の劉邦は遂に最後の勝利を占め、連戰連勝の項羽は敗滅した。これは前章、孫吳の兵法のところで、吳子が「五たび勝つ者は禍なり、四たび勝つ者は弊ゆ、三たび勝つ者は覇たり、二たび勝つ者は王たり、一たび勝つ者は帝たり、是を以て屢ゝ勝ち

て天下を得る者は稀に、以て亡ぶ者衆し」と言つたのを載せておいたが、實に項羽はしばしば勝ちて亡び、劉邦は最後の一戰に勝ちて帝となつた。吳子の言蓋し妙といふべきである。

劉邦は戰術に敗れて戰略に勝ち、項羽は戰術に勝つて戰略に敗れた。二千年の昔劉邦の方に張良、韓信などの智謀の將がゐて、此の垓下における大包圍作戰を計畫指導したのは實に見上げたもので、さすがに支那は孫吳兵法の本場だけあると感心させられるのである。

此の垓下の包圍作戰と、今度の支那事變で日本軍の行つた徐州大包圍作戰と比較研究して見ると、二千年を隔てて而も戰略戰術の妙を知るに極めて津々たる興味を覺ゆるのである。その兵力は項羽は約十萬、漢軍約五十萬であり、今度の徐州戰における支那軍の兵力約四十萬、それに日本軍は北方からの寺內將軍の北支軍、南方からの畑將軍の中支軍の聯合であつたから相當の兵力であつたらう。よつて兵力は先づ伯仲の間にあつたと見て其の包圍作戰はどんなふうであつたかといふと、漢軍は四十萬を以て僅か十萬の項羽軍を包圍したが、項羽の威に恐れてか、たゞ〳〵遠卷の陣を張つてゐたやうである。楚歌を歌はしめたのは韓信の謀だといはれてゐるが、果して然らば彼は戰略の名手たると共に宣傳戰の達人でもある。項羽は此の宣傳の計に引つ懸かつてつひに沒落したやうなものだ。

日本軍の徐州包圍戰は實に雄大壯絕な作戰で、先づ徐州の東北臺兒莊方面に敵の主力を牽制し、其の機に乘じて徐州の西北、並に徐州の南方、西南方から電擊的攻擊を開始し、敵をして左顧右眄、應接の遑なからしめ、遂に指揮の統一を亂し潰亂に陷らしめたのであつて、漢軍の消極的包圍とは全然その趣を異にしたものである。されど漢軍の包圍そのものの構想、運用に就いては古き戰爭の一つの標本として研究の價値がある。

韓信背水の陣

漢の將韓信は劉邦の命により陝西省を出發して魏（山西省西南部にして平陽に都す）を征し、更に趙（河北省南部大名、邯鄲附近）を伐たんと蒲阪の上流より黃河を渡り、安邑にある魏軍を討つてその王を虜にした。

かくて魏を平定した韓信は、勝に乘じ趙を打たんと、平陽、揄次を經、大行山脈を越えて河北平地に進出、途上にある井陘口に迫まつた。その兵力約十萬。

趙では此の報に接し、兵二十萬を井陘口に集めて韓信を迎撃せんとした。この時軍議が開かれた。李左軍曰く、

韓信勝に乗じて進み來り、その勢當るべからざるものあり、されど井陘の道は狹くして車を並ぶるを得ず、馬を列するを得ず、故に其の輜重は遙か後方にあるべし。故に此の際主力を以て隘路口を堅固に守り、三萬の兵を間道より進めて敵輜重を襲撃すべし。十日を出でずして韓信の首を得ん。

と。主將陳餘は之に反對して曰く、

韓は兵少く、しかも遠來の疲れ多し、此の際もし避けて撃たざれば、諸侯は吾を怯なりと謂ふべし。詐謀欺計を用ふるは義人のなさゞる所なり、云々。

と稱して李左軍の計を用ひない。韓信はかねて敵軍中に派遣しある密偵により、此のことを知つて大いに喜び、輕騎二千に各赤旗を持たせ、間道より前進して趙軍の陣地近くに潛伏せしめ、敵の進出した機に乘じ窃かに其の陣地に突入し、趙の旗を引き拔いて漢の赤旗を立つべしと命じ、別に一萬人から成る一軍を泜水の前方に出した。

早朝のことでまだ食事前の時刻であつたが、韓信は趙軍を破つて後食事すべきを命じた。これこそ本當の「朝飯前」と云ふもので韓信の必勝信念の固きを知ることが出來る。

二千の潛伏隊及び一萬の背水先遣隊の出發したる後、韓信は主力を以て井陘の隘路を越え泜水を渡り、直に趙の陣地に向かつて攻撃を始めた。

韓信の旗鼓を見た趙軍は、時分はよしと一齊に出撃して來たので、こゝに兩軍の決戰となつたのであるが、暫くすると韓信は佯り敗れたふうをよそほひ、旗鼓を棄てて、後方の河岸に殘してあつた先進隊の所まで退却した。此の有樣を見た趙軍は、陣地を空にして追撃に轉じ、漢軍の棄てたる旗鼓を拾ひ取りながら韓信の本陣に迫まつて來た。

韓信は敗走して河岸にある先遣隊の所に至り、陣容を立て直し、背水の陣を布いて必死の奮鬪をしたので、趙軍の攻撃はつひに頓挫するに至つた。二千人の別働騎兵隊は、敵の暴進したのを見ると、かねて命ぜられた通り趙の陣地に突入し、趙の旗を拔いて代りに漢の赤旗を押し立てた。

趙軍は河岸における戰を斷念し、本據に還らんとして後方を振り向くと、意外にも自己の

陣地には既に漢の赤旗が飜々として翻つてゐるではないか。サア大變だと算を亂して遁げ始めた。そこで漢軍主力と別働隊とは共に進んで、敵を前後より挾撃し、殆どこれを殲滅し、その主將陣餘を斬り趙王を虜にした。

これが有名な韓信の背水の陣である。彼は何故此の如き冒險な陣を敢て採つたかと云へば、當時彼の軍隊は新募の兵で訓練足らず、且つ善く循撫してゐないので、わざと水を背にして死地に置き、決死奮闘せしめたのである。兵法に、之を死地に陥れて後に生き、之を亡地に置きて後に存すとあるは即ち此のことである。

それより韓信は東方齊に侵入し、更に南轉して垓下に在る項羽を攻撃することとなつたのである。

赤壁の戰

此の戰は三國志の壓卷であつて、讀む人をして血湧き肉躍らしめ、なか／＼興味の深い軍物語である。

奸雄といはれた魏の曹操は、天下を統一せんと、北、東一帶を征し、これより南方にある劉備、孫權を伐たんと、根據地開封の南なる許城を出でて南下した。襄陽附近にゐた劉備（玄德）は走つて今の漢口に至り、謀臣孔明をその下流九江に在る吳王孫權のもとに遣はして援兵を求めた。孔明說くに、吳と劉備と同盟して曹操に當るべきの利を以てしたが、孫權は未だなほ決せざるところがあつた。その時あたかも曹操から書面が來た。それは「我今水陸八十萬の大軍を以て南下す。來りて服するか、然らずんば戰へ」といふ、高飛車な脅し文句であつた。孫權は大いに驚き、早速軍事會議を開いた。

張昭曰く、曹操は豺狼のやうな豪雄である。しかも彼八十萬の大軍を擁して迫つて來る、我に於て拒むことは甚だ難い、殊に彼牛皮を以て船の腹背を掩ひたる戰闘艦一千あり、たうてい我の及ぶ所にあらず、思ふに、今日の大計は、出でて降るに如かずと、軟論を吐き出した。

これに對し魯肅、周瑜等は强硬論を主張して、今にして降服せんか必ずや國も身も共に亡びるであらう、曹操は漢の賊である。我が國はこれを倒して漢家の害を除かなければならぬ

魏兵八十萬と號するも、眞の兵は十五六萬に過ぎず、他は新附の衆にして狐疑の念を抱き、且つ南方の風土に慣れず、殊に水戰に弱い、我に精兵三萬あらばこれを擊破すること何の難きことあらん、と。孫權乃ちこの說を容れて進擊に決し、九江より遡江して漢口に至つた。

曹操は揚子江畔赤壁の北岸に陣した。この地は漢口の上流嘉魚附近にあつて、蘇東坡の舟遊びした漢口下流の黃岡附近の赤壁ではない。前者は嘉魚赤壁、後者は東坡赤壁と唱へられてゐる。

曹操は水陸に亙り蜒蜿たる陣を張り、水上には艦船を以て水塞を作り、警戒を嚴にし、調練を勵んだ。これは軍兵の多くは北方の出で水陣に慣れてゐない爲であつた。南軍も亦戰備に汲々としてゐたが、一日箭を獲んがため、孔明の謀を以て濃霧に乘じ、藁人形を戰兵に擬したものを滿載した小舟二十隻に、各〻兵士三十人宛を乘せ、伴つて夜襲を行ひ、敵をして矢を射させ藁人形で之を受け止め、一擧に約十萬本の箭を得て凱旋した。曹操は之を見て憤慨し追擊せんとしたが、兵の多くは船醉に罹つて運船意の如くならず、爾後鐵鎖を以て各船を繫ぎ合はせ、板を渡して甲板を作り、往復の行動に便にし、今度こそはと大いに軍容を整

へて戰機の到るを待つてゐた。

一日曹操は全軍を巡檢しようと、晝は馬に騎して陸兵を視、夜は水軍を閱した。時あたかも十一月十五日、風は靜かに浪は平であつた。彼は大船に座乘し、諸將を集めて船中に盛宴を開き、四方の雄大なる光景を眺めつゝ、已が功業について大氣焰を吐き、彼自ら槊を橫たへて詩を高誦した。その大要は、人生幾許ぞ、譬へば朝露の如きものである、過去を顧みれば慷慨すべきことが多い、しかも憂樂はすべて自分の心の持ちやう如何によつて定まる、今夜は月は明らかに星は稀で烏鵲南に飛び、何とも言へぬ感興の深い記念の夜である、かう云ふ時にこゝに宴を張つて述懷氣を吐くは英雄の快心事である、山は高きを厭はず、水は深きを厭はない、曾て周公は哺を吐いて天下を一に歸した、我亦手を上げ足をそば立てて天下の大業をなさん云々。諸將之に和し威風あたりを拂うた。

一方南軍にありては、三萬を以て八十萬の大敵に當るは事容易ならずとて、大將周瑜は部將黃蓋の意見を容れて火攻めの計を立て、一擧に雌雄を決せんと竊かに準備を整へ、南風の起るを待つてゐた。

其の法としては、牛皮を覆ひたる戰艦十隻に、乾いた萩やら枯草などを一杯に積み重ね、その上に油を十分に注ぎ、幕を以てこれを覆うてわからぬやうにし、上に旌旗を立て、輕舸をその尾に繋ぎ、黄蓋自らこれに乘り込み、帆を中江に擧げ、赤壁の南岸方面から北岸の敵水軍に向かひ詐り降ると云ひ送るのであつた。此の降伏のことは、黄蓋が豫め謀を設けて曹操と內約したものであつて、彼は全く欺騙されたのであつた。

たま〳〵東南の風が起つたので南軍は出動した。曹操の方では黄蓋降り來る、黄蓋降り來ると、皆營を出て河岸に立ち歡聲を擧げて見物した。その內黄蓋の船は曹操の艦隊から千四五百米の所に近づいた。その時、一齊に自分の船に火を掛けたのである。勿論乘組員は、各船に曳かれて來た輕舸に乘り移つて火を避けた。

枯燥した萩草に油をかけてあるのだから堪らない、風は強く火は烈しく、各船は見る〳〵うちに火達磨のやうになつた。しかも帆は風を受けて居るので、船の走ること箭の如く敵の艦船に向かつて突入した。此の火達磨のやうな十隻の大船が、北岸に繋いである何千何百と云ふ敵艦に打ち當ると、火は忽ちこれに燃え移つて行つた。

曹操の軍、今さら謀られたかと氣がついたが既に遲し、慌てふためきながら、艦船を避けようとしたが、船は皆互に鐵鎖や太綱で彼此繫ぎ合はせてあるので、容易に引き離すことが出來ない。たゞあれよ〳〵と云ふうちに、さしもの大艦巨舶も類燒に次ぐに類燒で、遂に悉く灰燼に歸し、その上、火は岸上の兵營にも及び、烟焰天に沖し人馬は悲鳴して右往左往、逃げ惑ふ慘狀目もあてられぬ有樣であつた。

南岸に立つてこの光景を眺めてゐた周瑜は、時こそ來れと主力を率ゐて江を渡り、北岸に上つて突擊した。雷鼓天地に轟き、北軍つひに殆ど壞滅に歸した。

曹操は當夜艦船にあつたが、周章狼狽し、僅かに身を以て免がれ、周瑜、孔明等は水陸より之を追ひ、退路に待ち伏せ、その來るを掩擊して之を殲滅した。曹操ます〳〵窮し、つひに遠く北方の領內に逃げ、許城の根據に歸り、『子を生まば吳の孫權の如くなるべし』と三嘆し、爾後再び兵を吳に加へるやうなことがなかつた。彼はよほど此の赤壁の戰敗に懲りたものと見える。時に紀元二百八年十一月二十日、我が朝の應神天皇の御代にあたる。

曹操大敗して歸つたが、もと〳〵奸雄のことであるから銳意復活に努め、玄德、孫權と天

下を三分して互に抗爭を續け、所謂三國時代となつた。

諸葛孔明と云へば我が楠木正成と同じやうに純忠至誠、且つ兵法に精通した偉人であつたことは、既に天下の定論である。今其の主なる戰法の概要を述べて彼の智略の一端を窺ふこととする。

孔明の計

漢末の支那は魏、吳、蜀の三國が分立して所謂三國時代となつた。そして北方の魏が最も強く、南の吳がこれに次ぎ、西の蜀は最も小であつた。

蜀の玄德が死んでその子の禪が立ち、魏の曹操も死んで明帝が立ち、吳は孫權が長く其の主權を握つてゐた。

玄德死するや、宰相孔明は吳と同盟して魏を打たんとした。そこで彼は史上有名な前出師表を上り、兵二十萬を提げて先づ漢中に至り、魏の領地である長安平野への侵入を策したのである。

ところが長安方面に進攻するのには漢中の東北に横たはる秦嶺を越えて行くか、漢中の北方斜谷道を通るかのどちらかであつた。諸將は魏軍の未だ到らざるに先だち、秦嶺の道を進んで長安を奪はんと主張した。孔明之を聽かずして、『危道なり、たとひ長安に進出し得ても後方に敵の在る以上は安んずること能はず、宜しく先づ渭水上流の要衝祁山を攻略し、然る後、陣容を整へて長安に向かふべし』と。進んで祁山城を圍んだ。

魏の國ではこれを聞き、取り敢へず張に郃兵五萬を附して赴き援けしめた。孔明これを知り、一擧に要擊せんと、一部の軍を殘して依然祁山の包圍に任ぜしめ、他は勇將馬稷を先鋒とし渭水に沿つて東進した。此の時孔明は、馬稷を戒しむるに、山地戰に於ては用水が最も大事である、水なき山上に陣して不覺を取る勿れと。而して祁山の北方約二十里の街亭といふ所で魏軍と遭遇した。然るに馬稷はどうしたことか、水なき山上に陣を取つた。魏將張郃どうしてこれを見逃すべき、直に水源を遮斷し、水に窮して困迷するところを猛襲して、馬稷の軍を散々に擊ち破つた。孔明の本軍も亦その卷きぞへを喰つて潰敗し、拾收すべからざる狀態となつて、命から〳〵漢中に逃げ歸つたのであつた。第一回の攻擊はかくて失敗に終

つた。無念遣る方なき孔明は、軍法に照らし、今まで我が子の如く愛撫してゐた馬稷をば涙をのんで斬つた。これが人口に膾炙してゐる孔明の「泣いて馬稷を斬る」の一段である。

第二回攻擊——第一回の攻擊に破れたる孔明は首都成都に歸らず、再び牙營を漢中に置いて捲土重來を期し、ひたすら軍の錬成と武備に全力を注いだ。呉の孫權また孔明に應じ、魏を脅威してあはよくば大別山附近一帶の魏の領土を攻略せんと屢々兵を長江以北に出した。故に魏どしては西方には孔明を控へ、南方には呉の出擊に會ひ、應接に遑なき有様であつた。

孔明は長安方面にある魏軍が南方呉の出擊に對し、兵力を移動したとの報に接し、好機逸すべからずと、後出師表を呈し、悲壯なる決意を以て進擊を開始し、今度は漢中より北進して渭水河畔の要衝陣倉城の攻略に取りかゝつた。然るに城兵は僅かに一千人に過ぎないが、高壘深溝に加へて頑強なる抵抗を敢へてし、容易に陷落しさうにない。

孔明すなはち雲梯を作つて城壁に登り、衝車を作つて城壁を衝き破り、大弩を並べて城中を射擊し、土瓦を放つて濠を埋め、坑道によつて城壁を覆さうとすれば、城兵は之に對し、火箭を放つて雲梯を燒き、石臼を落して衝車を毀ち、城壁を更に內側に新造して之に據り、逆に坑道を作つて攻坑を切斷するなど、全く楠公の千早城を想はしめるやうな要塞戰が繼續され、それが二十餘日も續いてなほ陷落しさうになかつた。其のうちに楚の援軍來り加り、その上味方の糧餉缺乏の惧があつたので、やむなく孔明は再び恨を呑んで漢中に歸らなければならなかつた。途中楚の追擊を受けたが、反擊してこれを殲滅した。かくしてこの第二回の攻勢も得るところなくして終つた。これは孔明軍の兵站部の行動が甚だ緩慢で其の機を逸したのが大きな原因であつた。

第三回攻擊——九仞の功を一簣に缺いた孔明は、又々漢中の根據に兵をまとめた。楚の方では、今度こそは孔明を徹底的に包圍攻擊しようと計畫を立てた。卽ち一軍を以て漢水を溯らしめ、一軍を子午河谷から、一軍を斜谷關から、一軍を大散關を越え嘉陵江の上流から、一軍を祁山を經て武都方面から、以上の五道を齊しく前進して、漢中にある孔明を包圍しようとする大規模の攻勢作戰であつた。

然るにそれには種々の議論があつた。一、各個に擊破せらるゝの危險あり、二、退路を遮斷せらるゝの懼れあり、三、糧食補給の困難あり等々紛々として收まらず、結局一代の怪傑

王莽が通過したことのある子午河谷から進入することに決し、曹眞が將となつて大軍を率ゐて押し寄せた。

かくと知つた孔明は漢中の東方約二十里の子午河と漢水上流の合流地點である成固といふ要所を占領し敵を待ち、其の隘路進出の出鼻を叩かうとした。

其の頃大雨頻りに至り、降り續くこと三十有餘日、子午河の溪谷の棧道は殆ど悉く墜ち、交通杜絕の有樣となり、敵軍は引上げてしまつた。そこで孔明も亦漢中の本營に歸り、第三回攻擊も空しく終つた。

第四回攻擊――翌年になると孔明は又々漢中から兵を出し、水牛を以て糧食を運び、第一回攻擊當時と同じく祁山城を圍んだ。

これに對し楚は、名將司馬仲達を總帥として孔明に向かはしめた。仲達は一軍を天水（祁山北方）附近に殘して後方を守らせ、自ら主力を以て祁山の救援に向かつた。孔明これを迎擊せんと前進し、仲達の先鋒と遭遇してこれを粉碎し、勝に乘じて仲達の本軍に押し寄せ、一擧に雌雄を決せんとした。戰利あらずと見た仲達は早くも決戰を避けて、山上の嶮に立籠つてしまつた。

此の嶮峻な山城を攻擊することになれば、戰鬪は自然持久戰となるので、孔明は糧食難を顧慮し軍を引いて退くと、仲達は山を下りて追ひ來り、孔明止まつて擊たんとすれば、仲達は再び山に上りて敢へて決戰せず、之を反復するうち互に逆襲したり、伏兵を設けたりして小競合を重ねたが、結局決戰の機なく、孔明は又々後方補給上の顧慮からして漢中の根據に引き上げた。

以上の如く波瀾重疊、一勝一敗の孔明と仲達の渭水上流山地における爭覇戰は、信玄、謙信兩雄の川中島の戰を想はしめるものがあつた。

第五回攻擊――その後、魏と吳との爭覇戰は每年のやうに大別山方面に行はれてゐた。此の間孔明は忘れたるが如く、眠れるが如く、死せるが如く三年啼かず飛ばず、一切の兵爭をやめてゐた。

彼は決して眠つてゐたのでもなく、忘れてゐたのでもなく、討魏の一念に燃え、再出征の準備をしてゐるのであつた。今度こそはと孔明は深く期するところあつて、兵を練り、武を

講じ、澤山の木牛流馬を造り、兵糧の倉庫を各要地に建て、最前線の城塞屯所を修理した。そしていよ〳〵西紀二三四年春二月、十萬の大軍を率ゐて漢中を出で、斜谷關を越え長安の平地に向かつた。

敵將仲達は渭水の南方地區に於て之を防がんと、背水の陣を布いて孔明の軍を待ち受けた。ところが孔明はこれを攻めずして、その西方の五丈原に出で、然る後、渭水北岸の孔軍を擊つたが、この敵は頑强に抵抗し、且つ逆襲にさへ轉じて來た。孔明この地において決戰の非を悟り誘致して擊滅しようとしたが、敵もさるもの、その手に乘らず、敵の總帥仲達も險山に據り持久して敢へて出ない。

そこで孔明は自給自足の方便を考へ、五丈原に陣し、其の附近一帶に兵を分けて屯田となし、且つ耕し且つ備へるといふ一石二鳥の策に出たのである。持久戰なれば糧食難に陷るから、其の補給策として此の屯田法を採つたのであるが、機さへあれば直ちに電擊的に進擊するの用意を怠らなかつた。

孔明は、深溝高壘にとりついてゐて出て來ない仲達をおびき出して擊たうと、彼に、優柔婦女子の如しと云ふ意味で、巾幗婦人の服を送つて怒らせようとした。されど仲達はなかなかのもので其の手に乘らない。

其のうちに不幸にも孔明病あり、一日々々と重くなるばかりであつた。彼は到底起たざるを知り、後主禪に表を上り、遺言を示して心殘りなく一切を處理したる後、終に軍中に歿した。年五十四、蜀の陣營肅として聲なく、五丈原頭、風は悲しみ草木もまた泣いた。

蜀軍十萬、一夜窃かに闇にまぎれ、孔明の遺骸を奉じ肅々として退却した。もとより喪は發しない。百姓、蜀軍の退却を報ず、果然今まで猫の如くであつた仲達は虎となり、猛然追擊に轉じた。蜀の一軍旗を反し、鼓を鳴らして逆襲の勢猛く敵を破つた。仲達は退き、又もや要害に嚙りついて敢へて追はうとしない。而して曰く『窮冠は追ふ勿れ』と。遙かに蜀軍の退却するのを見送るのであつた。世人之を見て『死せる孔明、生ける仲達を走らす』と稱した。

以上における支那の戰法を一括すれば、總大將は中堅となり、甲冑に身を固めて嚴然たる威容を示し、其の周圍に重い軍裝の步兵を集め、鼓手隊を大將の左右に控へさせる。そして弓矢、投槍を携へた輕裝步兵を左右兩翼及び前方に備へ、騎兵は其の兩翼並に後方に置いた